特20
13

賴山陽原著
池邊義象譯述

邦文日本外史

東京　郁文舍發行

明治
44. 2. 25
內交

東京帝室博物館御藏

許特寫模

文科大學史料編纂掛

日本外史第二　卷之二

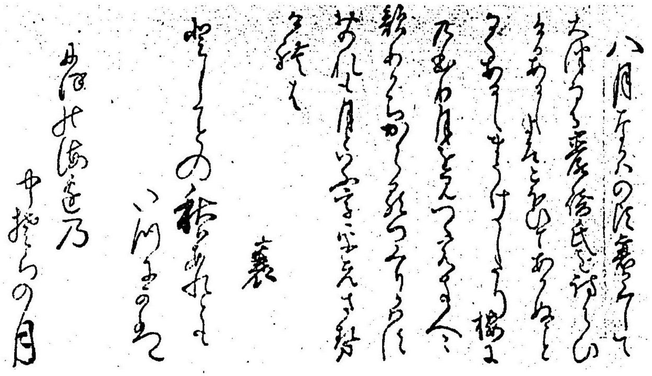
源氏正記

源氏下

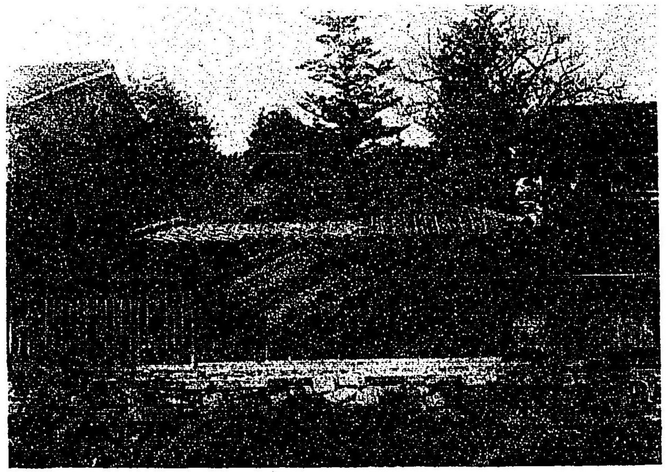
是月

壽永二年朝廷論功賞頼朝第一義仲第二敘義仲從四位下任左馬頭除越後守除行家備後守二人不悅更除伊豫守義仲前守聽院昇殿收平氏五百餘邑賜其百四十于義仲留衛京師也呼曰旭日將軍義仲生長信濃山野岑止粗鄙不任衣冠為京人所笑初以仁王子為僧奔越後稱北陸宮年十七義仲奉以入京師八月法皇以皇弟四宮京師無主議立天子卿相議於千皇弟叔五歲季四歲帝義仲屬

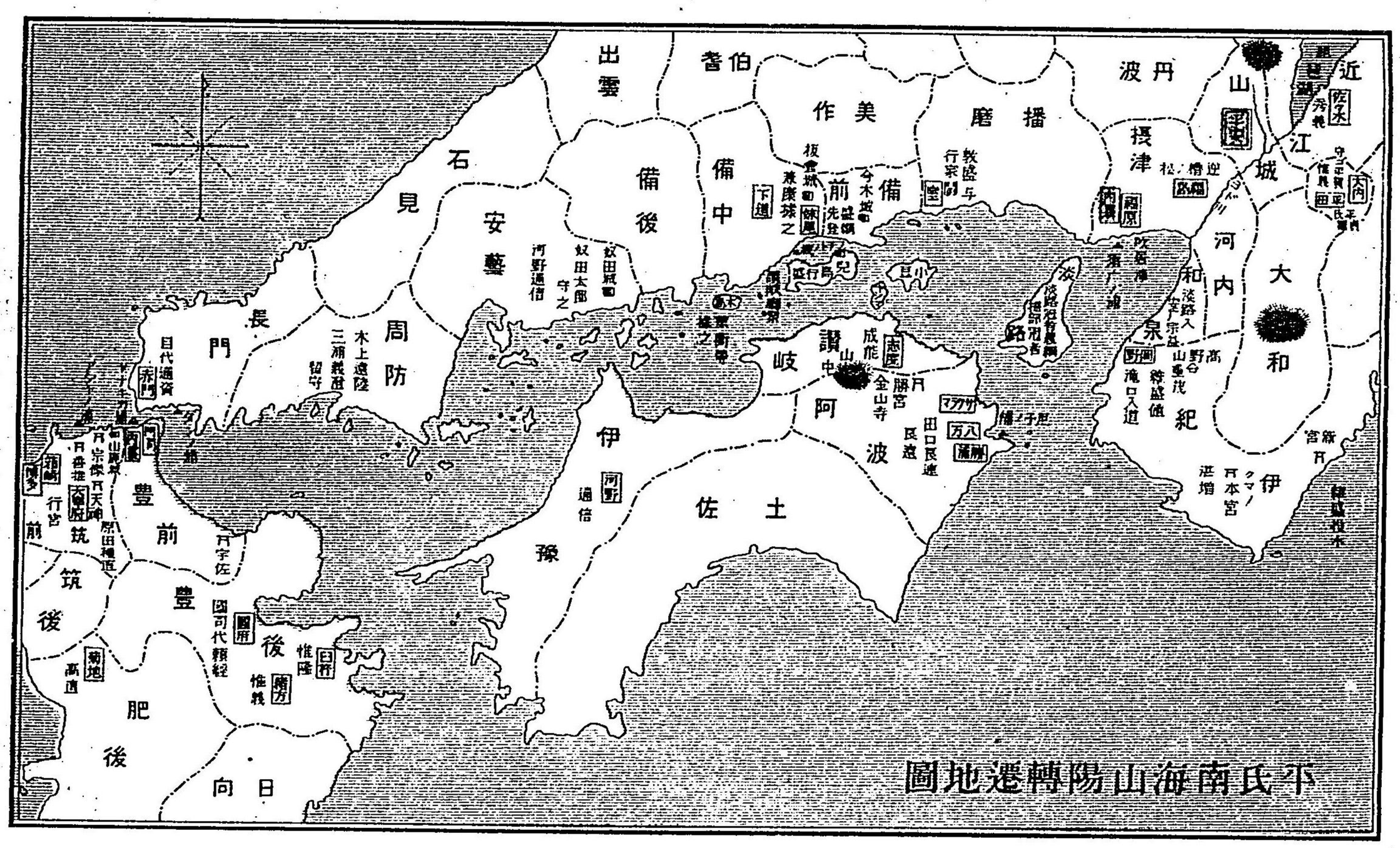
本書の原本は備中笠岡町生長小十郎氏の秘藏せらるゝものなれども然したる寫眞は東京帝國大學史料編纂掛御所藏にして該原本を寫し此寫眞なりそを特に生長氏及史料編纂掛の許諾を得て こゝに掲ぐ



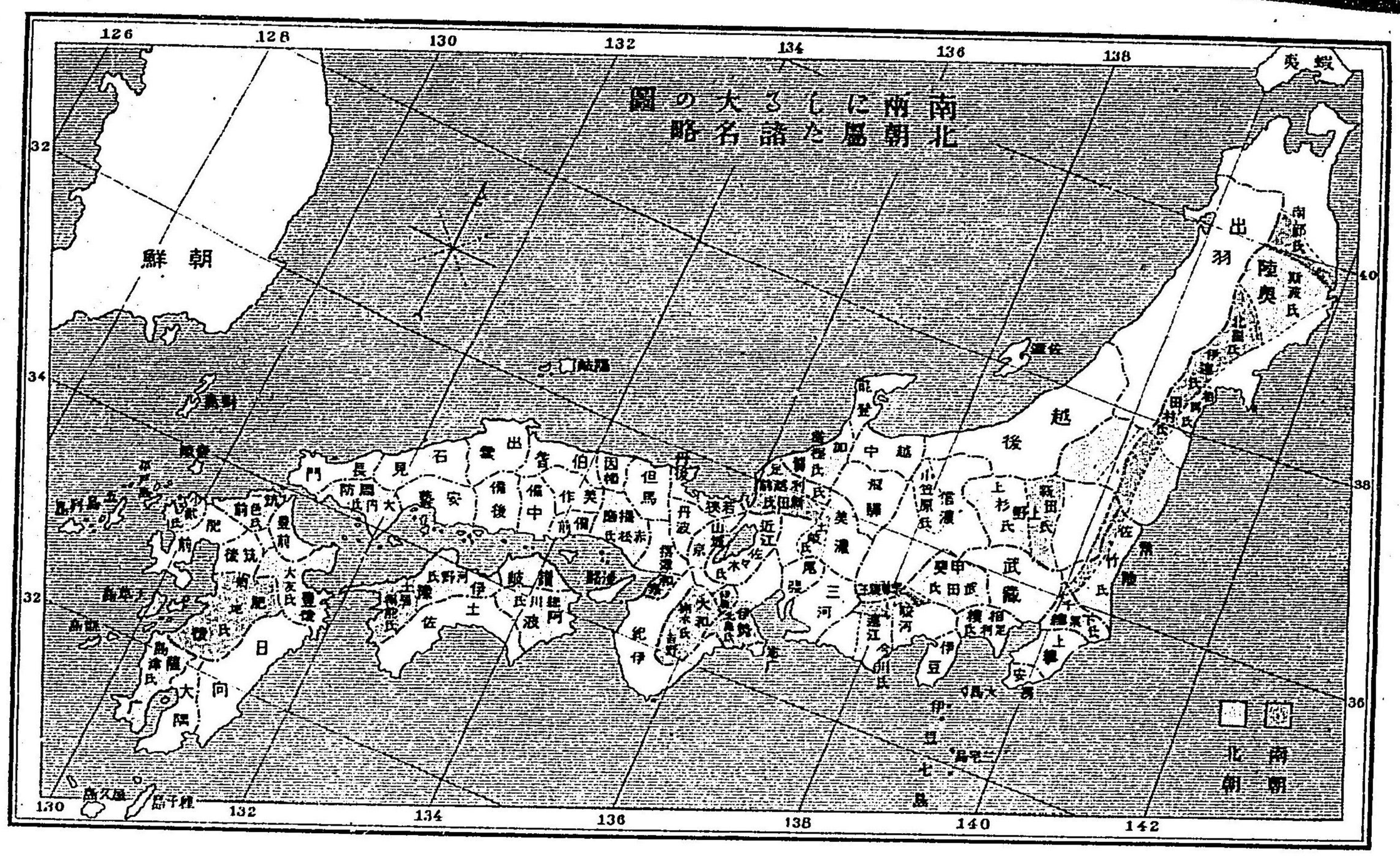
頼山陽筆蹟



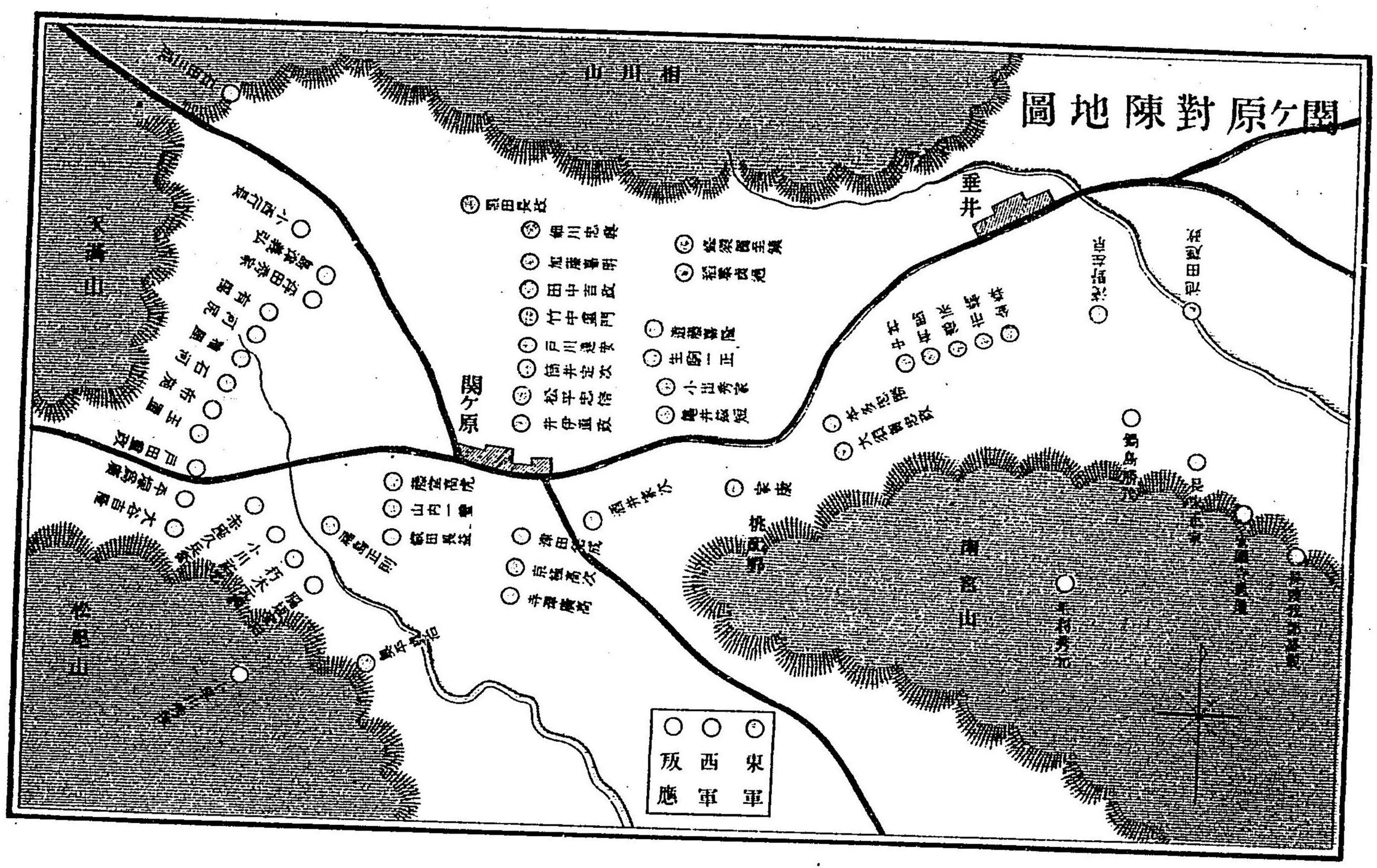
京都三本木頼山陽舊宅（山紫水明樓）


出雲
伯耆
作美
播磨
丹波
石見
安藝
備後
備中
備前
摂津
山城
近江
長門
周防
岐
讃
阿波
伊予
土佐
豫
大和
河内
和泉
紀伊
豊前
筑後
肥後
豊後
日向

平氏南海山陽轉遷地圖


南朝に属した諸国略名の大図
朝鮮
日向
大隅
薩摩
肥後
筑後
豊前
豊後
長門
石見
出雲
備後
備中
伯耆
因幡
但馬
丹後
若狭
山城
近江
美濃
飛騨
越中
加賀
越後
佐渡
出羽
陸奥
蝦夷
武蔵
上野
上総
下総
常陸
伊豆
駿河
遠江
三河
尾張
美濃
紀伊
伊勢
大和
摂津
和泉
河内
播磨
備前
備後
伊予
土佐
阿波
讃岐
伊豆七島
南朝
北朝

應仁乱京師地圖


關ヶ原對陳地圖
相川山
垂井
關ヶ原
南宮山
桃配野
松尾山
東軍
西軍
敗應

序

日本外史は日本の戰史なり武士道史なり内容斯の如くなるに山陽先生の識と文とを以てす宜なり此書の洽く行はるゝ事や凡そ我が戰史中源平二氏の鬪爭の如く派手なるものはなく南北朝史殊に楠公殉難の如く人をして勤王心を勃興せしむるものはなく群雄割據時代史の如く武士道の眞味の知らるゝはなく豐太閤の偉略の如く人をして快哉を呼ばしむるものはなし此書は實に是等の記事を種々の方面より觀察し評論しある處は長詩の如くある處は戲曲の如く最も趣味に富みたる筆力を馳せて自在に縱横に叙記せられたれば讀む人知らず〳〵先生に魅せらるゝに至る先生は實に識と文とを以て數世の後まで人を痲痺せしむるものなり

幕末有志の士雲の如く起りて盛に勤王論國を唱へし者の中には先生のこの書を讀みて感奮せしもの幾人そいはゆる爲朝、重盛、義經、正成、信長、秀吉、家康の如きこの書に依りてその名を知りその事を知りしもの幾人ぞかくいふ余の如きも實にこの書に依りて我が武士道史を知りし一人なり

考證學派起りて此書の流行一度は衰へたりと雖も此書は素よりさる方の史には非ず一種の氣概を本として詩の如く劇の如く書き綴りたる者なれば時勢は再この書の愛讀を促すに至れり蓋し未來永劫この書の世に忘らるゝ事は非ざらむ然れども今の青年諸士の學問に多忙なる專ら力を漢文に注ぐこと能はざるが故にかく趣味津々たる此書も隔履搔痒の感なきもの蓋し少からざるべし是この邦文日本外史を譯述せし所以なり

曩に大槻東洋氏の訓蒙日本外史あり近頃大町桂月氏の新譯日本外史ありと雖も本書は此等の二書とは自ら其趣を異にせり

凡そ外史の原本たる戰記物語の類近頃は活刷して得易く讀み易き書となれるもの多しと雖も青年諸士として是等を看破せんは頗る時日を要し結局讀まざるに畢るもの少からざるが如し故にこの書には其目ぼしき處には必ず是等の原文を擧げて外史の本文と共に併せ讀むやうにせりこれ原文と外史に約筆せるとを考へ知らしめん爲なり又筆蹟肖像戰爭地圖を挿入し且つ古來幾多の書より戰爭繪圖を縮寫し或は名所故蹟武具等の圖をも入れて本文の記事をして一層興味あらしめむことを圖れり讀者心を留めて本文と考へ合せなば先生の文と共に其味は忘れ難きものあらむこれ實に本書の特色なり

戰國時代を去ること遠き今の世には武士道の必要無きが如くに思ふ者もあらんがそは大なる間違なり日清日露の大役は實に武士道を以て捷てり將來かゝる戰役なかるべしと雖も武士道の精神鍛錬は平和時代とて決して等閑に附すべき者に非ず否々この武士道精神充滿して始めて世界の平和は保たるべし斯る點よりするも日本外史讀習の如きは余は青年諸士に奬めむとする者なりこれ此書は我が源平以來の戰史にして即ち我が武士道史なればなり玆に本書發刊に際して外史の尊重すべき所以と本書の特色とを述べて自ら序することかくの如し

本書譯述出版に付いては赤堀又次郎氏及び上野竹次郎氏力を致されしこと多し玆に附記して之を謝す

明治四十四年一月　　譯述者しるす

布衣頓首謹再拜白

少將樂翁公閣下。蘇嘗讀朱蘇轍上韓魏公書。愛之。以爲人人進言於當世王侯者。大抵有求而自售。識者所醜。獨轍偉魏公人物。比之名山大川。欲接其言貌。以養己作文之氣。言雖近狂。其澹泊無求可知也。雖然。魏公是時猶當路秉權。人將疑轍之有求焉。

閣下。今代之魏公也。而勇退高蹈。久處閑地。使蘇學轍所爲。可以無嫌矣。特貴賤懸絶。不啻如轍於魏公。則徒仰而心醉之而已。今玆。

尊嫡君侯膺

幕命。入朝謝

大拜之恩。蘇伏在草莽。側聞盛事。而不圖邸吏帶

閣下之命。來就蘇家。取所著私史。欲賜　覽觀。禮意慇懃。愧悚交至。夫蘇不敢求於

閣下。而

閣下求於蕃蕃之榮大矣。復何所嫌而辭避乎。雖未接　謦欬。聞　其詞命。亦可以自壯。於是忘其蕪穢。出以納下執事。又敢有所瀆告。輒書稱史遷文有奇氣。他日自作古史。則論遷之疎略。輕信淺陋無識。夫遷官太史。總領天下文籍。猶不免疎略之譏。況如蕃以寒陋一書生。獨力罔羅古今。其不自揣而招大方嗤笑。必也。然少小嗜讀國乘。每病常藩史之浩穰。又恨其有闕。至近代之事。與夫

隆治之所由。非無先輩撰著。又未有晰其端緒。綜各家終始者。於是私倣遷史世家而加詳備。斷自源平氏。至於　今代。間以中興諸將及剿據羣雄關係治亂者。家別紀之。或錯而合之。要覽其成敗盛衰之狀。與臣屬謀戰忠邪之跡。取其大體最明確者。若夫博引旁搜雜折鎔鉄。世自有其人。以爲非蕃所及也。至其義例。蓋亦有貽淺陋之嘲者。事繫

一姓之下。而不有統紀以總之。列將家而雜以雄長。與

今代而稱謂論說。如欠尊崇者。是自有說焉。夫右族迭興。甲起乙仆。以成海宇之沿革。而不必關於

王室者。我中世以還之國勢也。故依實創體。以形世變。而其中貫以

帝系年號。以表條理。至大義所繫。必用特書。雖則權豪於元帥。隨成敗次第。而因署題以見統屬。而載之事實。名分截然。讀者自能見之。至若　今代稱謂。則謹據奕葉名爵天下公行之稱。名實輕重。按跡可知。不敢私撰名號。以顯　今代而眯後世耳目。閱首至尾。睹其得失之相形。明其分裂統合之所漸。則今日無前之功德。有不待言者。又不敢喋喋頌贊使人疑其諛與媚。自謂敬之至也。凡是蕃區區撰述之本意。不可不爲閣下一言之。野人朴直以所謂無求之心著書。取其簡約。自便省覽。始非謀公之世也。所以引据剪裁。皆成一家私乘之體。至寫錄體貌。又一倣古史。不肯學輓近之文縟。是以拮据二十餘年。藏之篋笥。未嘗示人。今乃得

閣下之寓目。以取信於天下後世。眞意外之幸也。蕃雖無求於今日。而不無求於千百載。非經

大賢之鑒識。不足以保其傳也。然苟得流傳。不別今與後。其損益於世道人心。尤不可不加謹。蠹也病贏。不能效力父母之邦。況敢望有益於世。然生遭此極盛之運。以其庸陋之筆墨。稗補萬一焉。則不負爲太平之民也。蘇轍謂魏公。苟以爲可。敎而敎之則幸矣。閣下其亦有以敎蠹焉。冒瀆尊嚴。惶懼無已。

文政十年。丁亥。五月。廿一日。布衣賴蠹謹再拜白。

邦文日本外史目次

卷之一　源氏前記平氏　一

評論（一）
平氏系圖（八）
平將門（一〇）
藤原純友（一一）
天慶亂（一一）
忠盛（一三）
祇園女御（一七）
保元亂（一九）
平治亂（二〇）
處合會合（三六）
清盛述懷（四〇）
重盛諫言（四一）
治承亂（五七）
富士河陣（六八）
南都討伐（七〇）
清盛遺言（七二）
賴朝上書（七三）
追討使發遣（七四）
德原合戰（七六）
平氏四奔（七八）
一谷合戰（一〇〇）
重衡東下（一〇七）
屋島合戰（一一三）
壇浦合戰（一一五）
一門討滅（一二四）
平氏餘黨（一二五）
評論（一二七）
保元亂（一六〇）
爲朝末路（一七四）
平治亂（一七七）
義朝敗走（一八〇）
賴朝敗走（一八八）
賴朝遺流（一九〇）
常磐の前（一九〇）
牛若東下（一九三）
山徒神輿振（一九六）
賴政謀亂（一九八）
八牧合戰（二〇五）
石橋山合戰（二〇八）
鎌倉建府（二一二）
富士河陣（二一三）
賴朝と義經（二一五）
木曾義仲（二一七）
粟殼谷合戰（二二〇）

卷之二　源氏正記源氏上　一四一

源氏系圖（一四一）
安和の變（一四三）
忠常の亂（一四四）
安倍氏系圖（一四五）
前九年役（一四六）
賴義上洛（一五一）
藤原氏系圖（一五三）
後三年役（一五四）

卷之三　源氏正記源氏下　二二三

義仲亡狀（二二六）
名馬池月（二二七）
宇治川先登（二三〇）
義仲逆討（二四〇）
義仲妾巴（二四一）
義仲戰死（二四三）
一谷攻戰（二四八）
鵯越逆落（二五〇）
範朝四伐（二六〇）
義經發程（二五七）
逆櫓の爭（二五七）
屋島攻戰（二五九）
宗高射扇（二六〇）
嗣信忠死（二六一）
壇浦合戰（二六五）
景時の讒（二六八）
腰越狀（二六八）
堀川邸夜襲（二七四）
賴朝追討宣（二七九）
義經西奔（二八〇）
廢元建號（二八〇）
忠信忠死（二八三）

義經北走（二八三）　頼家嗣立（二九六）
義經妾靜（二八四）　時政の計（二九九）
衣川合戰（二八八）　實朝繼承（三〇〇）
奥羽鎮撫（二九一）　公曉企謀（三〇七）
頼朝入朝（二九二）　評　論（三一〇）
範頼失官（二九四）

卷之四　源氏後記北條氏　三一七

評　論（三一七）　三浦光村（三六二）
北條氏系圖（三一〇）　時頼（三六四）
頼家の行狀（三一七）　青砥藤綱（三六五）
義時（三一八）　時宗（三六七）
頼家圖北條（三一九）　文永弘安役（三六八）
義盛謀叛（三二三）　貞時（三六九）
後鳥羽上皇（三二四）　高時暴狀（三七一）
承久亂因（三二七）　南北朝分立（三七四）
鎌倉平定（三二九）　後醍醐天皇（三七五）
宇治川合戰（三四八）　鎌倉攻伐（三八二）
三上皇遷幸（三五二）　北條氏滅亡（三八三）
泰時の人物（三六〇）　評　論（三八七）

卷之五　新田氏前記楠氏　三九五

北畠氏　菊池氏　名和氏
兒島氏　土居氏　得能氏
評　論（三九五）　建武中興（四四八）
楠氏系圖（四〇〇）　天馬（四四九）
兩統更立（四〇一）　藤原藤房（四四九）
無　謂（四〇二）　尊氏謀叛（四五三）
笠置行幸（四〇六）　北畠氏系圖（四五五）
楠の靈夢（四〇七）　高　德（四五八）
正成奉詔（四〇八）　正成建策（四六〇）
赤坂城（四一〇）　櫻井驛訣別（四六〇）
隱岐遷幸（四一二）　兵庫激戰（四六五）
兒島高德（四一六）　正行圍自殺（四六七）
天王寺陣（四一九）　北畠顯家（四七一）
赤米記拔（四二〇）　後醍醐崩御（四七三）
千早城（四二三）　住吉合戰（四七七）
主上遁隱岐（四二三）　正行參內（四七八）
名和氏系圖（四二七）　四條畷合戰（四八〇）
船上合戰（四二九）　正　忠（四八六）
天皇遷幸（四四一）　菊池武光（四八七）
菊池氏系圖（四四三）　正儀正武（四八八）
菊池武時（四四四）　評　論（四九五）
土居得能（四四八）

卷之六　新田氏正記新田氏　五〇一

評　論（五〇一）　義貞擧兵（五〇九）
新田氏系圖（五〇五）　稻村崎（五一一）
護良親王（五〇七）　護良禁囚（五一七）

護良弑さる（五二一）　金崎龍城（五五〇）
尊氏の八卯（五二三）　金崎落城（五五三）
延元元年戰（五三一）　義貞戰死（五六〇）
足利勢攻上（五三五）　勾當內侍（五六五）
湊川合戰（五三七）　畑時能（五六七）
叡山臨幸（五三九）　義宗（五七二）
洛中苦戰（五四一）　義興義治（五七一）
天皇遷幸（五四三）　評　論（五七六）
義貞北行（五四四）

卷之七　足利氏正記足利氏上　五八三

足利氏系圖（五八三）　土岐頼遠（六一〇）
直義の謀（五八七）　足利氏恩威（六一二）
尊氏歸京（五八七）　高兒弟暴狀（六一五）
尊氏歸京（五八七）　足利高不和（六一六）
六波羅攻（五八八）　兄弟再不和（六二〇）
護良と尊氏（五九〇）　楠氏攻京師（六二一）
尊氏擁鎌倉（五九一）　義　滿（六三三）
義貞と尊氏（五九一）　童　坊（六三四）
尊氏決志（五九三）　六分一氏（六三七）
京師戰亂（五九四）　滿宰謀反（六三九）
足利氏西下（六〇一）　明德の役（六四〇）
錦旗を建つ（六〇三）　神器の授受（六四八）
東寺陣（六〇四）　臨永の役（六五〇）
尊氏上皆書（六〇五）　明の使節（六五三）
官軍攻鎌倉（六〇七）
義貞戰死（六〇八）

卷之八　足利氏正記足利氏中　六五五

南朝遺臣（六五六）　義教殺さる（六六九）
三管四職（六五六）　滿祐討伐（六七〇）
兩上杉（六五七）　持國と持豐（六七四）
三管八頭（六五七）　義政奢侈（六七七）
細川氏系圖（六五七）　義就討伐（六七七）
上杉氏憲（六五八）　義尙（六七八）
赤松滿祐（六六〇）　義敏と貞親（六七九）
義教（六六一）　義廉と持豐（六七九）
持氏討伐（六六三）　義就擧兵（六八三）
結城氏朝（六六五）　政長出兵（六八四）
義　昭（六六五）　勝元の兵（六八四）
嘉吉の役（六六六）　持豐の兵（六八六）
滿祐怨（六六八）　應仁の大亂（六八六）

卷之九　足利氏正記足利氏下　六九五

東西解陣（六九五）　細川藤孝（七一八）
太田持資（六九七）　義　昭（七一七）
三好長慶（七〇九）　評　論（七二二）
三好三黨（七一四）

卷之十　足利氏後記後北條氏　七三一

評　論（七三一）　北條氏系圖（七三六）

長氏大志（五三八）　氏康の書辭（五五八）
長氏恩顧（四一）　長尾輝虎（六〇）
小田原攻略（四三）　輝虎來攻（六〇）
三浦攻伐（四五）　鴻臺の役（六二）
氏綱（四七）　晴信來襲（六四）
上杉氏系圖（五〇）　氏政（六六）
氏綱の性行（五一）　小田原大役（六七）
河越（五四）　評論（七七）

卷之十一　足利氏後記武田氏上杉氏　七八一

武田氏系圖（八一）　河中兩雄士（八一三）
信虎攻海口（八三）　定行忠死（八一三）
晴信自立（八四）　三形原合戰（八二三）
信形諫言（八五）　旗鉾孫子語（八二五）
山本勘助（八五）　諫信西伐（八二七）
晴信號信玄（八七）　勝賴圍長篠（八二八）
土杉氏系圖（八九）　諫信書狀（八三三）
上杉景虎（九〇）　上杉景勝（八三五）
景虎就職信（九一）　天目山（八四三）
義清據諫信（九三）　景勝伸凱（八四八）
河中島（九四）　大阪役（八五一）
諫信入朝（八〇四）　評論（八五四）

卷之十二　足利後記毛利氏　八五九

毛利氏系圖（八五九）　元就勤王（八八三）
元就（八六二）　信長西伐（八九一）
吉川氏（八六七）　輝元緯和（九〇八）
小早川氏（八六七）　秀吉南伐（九〇九）
隆景元春（八六七）　隆景華押論（九一三）
元春娶醜婦（八六八）　朝鮮征伐（九一三）
全姜賦義堅（八六九）　碧蹄驛（九一三）
元就賜詔（八七三）　吉川廣家（九一六）
嚴島城（八七三）　關原役（九一九）
嚴島合戰（八七四）　評論（九二五）

卷之十三　德川氏前記織田氏上　九二九

評論（九二九）　信長入朝（九五七）
織田氏系圖（九三五）　內裏修拓（九五九）
信秀（九三七）　淺井朝倉（九六一）
信長幼時（九三九）　姉川役（九六四）
政秀諫死（九三九）　一向宗僧徒（九六五）
信長面秀龍（九四〇）　叡山を焚く（九六八）
桶狹合戰（九四六）　信長上書（九七一）
立入宗繁（九四九）　槙島合戰（九七四）
信長奉勅（九五〇）　足利氏に代る（九七五）
信長擁將軍（九五五）

卷之十四　德川氏前記織田氏下　九七九

成政と聞る（九七九）　家康を輔く（九八〇）

長篠合戰（九八四）　信忠（一〇一二）
柴田勝家（九八五）　信長性質（一〇一三）
名家の姓（九八七）　蒲生賢秀（一〇一四）
安土城（九八七）　明智氏亡ぶ（一〇一五）
大阪攻擊（九八八）　清洲會議（一〇一七）
松永久秀（九九〇）　賤岳合戰（一〇一八）
四伐（九九三）　勝家最後（一〇一〇）
大阪降る（九九六）　小牧戰（一〇一三）
傳家の茶鑑（九九九）　秀吉媾和（一〇一三）
武田氏攻伐（一〇〇一）　關原役（一〇一九）
瀧川一益（一〇〇三）　信雄（一〇二〇）
明智光秀（一〇〇三）　長益（一〇二一）
光秀謀叛（一〇〇六）　評論（一〇二二）
本能寺變（一〇〇七）

卷之十五　德川氏前記豐臣氏上　一〇三七

豐臣氏系圖（一〇三七）　別所長治（一〇四一）
日吉丸（一〇三八）　荒木村重（一〇四二）
信長に仕ふ（一〇三九）　本能寺の變（一〇四七）
清洲城修理（一〇四〇）　秀吉媾和（一〇四七）
藤吉結婚（一〇四一）　山崎會戰（一〇四〇）
家族を率る（一〇四五）　光秀殺さる（一〇四〇）
千瓢馬表（一〇四八）　江北の戰（一〇六九）
四征大將（一〇四九）　大阪城（一〇七一）
秀吉の宿志（一〇四九）　小牧長湫戰（一〇七八）
四國征伐（一〇八一）　北條氏政（一〇九八）
北伐（一〇八三）　迷信を破る（一一〇〇）
九州征伐（一〇八八）　小田原攻伐（一一〇四）
聚樂行幸（一〇九三）

卷之十六　德川氏前記豐臣氏中　一一三

秀吉の大志（一一三）　長政諫言（一一四）
征韓を企つ（一一四）　殺生關白（一一五）
征韓の部署（一一七）　大地震（一一五）
清正と行長（一一九）　清正登城（一一五）
那古耶陣（一一〇）　明韓使至る（一一六）
全羅上陸（一一一）　裂封冊（一一六）
韓王奔る（一一三）　再征（一一六）
明の援軍（一一九）　水軍（一一六）
行長破明軍（一一〇）　蔚山籠城（一一七）
清正進軍（一一〇）　籠城の苦心（一一七）
二王子生擒（一一一）　秀吉遺言（一一七）
明和を欲す（一一三）　在韓士召還（一一八）
明の旋略（一一五）　島津氏の軍（一一八）
平壤合戰（一一六）　加德島戰（一一八）
清正答辭（一一九）　清正と三成（一一八）
碧蹄館激戰（一一〇）

卷之十七　德川氏前記豐臣氏下　一二八九

德川家康（一二八九）　細川忠興（一二九〇）

家康東下（一二九三）　淀君の憤恚（一二九九）
三成の計（一二九六）　大阪兵備（一三〇〇）
關原合戰（一三〇〇）　幸村述懷（一三〇二）
四將敗走（一三〇一）　和議成る（一三〇二）
淺野幸長（一三〇三）　木村重成（一三〇三）
秀家の臣（一三〇四）　周地を埋む（一三〇五）
福島正則（一三〇八）　秀頼の指揮（一三〇五）
清正退三諫（一三一三）　幸村の奮戰（一三〇九）
秀頼來京師（一三一三）　大阪落城（一三〇八）
方廣寺の鐘（一三一七）　高野寺（一三五五）
二女と且元（一三一八）　評論（一三五五）

卷之十八　德川氏正記德川氏一　一二六一

德川氏系圖（一二六〇）　家康歸國（一二六〇）
德壽（一二六四）　信長と盟ふ（一二六六）
清康（一二六七）　一向宗徒（一二九一）
英章（一二六八）　姉川戰（一三〇四）
安倍川石戰（一二九九）

卷之十九　德川氏正記德川氏二　一三〇五

本多忠勝（一三〇七）　酒井忠次（一三一九）
三形原戰（一三〇九）　三氏盟約（一三一七）
長篠合戰（一三一七）　光秀の亂（一三二〇）
島原勝高（一三一七）　甲信略定（一三二五）

卷之二十　德川氏正記德川氏三　一三二七

小牧山合戰（一三二九）　板倉勝重（一三六六）
長湫合戰（一三三三）　重次罵晉（一三四三）
佐々成政（一三三〇）　小田原攻伐（一三四四）
本多重次（一三三一）　江戸に營す（一三五一）
眞田昌幸（一三三四）　秀次殺さる（一三八八）
秀吉媾和（一三三七）　伊達政宗（一三八九）
家康西上（一三三二）　家康直言（一三九一）
秀吉の母（一三三二）　諸雄怨靜（一三九三）
本多重次（一三三三）

卷之廿一　德川氏正記德川氏四　一三九七

三成と長盛（一三九七）　家康東伐（一四一一）
細川忠興（一三九八）　島津元忠（一四一一）
前田利家（一四〇一）　吉隆と三成（一四一四）
家康到大阪（一四〇一）　清正と孝高（一四一六）
諸奉行密議（一四〇三）　忠興の夫人（一四一七）
忠興と三成（一四〇四）　西軍東下（一四一七）
七將と三成（一四〇五）　福島正則（一四一〇）
三成據家康（一四〇五）　秀康（一四一一）
上杉景勝（一四〇六）　山内一豐室（一四一五）
三成と彈正（一四〇八）　眞田父子（一四一六）
家康入四城（一四〇九）　伏見落城（一四一八）
景勝謀叛（一四一〇）　織田秀信（一四一一）

家康の前軍（一四一三）　田邊籠城（一四一九）
岐阜城陷落（一四一四）　諸將封土（一四二一）
秀忠發程（一四一七）　本願寺僧徒（一四一七）
家康發程（一四一八）　利長參勤（一四一九）
赤阪の屯（一四一八）　榊原康政（一四二一）
西諸將軍議（一四一九）　禁庭修拓（一四二六）
西軍陣立（一四一九）　朝鮮入貢（一四二八）
東軍の部署（一四一九）　琉球征伐（一四二九）
毛谷主水（一四一九）　名古屋城（一四二一）
關原會戰（一四一八）　禁耶蘇教（一四二四）
四軍大敗（一四二〇）　大久保忠鄰（一四二六）
秀忠至る（一四二〇）　經典刊行（一四二八）

卷之廿二　德川氏正記德川氏五　一四九一

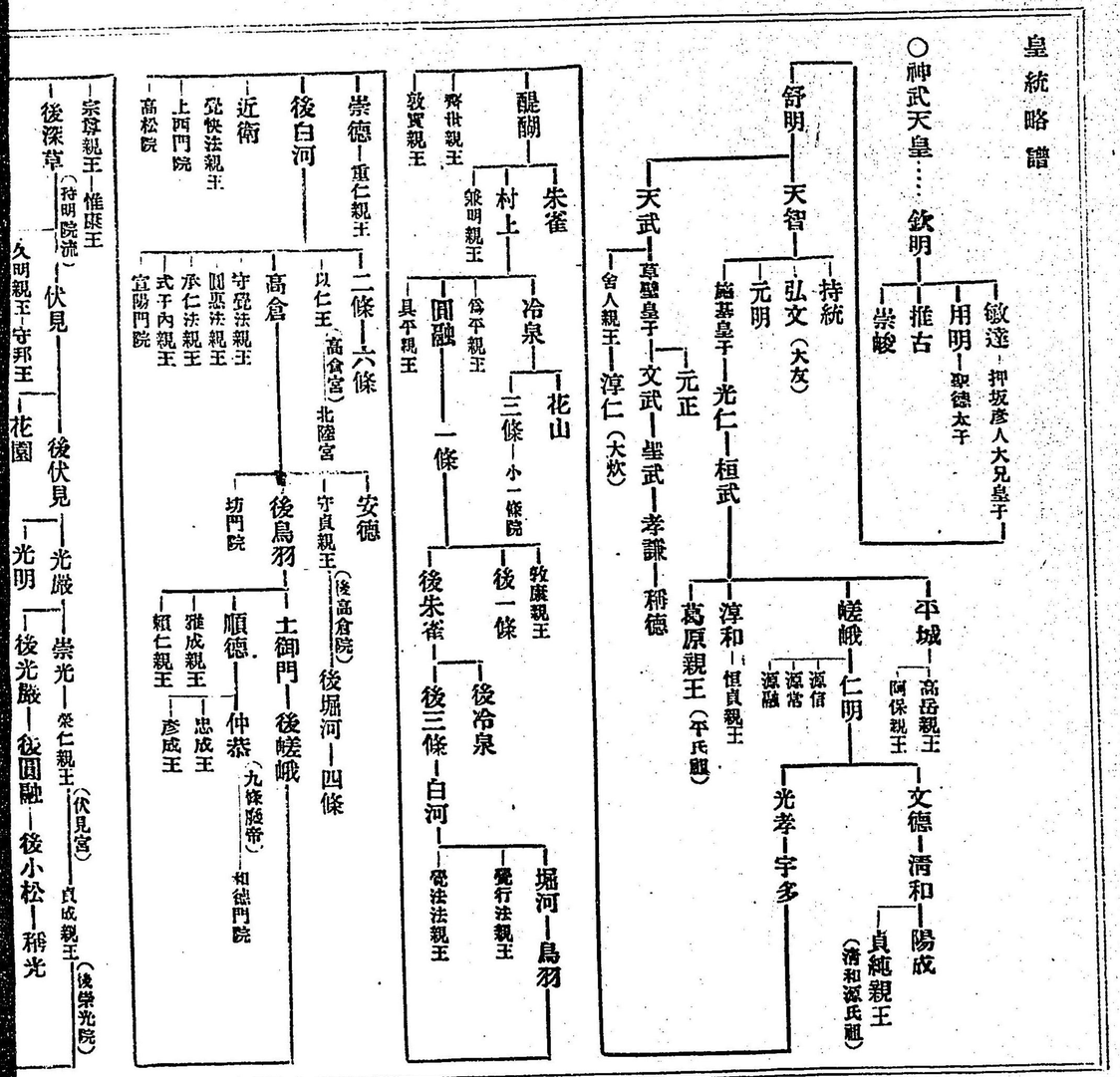
淀君と治長（一四九一）　東軍の部署（一五一三）
片桐且元（一四九一）　城兵の部署（一五一四）
鐘の銘（一四九二）　大阪落城（一五一七）
且元の三策（一四九三）　頼宣（一五一八）
大阪募兵（一四九四）　豐臣氏亡ぶ（一五一〇）
大阪陣（一四九五）　新式十三條（一五一三）
和成る（一五〇五）　朝廷式（一五一三）
堅を填む（一五〇六）　忠輝（一五一四）
井伊直孝（一五〇八）　家康遺言（一五一六）
大阪募客兵（一五〇九）　家康逸事（一五一八）
道明寺口戰（一五一五）　秀忠逸事（一五一九）
名臣多し（一五一八）　明暦大火（一五一六）
松平信綱（一五一八）　評論（一五一七）
松平正之（一五二〇）

邦文日本外史目次　終

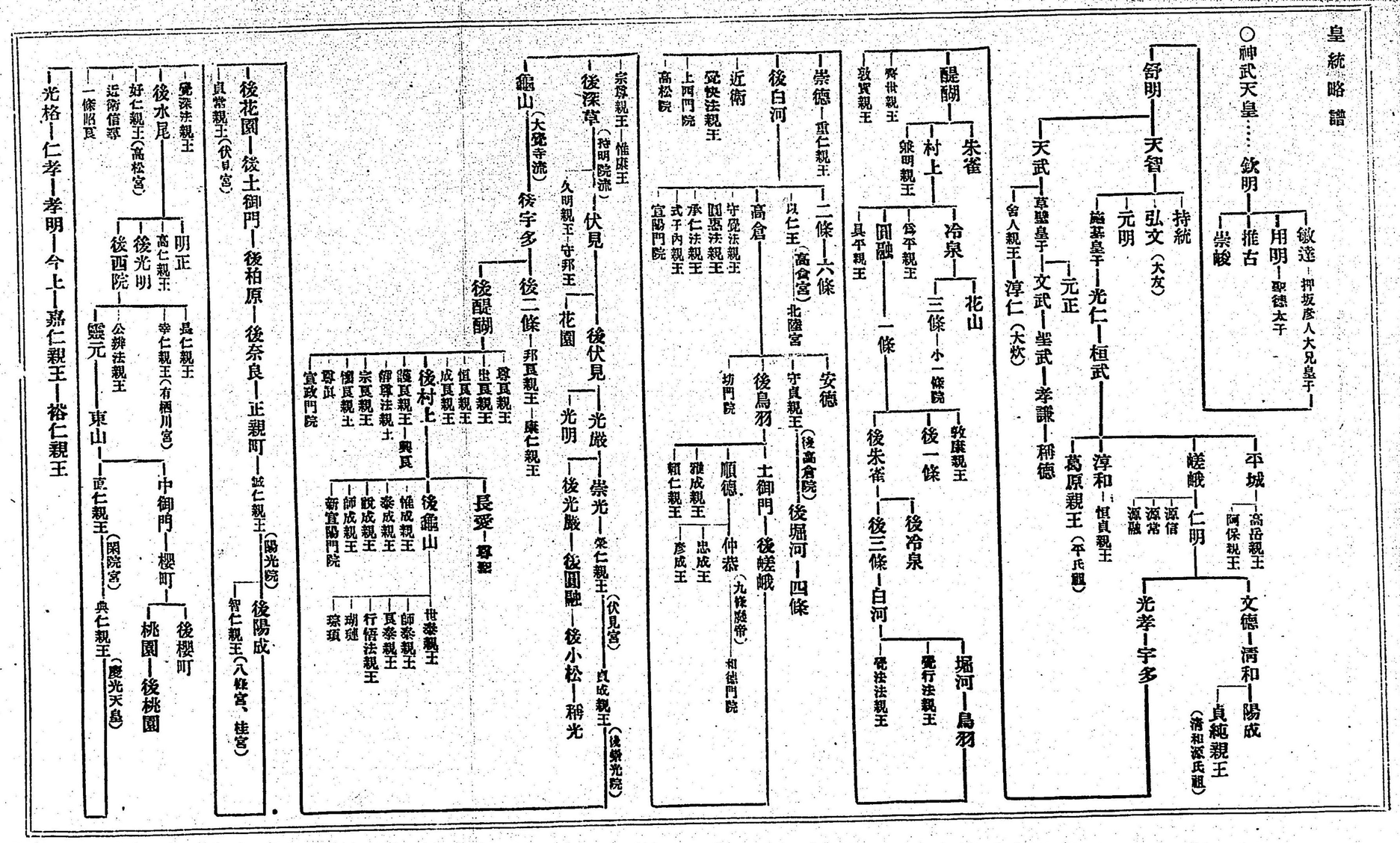
謁楠河州墳有作　　賴山陽

東海大魚奮鬣尾、蹴起黑波汗瀚辰、隱嶋風雲重慘毒、六十餘州總鬼
虺、誰將隻手排天氛、身當百萬哮闞群、揮才擬回虞淵日、執臣同厭即
墨雲、關西自有男子在、東向寧爲降將軍、旋乾轉坤苔值遇、洒掃輦道
迎鑾輅、論功唯陽最有力、覆稱李郭安天步、出將入相位未班、前狼後
虎事復艱、獻策帝閽不得遂、決志軍務豈生還、且餘兒輩繼微志、全家
血肉殲王事、非有南柯存舊根、偏安北闕向何地、攝山逶迤海水碧、吾
來下馬兵庫驛、想見訣兒呼弟來、戰此刀折矢盡臣事畢、北向再拜天
日陰、七生人間滅此賊、碧血痕化五百歲、茫茫春蕪長大麥、君不見君
臣相圖骨肉相吞、九葉十三世何所存、何如忠臣孝子萃一門、萬世之
下一片石、留無數英雄之淚痕、

皇統略譜



皇統略譜


○神武天皇……欽明
敏達
押坂彦人大兄皇子
用明
聖德太子
推古
崇峻
舒明
天智
持統
弘文（大友）
元明
聞基皇子
光仁
桓武
天武
草壁皇子
舍人親王
淳仁（大炊）
文武
聖武
孝謙
稱德
元正
醍醐
朱雀
村上
齊世親王
敦實親王
兼明親王
冷泉
爲平親王
具平親王
三條
小一條院
花山
圓融
一條
敦康親王
後一條
後朱雀
後冷泉
後三條
白河
堀河
鳥羽
覺法法親王
覺行法親王
崇德
重仁親王
後白河
二條
以仁王（高倉宮）
六條
高倉
安德
守覺法親王
圓惠法親王
承仁法親王
式子內親王
宣陽門院
高松院
近衛
北陸宮
守貞親王（後高倉院）
後鳥羽
後堀河
四條
坊門院
土御門
後嵯峨
順德
仲恭（九條廢帝）
雅成親王
忠成王
仁親王
彥成王
和德門院
平城
高岳親王
阿保親王
嵯峨
仁明
源信
源常
源融
文德
清和
陽成
光孝
宇多
貞純親王（清和源氏祖）
淳和
恒貞親王
葛原親王（平氏祖）
宗尊親王
惟康王
後深草（持明院流）
伏見
後伏見
光嚴
崇光
榮仁親王（伏見宮）
貞成親王（後崇光院）
久明親王
守邦王
花園
光明
後光嚴
後圓融
後小松
稱光
龜山（大覺寺流）
後宇多
後二條
邦良親王
康仁親王
後醍醐
尊良親王
尊澄親王
恒良親王
成良親王
忠良親王
後村上
後龜山
長愛
尊聖
護良親王
興良
惟成親王
泰成親王
說成親王
師成親王
新宣陽門院
世泰親王
師泰親王
良泰親王
行信法親王
珊璡
琮瑣
宗良親王
懷良親王
尊良
宣政門院
後花園
後土御門
後柏原
後奈良
正親町
誠仁親王（陽光院）
後陽成
貞常親王（伏見宮）
智仁親王（八條宮、桂宮）
覺深法親王
後水尾
明正
高仁親王
好仁親王（高松宮）
後光明
幸仁親王（有栖川宮）
近衛信尋
後西院
長仁親王
一條昭良
靈元
公辨法親王
東山
中御門
櫻町
直仁親王（閑院宮）
桃園
後櫻町
後桃園
典仁親王（慶光天皇）
光格
仁孝
孝明
今上
嘉仁親王
裕仁親王

邦文日本外史 卷之一

源氏前記

平氏

大權武門に歸するの起原

【封事】醍醐の朝、延喜十四年二月、清行、意見封事を上る

上世兵制、文武一途

外史氏曰く、吾れ舊志を讀み、鳥羽帝の時、數制符を下して、諸州の武士の、源平二氏に屬するを禁せしを見る。曰く、大權の將門に歸せしは、其れ此時に有るか。三善清行の封事に宿衛豪横の患を陳べしを讀むに及びて、乃制度の弊、其來ること久しく、亶此に始まりしに非ざるを知れり。

蓋し、我朝の初めて國を建てしは、政體簡易にして、文武一途なり。海内を擧げて皆兵にして、天子之が元帥たり。大臣、大連之が褊裨たり。未だ嘗て別に將帥を置かざりしなり。豈復謂ゆる武門武士と云ふ者あらんや。故に天下事なければ則己み、事あれば則天子必ず征伐の勞を親し、否らざれば則皇子、皇后之に代り、收て之を臣下に委ねられざりしなり。是を以て大權、上に在りて、能く海内を制服し、施きて三韓肅愼に及ぶまで、來王せざるは無かりき。

中世兵制文官武官を分つ
【六衛】左右の近衛、左右の衛門、左右の兵衛
【八省】中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大蔵、宮内
【首領】大毅、小毅、主張、校尉、旅帥、隊正
【守令】國司
【契勅】符節の勅書
【尺一】詔版なり長一尺一寸

中世に至るに及びて、唐制を模倣し、官を文武に分ち、乃特に將帥を置き、六衛の將、天子の親兵を將ゐたり。而して兵部、八省の一に居り、左右の馬寮を建て、以て貢馬を蓄はしめたり。而して邊要の國は、諸郡に皆軍團あり、一國の丁を三分して、其一を取り、五人を伍となし、伍二を火となし、火五を隊となし、隊二を旅となし、旅十を團となす。各首領あり。一火六馬とし、騎射に便なる者は、特に騎隊となす。皆守令に任じて簡點せしむ。京を衛り邊を戍る。籌を按して差遣す。征伐を畢ぐる毎に、沿道の諸國に、契勅を須ゐて勘合せしむ。凡征行萬人に、乃將軍あり、副將軍あり、軍監あり、軍曹あり、錄事あり、三軍を總ぶる毎に、大將軍一人あり。大將の出征には、必す節刀を授く。軍に臨み敵に對する時、首領の約束に從はざる者は、皆專決を聽す。還る日、狀を具へ以聞す。勳位十二等を建て、功を論じ賞を酬いて、其兵を罷む。凡そ其器仗は兵庫に藏め、出納するに時を以てし、皆之を兵部に管せしむ。中朝兵を制せしこと、大略此の如くなりき。上世の旨に及ばずと雖も、其亂を防ぎ禍を慮るは、密なりと謂ふべし。

是故に事有らば則尺一の符を下せば、數十萬の兵馬立所に具る。而して平時は散

武門の起原

兵農分る

武士の起原

源平二氏

【東邊】奥羽

じて卒伍に歸す。之が將帥たる者、或は文吏より出でて兵陣に臨み、事畢りて歸り。介冑を脱ぎて衣冠を襲る。未だ嘗て謂ゆる武門武士と云ふ者有ざりしなり。藤原氏外戚を以て、世政權を執るに及びて、卿相の位、其族人に非ざれば擬せず。官、品流を論ずること、因習して俗と成る。庶僚百揆、概其職を世にす。而して將帥の任は、毎に源平二家に委ぬ。是に於て始めて武門の稱あり。

光仁、桓武の朝、驅塡多事なり。寶龜中に、廷議して冗兵を汰す。殷富の百姓、才弓馬に堪ふる者は、專ら武藝を習せて、以て徴發に應じ。其羸弱なる者は、皆農業に就けり。而して兵農全く分る。

貞觀、延喜の後に至りて、百度弛廢し、上下隔絶す。奥羽關東の豪民、軍功を以て、六衛の舍人に至る者、或は坐ながら鄕曲を制して、宿衛を勤めず。而れども守令之を能く制するなし。清行の謂ゆる六軍貔虎に非ずして、諸國豺狼たる者と、所在皆是なり。平居は甲を藏め馬を蓄へ、儼然として自武士と稱す。是に於て始めて武士の稱あり、天慶より寛治に馴致す。

源平二氏數東邊を鎭ずるや、毎に此輩を用ゐて、以て功効を奏す。而して各習用する所ありて以て相隷屬す。因襲の久しき君臣の如く然り。是より其後苟も事あ

らば、輒之を二氏に命ず。二氏各其隷屬を發して之に赴くこと、物を囊に探るが如し。復將を選み兵を徵することを煩さず。而して討伐則誅、立どころに辨せざるはなし。廟堂の上は務めて恬熙を取り。其勢の積重して回らざるを患へず。方に且に延きて爪牙と爲して、以て相傾排するのみ。鳥羽の此令を下せるは、其弊を察せられしものの如くにして、弊の由る所を窮められず。之を救ふの術に於ては、蓋し已に疎なりき。

源平相錯制す

是の時に當りて、源氏命を極ぐものあれば、平氏に勅して之を討たしめ、平氏制じ難きものあれば源氏をして之を誅せしむ。更々相錯制して、以て控馭の術を得たりとして、異日搏噬攘奪の禍、又此に基せしを知らず。古制を敗壞して一時に苟媮し、皆以て自ら困厥を取るに足れり。

兵權

抑、戎事は民命の繫る所にして、兵食の權は一日も國に去つ可らず。先王の必躬之を親らしたまふは其旨深し。今之を一二の宗族に委ね、又其事を賤みて省みず。其品類を別ちて、之を朝廷の上に齒せざるに至る。甚しきは、則之を奴僕視して曰く、「これ武門のみ、これ武士のみ」と。其功を論じ賞を行ふに及びては、或は悋みて與へず。嗚呼幾何ぞや。其相率ゐて以て自ら法度の外に棄てざらんや。特積威の約する所を以て、抑へて敢て發せざりし耳。保元平治の際に至りて、乃釁に乘じて起り、潰裂四出し、復收む可からず。横流の極、終に其千歳不拔の權を失ひて、之を嚮に奴僕視せし所の者に授くるを致す。慨くに勝ふ可けんや。

吾外史を作り、首に源平二氏を叙するに、未だ嘗て王家の自ら其權を失ひしを歎せずんばあらず。而れども國勢の推移する、人力の維持する所に非ざるものあり。世の變に因りて以て得失を見、後の世を憂ふる者、將に以て心を此に留むること有るべきなり。

外史氏曰。吾讀舊志。見下鳥羽帝時數下制符。禁内諸州武士屬上源平二氏。曰。大權之歸將門也。其在於此時歟。及讀三善清行封事。陳宿衛豪横之患。乃知制度之弊。其來久矣。非亶始於此也。葢我朝之初建國也。政體簡易。文武一途。舉海内皆兵。而天子爲之元帥。大臣大連爲之褊裨。未嘗別置將帥也。豈復有所謂武門武士者哉。故天下無事則已。有事則天子必親征伐之勞。否則皇子皇后代之。不敢委之臣下也。是以大權在上。能制服海内。施及三韓。肅愼。無不來王也。及至中世。摸倣唐制。官分文武。乃特置將帥。六衛之將。將天子親兵。而兵部居八省之一。建左右馬寮。以蓄貢馬。

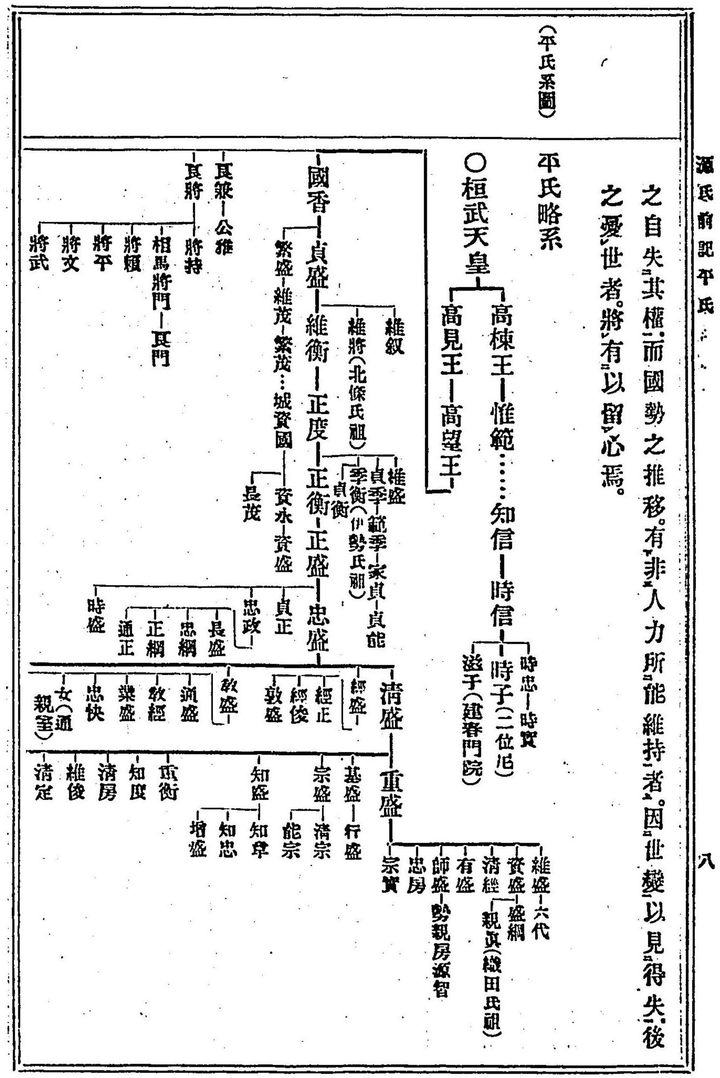
而邊要之國。諸郡皆有軍團。三分一國之丁。而取其一。五人爲伍。伍二爲火。火五爲隊。隊二爲旅。旅十爲團。各有首領。一火六馬便騎射者。特爲騎隊。皆任守令簡點。衛京戍邊。按簿差遣。每舉征伐。令沿道諸國須契敕勘合。凡征行萬人。乃有將軍。有副將軍。有軍監。有軍曹。有錄事。每總三軍。大將軍一人。大將出征。必授節刀。臨軍對敵。首領不從約束者。皆聽專決。還日具狀以聞。建勳位十二等。論功酬賞。而罷其兵。凡其器仗。藏于兵庫。出納以時。皆管之於兵部。中朝制兵。大略如此。雖不及上世之盲。其防亂慮禍。可謂密矣。是故有事則下尺一之符。數十萬兵馬立具。而平時散歸卒伍。爲之將帥者。或出自文吏。臨兵陣。畢事而歸。脫介冑。而襲衣冠。未嘗有所謂武門武士者也。及藤原氏以外戚世執政權。卿相之位。非其族人不擬。官論品流。因習成俗。庶僚百揆。概世其職。而將帥之任。每委源平二家。於是乎。始有武門之稱焉。光仁桓武之朝。疆埸多事。寶龜中。廷議汰冗兵。殷富百姓。才堪弓馬者。專習武藝。以應徵發。其羸弱者。皆就農業。而兵農全分。至貞觀延喜之後。百度弛廢。上下隔絕。奧羽關東之豪民。以軍功。至六衛舍人者。或坐制鄉曲。不勤宿衛。而守令莫之能制。清行所謂非六軍

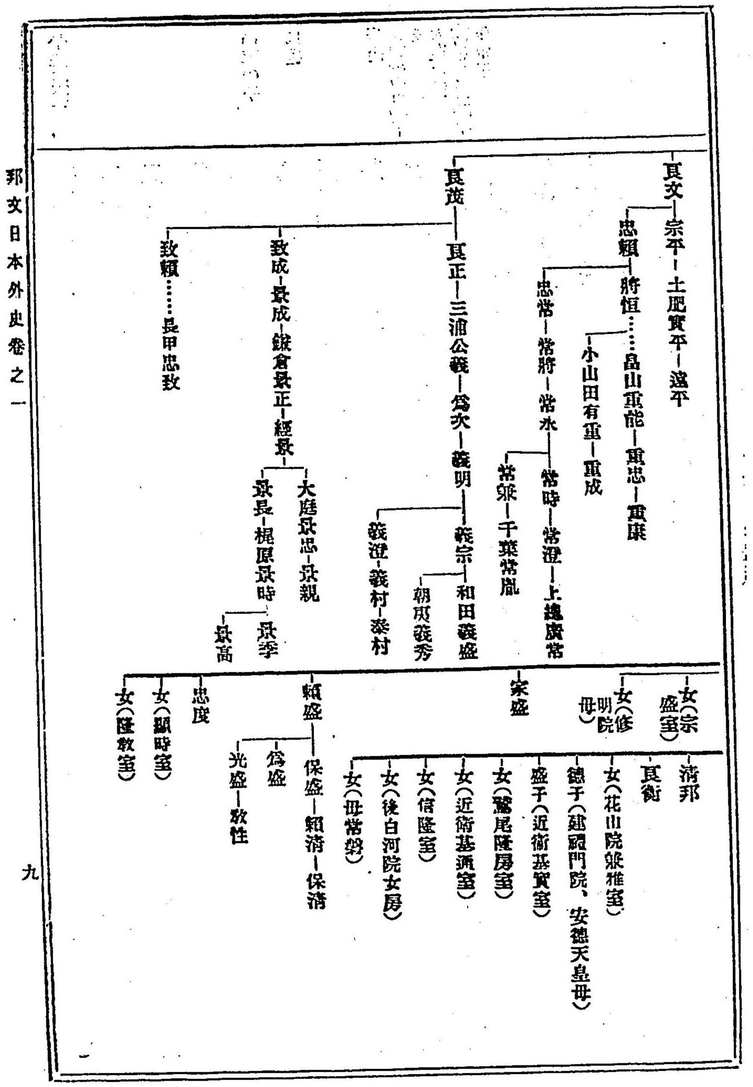
貔虎。而爲諸國豺狼者。所在皆是。平居藏甲蓄馬。儼然自稱武士。於是乎。始有武士之稱焉。自從天慶。剛致寬治。源平二氏。數鎭東邊。每用此輩。以奏功效。而各有所習用。以相隷屬。因襲之久。如君臣然。自是其後。苟有事。輙命之二氏。二氏各發其隷屬。赴之。如探物於囊。不復煩選將徵兵。而討伐剿誅。莫不立辨。廟堂之上。務取恬熙。不憂其勢之積重不回。方且延爲爪牙。以相傾排而已。鳥羽之下。此令也。如察其弊者焉。而不窮弊之所由。於救之之術。蓋已疎矣。當是之時。源氏有梗命者。勅平氏討之。平氏有離制者。令源氏誅之。更相牽制。以爲得控馭之術。而不知異日搏噬攘奪之禍。又甚於此。敗壞古制。苟偷一時。皆足以自取困蹶也。抑戎事民命所繫。而兵食之權。不可一日去國。先王之必躬親之。其旨深矣。今委之一二宗族。又賤其事。而不省。至於別其品類。不齒之朝廷之上。甚則奴僕視之。曰。是武門耳。是武士耳。及其論功行賞。或恪而不與。嗚呼。幾何其不相率以自棄於法度之外也。特以積成所約。抑不敢發爾。至於保元平治之際。乃乘釁而起。潰裂四出。不復可收。橫流之極。終致失其千歲不拔之權。而授之嚮所奴僕視者。可勝慨哉。吾作外史。首敍源平二氏。未嘗不歎王家

之自失其權而國勢之推移有非人力所能維持者因世變以見得失後之憂世者將有以留心焉

（平氏系圖）

平氏略系





平氏系統

平氏は桓武天皇より出づ。天皇の夫人多治比真宗、四子を生む。長を葛原親王と曰ふ。幼にして才名あり。長じて謙謹。書史を讀むを好み、古今の成敗を觀て、以て自ら鑑む。四品に叙し、式部卿に任せらる。子を高見、孫を高望といふ。高望に姓平氏を賜ひ、上總介に拜す。子孫世武臣たり。其旗赤を用ゐる。

高望の子

高望四子あり。國香、良將、良兼、良文、並に東國の守介、或は鎮守府將軍に任せらる。國香の子を貞盛といふ。材武ありて善く射る。左馬允と爲る。良將の子將門、性桀黠なり。攝政藤原忠平に倚りて撿非違使たらんことを求む。忠平省みず。

貞盛

將門怒り、去りて東國に之き、相馬の里に據りて、常陸、下總を劫掠す。時に國香、常陸大椽たり。良兼下總介たり。皆將門と隙あり。承平中、將門終に國香を攻殺す。將門の京師に在りしとき、嘗て敦實親王に詣る。從兵五六騎可りなり。滴貞盛も亦來り謁し、將門の門を出づるに會ふ。貞盛人に謂て曰く、「將門必事を天下に生せん。今日士卒を率ゐざりしを恨む。即し士卒を率ゐたらば、當に之を擊殺すべし」と。是に至りて貞盛官を棄て東し、父の仇を復せんと欲す。良兼及び從弟の良正と、共に將門を攻む。利あらず。貞盛謂へらく、是私鬪なり。敕を受けて、之を討つに若かずと。將に京師に還り、請ふ所あらんとす。將門之を信濃に要擊す。

將門

[相馬の里]下總

天慶の亂

[敦實親王]字多帝子

興世王

藤原純友

天慶二年

貞盛大に敗れ、身を脱して京師に入る。已にして良兼卒す。將門乃下總に據り、遂に常陸介藤原維幾を襲ひ執へ、常陸を取る。武藏守興世王、兇險にして亂を喜ぶ。往きて將門に說きて曰く、「關東八州は沃饒にして四塞なり。據りて以て天下に覇たるべし。夫れ一州を取るも誅せられん。八州を取るも亦誅せられん。誅は一のみ。願ふに公安にか決す」と。將門大に悅び、延きて謀主となす。遂に下野、上總、武藏、相摸を攻めて、悉く之を下す。弟正平諫めて曰く、「帝王命あり、妄に冀ふべからず。願くは之を熟圖せよ、」と。將門曰く、「天我に縱すに武を以てす。吾帝位を取る、孰か能く之を拒がん」と。乃僞宮を下總の猿島に建て、文武百官を置く。

初め將門、藤原純友といふ者を友として善し。嘗て同じく比叡山に登り、皇城を俯し瞰て曰く、「壯なる哉、大丈夫當に此に宅す可らざらんや」と。遂に興に反を謀る。純友に謂て曰く、「他日志を得ば、吾は王族なり。當に天子と爲るべし。公は藤原氏なり、能く我が關白と爲らんか」と。是に至りて純友、伊豫掾と爲る。任滿ちて還らず。海島に據りて盜をなし、以て遙に將門に應ず。潛に人を遣り京師に入り、火を坊市に行つ。京師戒嚴す。時に天慶二年なり。

天慶三年

三年、朝廷叡議藤原忠文を拜して、征東大將軍と爲し、諸將を率ゐて東伐せしむ。東海、東山の兵を發し、募るに重賞を以てす。而して貞盛を常陸椽に任じ、兵を發して將門を討たしむ。將門之を聞きて、兵を率ゐ、貞盛を常陸に索むれども得ず。乃其衆を散じて、獨り千餘人を以て下野に至る。

藤原秀郷

下野に押領使藤原秀郷といふ者あり。世、大族たり。將門兵を起すに及びて、往きて之を見る。將門方に髮を梳る。髻を捉り、出でて之を欵接す。食を命じ共に食ふ。飯粒前に墮つ。拾ひて之を食ふ。秀郷、其輕卒にして、與に爲すに足ざるを知りて、乃貞盛に從ひぬ。

貞盛、將門の備なきを窺ひ、秀郷と兵四千餘人を合せて、急に之を襲ふ。將門遽に出でて之を拒ぎ、大に敗る。貞盛勝に乘じて疾く攻む。將門之を險阻に憑んと欲し、走りて島廣山に據る。貞盛其營を火き、大に山北に戰ふ。將門見兵四百騎を以て死鬪す。貞盛兵を麾きて之に蹙る。將門獨身出でて走る。貞盛叱咤して追馳す。射て其右額に中つ。將門馬より墜つ。秀郷其首を斬る。興世王以下、悉く誅に伏す。京獄に梟す。八州皆定る。而して純友尋で平らぐ。忠文等皆途より還る。貞盛功を以て從五位上に叙し、後從四位下に遷り、鎮守府將軍に任じ、陸奥守を

天慶の亂平ぐ

兼ぬ。世呼びて平將軍といふ。

貞盛の子

貞盛四子あり。季維衡最勇なり。平致頼、源頼信、藤原保昌と名を齊くし、四天王と稱す。下野守に任ず。後私に致頼と鬪ひ、謫せられて淡路に徙る。貞盛又從子維茂を養ふ。亦勇敢維衡に亞ぐ。維衡の曾孫正盛、武幹あり。時に平氏、源氏と並に武臣たり。而して源義家功を邊陲に樹て、宗黨尤强し。其長子義親、對馬守たり。九州を剽掠し、官使を殺して、隱岐に流さる。逃れて出雲に歸り、吏を殺して貢賦を奪ふ。勢甚だ猖獗なり。是に於て正盛に詔して追討使となし、驛鈴を賜ひ、兵を率ゐて之を討ち、義親と戰ひ、其首を斬りて、京獄に梟す。時に天仁元年なり。

天仁元年

正盛、忠盛を生む。忠盛、伊賀、伊勢の間に居る。人と爲り、一目眇なり。大治中、山陽、南海に盜起る。忠盛追捕して功あり。白河、鳥羽、二上皇に事ふ。並に寵あり、鳥羽上皇、得長壽院を建つるや、忠盛を以て役を董さしむ。役竣りて、但馬守に叙し、昇殿を聽す。擧朝之を憎む。豐明節會を以て、暗に乘じ、之を刺さんと謀る。忠盛曰く、「朝すれば則ち訴を蒙り、朝せざれば怯となす。其宗を辱むるは一なり」と。乃刀を帶びて入る。家人平家貞、其子家長と冑を衷して從ふ。

忠盛

得長壽院

【豐明節會】十一月中の辰日之を行ふ

忠盛銀刀を帶

して殿に昇る

吏これを訶止す。家貞對へて曰く、「主君戒心あり。臣將に之と同じく死せんとす」と。吏止むるを得ず。忠盛殿に昇り、闇に就き刀を拔く。刀光外射す。衆大に畏れ敢て事を發せず。宴に及びて忠盛を召して舞を命ぜらる。衆歌ひて曰く「伊勢瓶子は醋瓮なり」と。蓋し國音、瓶子は平氏に通じ、醋瓮は眇に通ずればなり。忠盛之を愧ぢて、宴を終へずして退く。主殿司を呼びて、刀を脱し之を授けて出づ。衆忠盛劍を帶び殿に上り、兵を以て自衛るを劾奏し、典刑を正さんと請ふ。上皇慰きて、忠盛を召して之を問ひ給ふ。對へて曰く、「臣の家人道路の言を聞き、臣に尾して來れり。臣をして知らしめず。唯陛下其罪を斷めよ。其佩刀の如きは、請ふ之を主殿司に問ひ玉へ」と。主殿司、刀を進む。木刀に銀を塗りしなり。上皇嘻ひて曰く、「忠盛意を用ゐる良に苦めたり。死を以て君を衛るは則武人の習ひのみ」と。遂に問ふ所なかりき。忠盛累遷して、正四位下刑部卿を以て、仁平中に卒せり。

【上皇】鳥羽

平家物語（殿上の闇討の事）

然るに、忠盛未備前の守たりし時、鳥羽院の御願、得長壽院を造進して、三十三間の御堂を建て、一千一體の御佛をすゑ奉らる。供養は天承元年三月十三日なり。勸賞には、闕國を給ふべきよし、仰せ下されける。折節、但馬の國のあきたりけるぞ下されける。上皇猶御感のあまりに、内の昇殿を許さる。忠盛三十六にて始めて昇殿す。

雲の上人是を猜み憤り、同年の十一月廿三日、五節豐明の節會の夜、忠盛を闇討にせんとぞ期せられける。忠盛此由を傳へ聞きて、我右筆の身にあらず。武勇の家に生れて、今不慮の恥に遇はんこと、家のため身のため心憂かるべし。詮ずる所、身を全うして、君に仕へ奉れといふ本文ありとて、豫れて用意を致す。殿内の始より、大きなる鞘卷を用意し、燭臺の下にしどけなげにさしほらし、火のほのくらき方に向ひて、やはらこの刀を拔き出でゝ、髮に引き當てられたりけるがよそよりは氷などの樣にぞ見えける。諸人目をすましけり。又忠盛の郎黨、もとは一門たりし平の木工助貞光が孫、新の三郎大夫家房が子に、左兵衛の尉家貞といふ者あり。藤菅の狩衣の下に。萠黄おどしの腹卷を着、櫛袋つけたる太刀脇挾みて、殿上の小庭に長りてぞ候ひける。貫首以下怪をなして、うつぼ柱より内鈴の綱の邊に、袍衣の者の候ふは何者ぞ、狼籍なり。疾う疾う罷り出でよと、六位を以て言はせられたりければ、家貞長りて申しける、相傳の主備前の守殿の、今夜闇討にせられ給ふべき由承りて、そのならん樣を見んとてかくて候ふなり。えこそ出でましとて、又長りてぞ候ひける。これらをよしなしとや思はれけん、その夜の闇討なかりけり。忠盛又御前の召に舞はれけるに、人々拍子をかへて、伊勢瓶子は酢瓶なりけりとぞはやされける。掛卷も忝く此人々は、柏原の天皇の御末とは申しながら、中比は都の住居もうとうとしく、地下にのみ振舞なりて、伊勢の國に住國ふかかりしかば、其國の器によせて、伊勢平氏とぞはやされける。その上忠盛の目の、すがまれたりける故にこそ、かやうにはやされけるなれ。忠盛如何にすべき樣もなくして、御遊も未終らざるさきに、御前を罷り出でらるゝとて、紫宸殿の御後にして、人々の見られける所にて、横へさゝれたりける、腰の刀をば主殿司に預け置きてぞ出でられける。家貞待ち受け奉りて、さて如何候ひつるやら

んと申しければ、かうともいはまほしうは思はれけれども、正しう言ひつる程ならば、やがて殿上までも切り上らんずるものゝ、面魂にてありし間、別の事なしとぞ答へられける。五節には白薄様、修禅寺の紙、巻上の筆、巴香いたる筆の軸なんどいふ、様々かやうに面白き事をのみこそ歌ひ舞はるゝに、中比太宰権帥季仲卿といふ人ありけり。餘に色の黒かりければ、時の人黒帥とぞ申しける。此人未蔵人頭なりし時、御前の召に舞はれけるに、人々指子をかへて、あなくろ〳〵。黒き頭かな、如何なる人の漆塗りけんとぞはやされける。又花山の院の前の太政大臣忠雅公、未十歳なりし時父中納言忠宗の卿に後れ給ひて、孤にておはしけるを、故中御門の藤中納言家成卿、其時は未播磨守にておはしけるが、哀にとりて、花やかにもてなされしかば、これも五節には、播磨米は木賊草か、椋の葉か、人の綺羅を研ぐは、とぞはやされける。上古には、かやうの事ども多かりしかども、こさいでこず、末代如何あらんずらん、おぼつかなしとぞ、人々申しあはれける。案の如く五節はてにしかば、院中の公卿、殿上人一同に訴へ申されけるは、それ雄飯を帯して公宴に列し、兵仗を給ひて宮中を出入するは、皆是格式の例を守る、倫命のよしある先規なり。然るを忠盛朝臣、或は年來の郎従と號して、袍衣の兵を殿上の小庭に召し置き、或は腰の刀を横へさして、節會の座に連る。兩條奇怪、未聞かざる狼籍なり。事既に重畳せり、罪科尤のがれ難し。早く殿上の御簡を削りて、けつくはんちやうにん行はるべきがと、諸卿一同に訴へ申されければ、上皇大に驚かせ給ひて、忠盛を御前へ召して御尋あり。陳じ申されけるは、先づ郎従小庭に伺候のよし、全く覚悟仕らず。但し近日人々相巧まるゝ旨、于翻あるかの間、年比の家人事を傳へ聞くによりて、その恥を助けんがために、忠盛には知らせずして、密に参候の條力及ばざる次第なり。もし咎あるべくば、かの身召し進らすべきか。次に刀のことは、主殿司に預け置き候ひをはりぬ。是を召し出され、刀の實否によりて、咎の左右行はるべきかと申されたりければ、此義尤然るべしとて、急ぎかの刀を召し出でゝ、叡覧あるに、上は朝倉の黒う塗りたりけるが、中は木刀に銀箔をぞ押したりける。當座の恥辱を遁れんがために、刀を帯するよしあらはすといへども、後日の訴訟を存じて、木刀を帯しける用意の程こそ神妙なれ。弓箭にたづさはらん程の者の咎には、尤かうこそあらまほしけれ。かれてはまた郎従小庭に伺候のこと上と、かつうは武士の郎黨のならひなり。忠盛が咎にあらずとて、却りて叡感に預りしは敢て輝過の沙汰はなかりけり。

忠盛七子あり。清盛、經盛、教盛、家盛、頼盛、忠直、忠度と曰ふ。而して清盛最寵貴を極む。初め忠盛の白河上皇に事ふるや、上皇嬖姫あり。祇園祠の傍に居る。嘗て夜幸するに雨ふること甚し。鬼の髪束鍼の如きを覩る。乍覩え、乍失す。忠盛に命じて之を射さしむ。忠盛捕へて之を視るに、一老僧の麥稈を束ねて以て笠に代へ、火器を提げて行く〳〵これを吹くなり。曰く、「將に燭を祠に上らんとするなり」と。上皇忠盛の膽勇倚るべしと、益寵あり。幸する所の宮人兵衛佐局、忠盛と私して身めり、上皇即之を賜ひて曰く、「女を生まば則朕之を取らん。即し男ならば、卿以て子とせよ」と。宮人免身して男を生む。是を清盛となす。後更に妻を娶り、家盛、頼盛を生む。

忠盛の子

祇園女御

清盛

頼盛

皇室
【璋子】大納言公實の女
崇德天皇
【得子】中納言長實の女
保元元年
藤原頼長

清盛出で、中御門氏に依る。大治中、左衛門尉に任ず。累遷して從四位下安藝守に至る。海に航して任に赴くとき、魚の北舟に入るあり。或人曰く、「家を興すの兆なり」と。

是より先、鳥羽の太子禪を受く。是を崇德帝とす。帝の母璋子幼きとき、白河法皇に養はる。法皇之を鍾愛す。長ずるに及びて衰へず。頗る物議に渉る。鳥羽、是を以て崇德を子とし視給はず。戲に之を目けて叔父兒といふ。鳥羽の寵姫を得子といひ美福門院と號す。皇子體仁を生む。崇德をして養ひて太子と爲さしむ。四歲にして禪を受く。是を近衛帝とす。帝崩じて崇德位に復せんことを希ふ。崇德の皇子重仁又長じて賢なり。中外望を屬せり。而して美福、近衛の蚤世を以て呪詛に出づとし、乃密に鳥羽に勸め、崇德の同母弟雅仁を立てらる。是を後白河帝とす。朝野駭然たり。

崇德、憤恚して、左大臣藤原頼長を召して、之に語るに情を以てす。頼長慧黠なり。世惡左府と稱す。兄の忠道と權を爭ひ逞からず。上皇をして位に復せしめて、己れ柄を專にせんと欲す。乃從遷して兵を擧ぐ。物情恟然たり。

保元元年七月、法皇崩ず。即夜これを葬る。上皇遂に兵を擧げて、白河殿に據る。

【法皇】鳥羽
【上皇】崇德
保元の亂

源爲義等、これに屬す。法皇豫め變あるを度りて、諸將の當に召すべき者を遣命す。清盛與からず。蓋し忠盛の夫妻、重仁に傅たるを以てなり。美福曰く、「安ぞ強きこと平宗の如くにして、召さゞること有んや、」と。遂に之を召す。清盛其宗を擧げて召に應ず。叔父忠政は獨上皇の宮に赴く。清盛の義子基盛、撿非遠使たり。上皇の黨、源親治を宇治にて擒にす。已にして源義朝に敕して白河殿を攻めしめ、清盛等を留めて、宮を衛らしむ。少納言藤原通憲奏して、清盛をして同く往かしむ。清盛の長子を重盛と曰ふ。父に從ひて其西門を攻む。西門の將源爲朝善く拒ぐ。我が先鋒の二將其れに射殺さる。清盛曰く、「吾れ命を受くる必しも此門ならず」と。重盛肯せずして曰く、「敵を擇びて進むは、豈武臣の爲す所ならんや、兒請ふ之に當らん」と。清盛兵士をして重盛を擁止し、與に共に南門を攻めしむ。白河殿陷る。上皇出で走りて如意山に入り、髮を削りて南都に奔る。途にして執へられて讃岐に遷さる。頼長流矢に中り、已にして自殺す。帝清盛に詔して、爲義を捕へんとすれども獲ず。忠政出でて清盛に依り、降を乞ふ。聽さずして之を殺す。朝議因りて義朝をして爲義を殺さしむ。

【如意山】京都の東
【忠政】清盛の伯父

清盛を以て播磨守となし、太宰大貳に超遷す。重盛以下賞を受くる差あり。始め

て甲第を六波羅に輿す。

平治の亂
義朝
【藤原通憲】信西
【上皇】後白河
藤原信頼

義朝、平氏の聲望己が上に出づるを視て、心常に之を嫉む。藤原通憲、清盛の女を娶りて婦となす。亦義朝と隙あり。通憲、大議に參與し、釐正する所多し。帝、位を太子に授く。是を二條帝とす。而して上皇仍政を聽く。政、通憲に在り。上皇の嬖人を藤原信頼と曰ふ。近衛大將たらんことを求む。上皇之を聽さんと欲す。通憲可かず。因りて唐の安祿山の事跡を圖して上り、以て之を諷す。信頼怒恨し、乃義朝と深く相結納し、陰に亂を作さんことを謀る。藤原經宗、藤原成親、藤原惟方みな其謀に與かる。謀既に定まる。而れども清盛を畏れて敢て發せず。

平治元年
清盛熊野に詣
【三條殿】皇居

平治元年冬、清盛、重盛、筑後守家貞等五十人を率ゐて熊野に詣づ。行きて切部に至る。六波羅の使者來り告げて曰く、「昨夜信頼、義朝、源賴政、源光基等と、兵五百を率ゐ、三條殿を圍みて之を燒き、並に少納言通憲の第を燒く。殺傷算なし。遂に上皇及び主上を禁内に幽し、少納言も亦害に遭ふ」と。衆愕然たり。清盛曰く、「之を爲すこと如何。宜しく熊野に到り之を計るべきか」と。重盛曰く、「武臣天子の急に赴く、何ぞ猶豫を爲さん」と。清盛曰く、「甲なきを何如せん」と。家貞曰く、「臣豫め是事あるを慮る」と。其擔を開きて甲冑五十を出す。器械弓箭これに稱へり。衆乃結束して北に還る。已にして源氏の兵阿部野に要するを聞く。清盛曰く、「彼は衆、我は寡。我れ且之を四國に避けて、以て再擊を謀らん」と。重盛曰く、「機失ふべからず。今を失ひて擊たずんば、彼將に我より先せんとす。我寡にして敗るとも、何の恥か之あらん。今日の事、死ある耳」と。清盛曰く、「吾が志決せり」と。衆を率ゐて疾く馳す。未だ阿部野に至らざるに、一騎に遇ふ。衆意ふ。源氏の使ならんと。騎至りて曰く、「六波羅より至る。六波羅の兵、駕を迎へて見に阿部野にあり。請ふ速に歸れ」と。衆相喜慶し、踊躍して京師に入る。

藤原光頼

是の時に當りて、信頼自ら大臣大將となり、義朝以下皆官に拜せらる。信頼、衣冠乘輿に僭擬し、百官の上に坐し、庶政を聽斷す。百官敢て仰ぎ視る者莫し。獨左衛門督藤原光頼屈せず。會議に因りて信頼を折く。其弟惟方を勗めしめて、二宮を讒り、以て清盛を待つ。

清盛既に還る。信頼之を聞きて諸門の守兵を益す。清盛其備を怠らせんことを謀り、乃名簿を信頼に致して、以て他なきを示す。清盛、帝を救かんと計り、乃惟方と謀を通じ、夜火を二條大宮に放つ。守門の兵、守を舍てて之を救ふ。天皇乃皇后と同車し、衣を蒙り、伏して漢壁門を出でらる。惟方從ふ。門者誰何す。惟方曰

天皇六波羅に行幸

く、「宮人なり」と。門者、車中に燭して曰く、「可なり」と。既に出づ。重盛、騎三百を以て途に迎へ謁し、奉じて六波羅に入る。百官萃る。關白藤原基實も亦至る。衆、其妻は信頼の妹なるを以て之を疑ふ。或人清盛に告げて曰く、「關白至る」と。清盛曰く、「此れ大臣なり、假令來らざるも、吾固より將に召さんとす」と。衆、心乃安す。已にして上皇、又仁和寺に逃る。しかれども信頼等は乃大内に據れり。

清盛討賊

帝、清盛を召し、命じて賊を討たしむ。且之を戒めて曰く、「宜しく佯りて退き走り、賊を誘ひて宮を出すべし。宮闕をして兵燹に罹らしむる莫れ」と。清盛對へて曰く、「臣逆賊を誅すること、之を掌に指さすが如し。以て天心を勞する勿れ。後命の若きに至りては、臣甚だ惑ふ。然りと雖も敢て心を盡さずんばあらず」と。乃兵三千騎を勒して、重盛、教盛、頼盛をして之に將たらしめ、兵を分ちて大内に赴かしむ。賊は承明、建禮の二門を開き、陽明、待賢、郁芳の三門を關し、白旗二十餘流を樹て、之を守る。我が兵望み見て色動く。重盛兵を勵して曰く、「年は平治なり。地は平安なり、而して我は平氏なり。天、吉兆を示す。勝を獲ること必せり。汝が輩努力せよ」と。乃其兵を分ちて二となし、一を大宮巷に留め、其一

義平

を以て待賢門に傳き、大に呼びて戰を挑む。信頼怖れて馬より墮つ。重盛門を排して入り、大庭の椋樹の下に至り、源義平と大に紫震殿の前に戰ひ、七たび櫻栖樹を匝り、出でゝ大宮巷に至り、弓を杖きて以て息ふ。平家貞之を目して曰く、「平將軍再び生ずと謂ふべし」と。重盛兵を更へて復入る、義平呼びて曰く、「我は源氏の嫡子、公は平氏の嫡子なり。宜しく與に死を決すべし」と。重盛曰く、「諾哉」と。乃進み戰ひ且退く。二卒の景安、家泰と、共に走る。義平及び鎌田政家之を追ひて二條の壕に至る。重盛壕を踰ゆ。政家之を射て、肩及び背に中つ。甲堅くして入らず。馬を射る。馬倒れて冑墜つ。政家之に薄る。重盛抨ぐに弓を以てし、冑を取りて之を被むる。景安至り、政家を搏ちて仆し、義平に殺さる。重盛怒りて親ら鬪はんと欲す。家泰進みて義平と相搏ち、政家に殺さる。重盛間を得て走る。是時に當りて、頼盛等、郁芳門を攻め、義朝と戰ひて退き走る。義朝の卒に、善く走る者八町二郎あり。鐵搭を以て其冑に鈎す。頼盛、刀を拔きて搭を截る。二郎仰ぎ仆る。頼盛走る。源氏の兵、宮を空くして出づ。

平治物語（待賢門軍附信頼沒落の事）

さる程に六波羅の皇居には、公卿僉議ありて清盛を召されけり。紺の直垂に黒絲威の

腹卷に、左右の小手を差して、折烏帽子引立て大床に長る。頭中將實國を以て仰下されけるは、王事盛きことなければ、逆臣滅びん事疑ひなし。但適新造の內裏なり。若し回祿あらば、朝家の御事たるべし。官軍僞りて引退かば、凶徒定めて進み出でんか。然らば官軍を入替へて、內裏を守護せさせ、火災なき樣に思慮あるべし。と仰下されければ、清盛畏りて、朝敵たるとは、逆徒の誅戮は擧の中に候ふ間、時刻を廻らすべからず。然れば定めて狼藉出來せんか、火失なからん條こそ難義の勅定にて候へ。さりながら苑廬が吳國を覆し、張耳が項羽を亡しゝも、皆是智謀の致す處なれば、隨分武略を廻らして、命闕無爲なる樣に、成敗仕るべしと奏して出られけり。主上御座あれば、皇居の御固に清盛をば留らる。大內へ向ふ人人には、大將軍は左衛門佐重盛、三河守頼盛、淡路守知盛、侍には筑後守家貞、子息左衛門尉貞能、主馬判官盛國、子息右衛門尉盛俊、與三左衛門尉景安、新藤左衛門家泰、難波次郎經房、瀨尾太郎兼安、伊藤武者景綱、熊太郎貞泰、同上郎貞景を始として、都合其勢三千餘騎、六波羅を打出て、賀茂河を馳渡し、西河原に控へたり。左衛門佐重盛は生年廿三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に、樋匂の鎧、蝶の彫金物打ちたるに、龍頭の兜の緒をしめて、小烏といふ太刀を帶き、切符の矢負ひ、重藤の弓持ちて、黃鳥毛なる馬に、柳櫻摺りたる具鞍置せて乘り給へり。重盛宣ひけるは、年號は平治なり。花洛は平安城なり。我等は平氏なれば三事相應せり。敵を平げん事何の疑かあるべき、誰か爰に樊噲張良が勇をなさゝらんとて、三千餘騎を三手に分ちて、近衛中御門、大炊御門、大宮面へ打出て、陽明、待賢、郁芳門へ押し寄せたり。大內には三方の門をさし固め、面をば開かれたり。承明建禮の脇の小門をも俱に開きて、大庭には馬ども多く引立てたり。椿蟹、桐蟹、梨蟹、紫宸殿の前後、東光殿の脇の蟹まで、兵ひしと並居たり。皆源氏の勢なれば、白旗二十餘流打立てたり。大宮面には、平家の赤旗三十餘流差し揚げて、勇み進める三千餘騎、一度に鬨を噪と作りければ、大內も響き渡りて夥し。餘波に驚きて、只今まで由々しく見えられつる信頼卿、顏色變りて、草葉の如くにて、南階を下られけるが、膝蹴ひて下りかれたり。人なみなみに馬に乘らんと、引寄させたれども、ふさりせめたる大の男の、大鎧は着たり。馬は大なり、乘煩ふ上、主の心にも似も似ず、はやり切りたる逸物なれば、つと出でん出でんとしけるを、舍人七八人寄りて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。移王八匹の天馬の駒も、かくやと覺ゆるばかりにて乘りかれ給ふ所を、侍二人つと寄りて、疾く召し候へとて押上げたり。餘にや押したりけん、弓手の方へ乘りこして、伏樣にどつと落つ。急ぎ引起して見れば、顏に砂ひしと附き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝此體を見て、日來は大將とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、あの信頼といふ不覺人は應じたりなとて、日華門を打出でて郁芳門に向はれければ、信頼も鼻血押し拭ひ、兎角して馬に掻乘せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用に逢ふべしとも見えざりけり。左衛門佐重盛、五百餘騎をば大宮面に殘し置き、五百餘騎にて、押寄せて、呼り給ひけるは、此門の大將軍は信頼卿と見るは餘目か、かく申すは桓武天皇の苗裔、太宰大貳清盛嫡子左衛門佐重盛、生年二十三と名乘り懸けゝれば、信頼返事にも及ばず、それ防げ侍共とて引退く。大將の引給ふ間、防ぐ侍一人もなし。我先にと逃げゝれば、重盛彌勇みて、大庭の椋木の下まで攻附けたり。義朝是を見て、惡源太はなきか、信頼といふ大臆病人が待賢門を早破られつるぞや、あの敵退出せと宣ひければ、承り候ふとて懸られけり。續く兵には鎌田兵衛、後藤兵衛、佐々木源三、波多野次郎、三浦荒次郎、須藤刑部、

長井齋藤別當、岡部六彌太、猪俣小平六、熊谷次郎、平山武者所、金子十郎、足立右馬允、上總介八郎、關次郎、片桐小八郎太夫、巳上十七騎轡を雙べて馳せ向ふ。大音聲を揚げて、此手の大將は誰人ぞ、名乘れ聞かん。かく申すは清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝の嫡子、鎌倉の惡源太・平と申す者なり。生年十五歳。武藏大藏の軍の大將として、伯父帶刀先生義賢を討ちしより以來、度度の合戰に、一度も不覺の名をとらず、年積りて十九歳、見參せんとて、五百騎の眞中へ破りて入り、四より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、縱横横に一文字に、敵を颯と蹴散して、牛武者どもに目なかけそ。大將軍組んでうて、櫨匂の鎧に蝶の裾金物打ちて、黃絲毛の馬に乘りたるこそ重盛よ。押し雙べて組みて落ち、手捕にせよと下知すれば、大將をくませじと、防ぐ平家の侍ども、與三左衛門、新藤左衛門を始として、百騎許が中にぞ隔りける。惡源太を始として、十七騎の兵ども、大將軍に目をかけて、大庭の椋木を中に立てゝ、左近の櫻右近の橘を七八度まで泮廻して、組まんと組まんとぞ揉みたりける。十七騎に懸立られて、五百餘騎叶はじとや思ひけん、大宮面へ颯と引く。大將左衛門佐は弓杖ついて、馬の息を機がせ給ふ處に、筑後守つと參りて、曩祖平將軍、二度生れ參り給へる君哉と、向樣に譽め奉れば今一度駈けて家眞に見せんとや思はれけん、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、又大庭の椋木まで攻め寄せたり。大惡源太かけ向ひ、見廻していひけるは、只今向ひたるは皆新手の兵なり、但大將は元の大將重盛ぞ、以前こそ洩すとも、今度に於ては餘すまじ、押雙べて組みて捕れ兵共と下知すれば、勇に勇みたる十七騎、我先にと進みければ、今度は雖波次郎、同三郎瀨尾太郎、伊藤武者を始として、百餘騎が中に隔てたるに事ともせず、惡源太弓

をば小脇に抵挾み、鎧蹈み張りつたちあがり、左右の手を擧げ、幸に義平源氏の嫡々たり、御邊も平家の嫡なり、敵には誰か嫌はん、よれや組まんといふまゝに、先の如く大庭の椋木の下を追ひまはして、五六度までこそ揉みたりけれ。重盛組みぬべうもなくや思はれけん、又大宮面へ引きて出で、惡源太二度よで敵を追ひまくり、弓杖ついて馬に息をつがせけるに、義朝是を見て、須藤瀧口を以て汝が不覺に防げばこそ、敵度々駈入らめ、あれ速に追出せといひ遣されければ、後綱馳せて此由をいふに、承り候、進めや者共とて、色も替らぬ十七騎、大宮表に駈出でて、敵五百餘騎が中へ、面も振らず破りて入り、引立てたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下りに二條を東へ引きければ、我子ながらも義平は、能くかけたるものかな、あかけたりとぞ譽められける。大將重盛、三左衛門景安、新藤左衛門家秦、主從三騎がけ離れ、二條を東へ引かれければ、惡源太鎌田に屹と目合せて、爰に落つるは大將とこそ見れ、返せやとて追懸けたり。既に堀河にて追詰めけるが、弓手の方に材木多く充滿たるに、惡源太の乘り給へる馬、かたなつけの駒にて、材木にや驚きけん、妻手の方へけし飛びて、小膝を折りてどうと伏す。鎌田兵衛延さじと、十三束取りて番ひ、能く引きてひやうと射る。重盛の射向の袖に、はたと申りて飛び返る。鏑て二の矢を射たりければ、押附へ丁と申りて、箆かつき碎けて跳り返れり。惡源太是は聞ゆる唐皮といふ鎧ござんなれ、馬を射て落ちん所をうてと、下知せられければ、又能く引きて追う樣に、箭のかくるゝ程射込みたり。馬は屏風を返す如く倒るれば、材木の上にはね落され、兜も落ちて大童になり給ふ。鎌田堀河を馳越えて、重盛に組まんと落合ひ、重盛近附きては叶はじとや思はれけん、

弓の筈にて鎌田が兜の鉢を丁と撞く。撞かれてゆらゆる間に、兜を取りて打着けつゝ、緒を強くこそしめられけれ。與三左衛門馳寄りて、中に隔り申しけるは、漢の紐信は高祖の命に代りて、滎陽の圍を出し、終に天下を保たせき。主尊めらるゝ時は、臣死すといふにあらずや。景安こゝにあり、よれや組まんといふまゝに、鎌田兵衛と引組みて、取りて押へける處に、悪源太馬引起し、是も堀川を馳越えて、重盛に組まんと飛びて懸りけるが、鎌田をや助くる、大將をやうたんと思案しけれども、大將には又も寄合ふべし、政家をうたせては叶はじと思ひ、與三左衛門に落合ひて、三刀刺して首を取り、重盛は濕み切りたる景安討たせて、命生きて何かせんとて、既に悪源太と組まんとせられけるを、新藤左衛門馳せ來り、家參が候はざらん所にてこそ、大將の御命をば捨て給ふべけれとて、我馬を引向け、中に隔て悪源太とむずと組む。政家は重盛に組まんとしけるが、主を討たせては叶はじと思ひければ、新藤左衛門に落重りて首をかく。此間に重盛は虎口を遁れて、六波羅までぞ落られける。二人の侍なからましかば、助り難き命なり。十二月二十七日巳刻許の事なるに、一村雨さつさして、風は烈しく吹きたりけり。鎌田が鞍の前輪にも、氷筋ぬたれば乘りかねけり。悪源太是を見給ひて、手形を附けて乘れやと宣ひければ、打物抜きてぶつぶつと、手形を切りてぞ乘りたりける。鞍に手形を附くる事、此時よりぞ始れる。三河守頼盛は、郁芳門へ押し寄せて、此陣の大將は誰人ぞ、名乘られ候へと宣へば、此手の大將は清和天皇九代の後胤、左馬頭源朝臣義朝と名乘りて、悪源太は二度まで敵を追出すぞかし、進めや若者と宣へば、中宮大夫進、右兵衛佐新宮十郎、平賀八郎、佐渡式部大輔重成を始として、我も〳〵と駈られけり。

右兵衛佐頼朝は、生年十三と名乘りて、敵二騎射落し、一騎に手負せて、殊に進みて駈られけり。左馬頭宣ひけるは、何といへども若者共の軍するは、まばらに見ゆるぞ、義朝駈けて見せんとて、眞先に進まれければ一人當千の兵ども打圍みてぞ戰ひける。頼盛暫く支へられけるが、門より外へ追出さる。左朝壞きて攻め戰へば、大宮面へ引きにけり。平家馬の息を繼がせて駈入りければ源氏大内へ引籠る。源氏又馬の足を休めて駈出づれば、平家又大宮面へ引退く。平家は赤旗赤驃日に映じて輝けり。源氏は大旗緋小旗、皆押し並べて白かりけるが、風に吹き亂され、勇み進める有樣は、誠に凉しくこそ覺えけれ。源平の兵共互に命を惜まれば、眼前に討たるれども顧みず、主の先に進まんと爰を前途と戰ひたり。悪源太左衛門佐なれば討ち洩し、鎌田に向ひて宣ひけるは、郁芳門の軍は如何あらん、いざや頭殿の御先仕らんとて、打具して馳せ來り、又眞先にぞ進まれける。爰に鎌田が下人八町次郎とて、大力の剛者早走の手きゝなり。馬にてこそ具すべけれども、中々徒立よかるべし。高名せよといひければ、一年も腹卷に小具足差し固めて、眞前に進みたりけるが、敵の馬武者の遙に先立ちて落ちけるを、八町が内にて追ひつめて、首を取りたりければ、それよりして八町次郎とぞいひける。されば又この者、三河守の聞ゆる早馳の名馬に、兩鐙を合せて駈られけるに、少しも劣らず追着きて、兜のてへんに熊手を打駈けんと、續きて走りければ、頼盛も兜を打傾け傾け、あひしらはれければ、五六度は駈けはづしけるが、終にてへんに打懸けて、ゑいやと引けば、三河守既に引落されぬべう見えられけるが、帶きたる太刀を引抜きてしたゝ切り、熊手の柄を手本二尺ばかり置きて、づんと切りて落されければ、八町次郎のけに倒れて

ころびけり。京童是を見て、あはれ太刀や、あきれたり、三河殿も能く切りたり、八町次郎も能くかけたりとぞ感じける。頼盛は兜に熊手を切懸けながら、取りも捨てず見も返らず、三條を東へ、高倉を下りに、五條を東へ六波羅までからめかして落られけるは、中々優にぞ見えたりける。名譽の抜丸なれば、能く切れけるは理なり。此太刀を抜丸といふ故は、故刑部卿忠盛、池殿に豊競しておはしけるに、池より大蛇あがりて、忠盛を呑まんとす。此太刀枕の上に立ちたりけるが、自らするりと抜けて、蛇に懸りければ、蛇恐れて池に沈む。太刀も鞘に返りしかば、蛇又出で呑まんとす。太刀又抜けて大蛇を追ひて、池の汀に立ちけり。忠盛是を見給ひてこそ、抜丸とは附られけれ。當腹の愛子に依りて、頼盛是を相傳し給ふ故に、清盛と不快なりけるとぞ聞えし。伯耆國大原眞守が作と云々、三河守を落さんと、防ぎ戦ふ侍には、大監物、少監物、藤左衛門の助綱、兵藤内が子藤内太郎家綱を始として、我も我もと戦ひけり。兵藤内家俊は、元より大臆病のさとりたる者なりけるが、大勢の中に躍立られて、心ならず馳せ行きけるが、馬を射させて幸とや思ひけん、小屋の内へ逃げ入りぬ。其子家綱は、父には似ず大剛の者にて散々に戦ひ、敵數多討取りて引きけるが、父が馬は射られて伏しぬ、主はなし、生捕れにけりと無念なれば、家綱生きて何かせんとて、只一人取りて返し、多くの敵を斬り伏せて、ある兵と引組みて落ち、刺し違へて死にけるを、小屋の内にて見居たれば、心憂く悲しくて、走り出でんとは思へども、戦場なれば怖しくて、子の討たるゝを見つかざりけり。後日に六波羅へ參りけるを見て、にくまぬ者ぞなかりける。平家は勅定に任せて、皆六波羅へ引返す。源氏は謀とは知らざりけるにや、内裏なば打捨て、追懸々々攻め戦ふ。其間に官軍を入替へて、門々を固め防ぎければ、源氏内裏へは入り得ずして、そゞろに六波羅までぞ寄られける。齋藤別當と後藤兵衛とは、多くの敵を追ひ返して、東三條に控へたるに、武者二騎馳せ來れり。眞盛先づ一騎の武者に懸合ひ、和君は誰ぞと問へば、佐藤國住人東條五郎と名乗るところを能く引きて射落し、其首を取りて。是は如何後藤殿といへば、眞基も一騎の武者に馳せ向ひ、御邊は誰と問へば、讃岐國住人大木戸八郎と名乗りもはてれば、しや首の骨射落し、其首取りて、是見給へ齋藤殿、頭殿の見參にや入れん捨てやするといひければ、今朝より乘り疲らかしたる馬に、生首附けて何かせん、いざ捨てんといひけるが、二條堀川まで馳せ來り、材木の上に二つの首を差し置きて、軍見ける在地の者共に預けて、此首失ふべからずといひ含めて、駈出づれば、失ひては悪しかりなんとて、日暮までふるひふるひ守りけるなり。右衛門督信頼は、今朝待賢門を破られて後は、軍の事は思ひも寄らず、隙を求めて落ちん落ちんとぞせられける。義朝駈出でて後は、大内にも忍びずして、御方の跡に附きて、おつおつ河原まで出られるが、六波羅へは寄せずして、河原を上りに落られけり。金王丸是を見て、右衛門督殿こそ落させ給へ、追駈進らせんと申せば、義朝たゞおけ、あれ體の不覺人、あれは中々軍がせられぬぞとて、河原を下りにぞ寄られける。

教盛、乃千騎を以て、横より大内に入り、諸門を開して之を守る。義朝、義平獲る所無くして宮に還る。宮みな赤旗となる。進退據る所を失ひ、進みて六波羅を攻

む。清盛、乃北臺に上り床に踞して指麾す。賊兵沓至す。官軍逐巡す。賊勝に乗じて進む。矢、内戸に及ぶ。清盛怒りて馬に上り、大に呼びて馳せ出でゝ親ら敵陣を突き、兵を更て交々進む。賊逐に大に敗走す。清盛乃大内に入り名簿を收め、笑ひて曰く、「昨予へ今取る、何ぞ速なる」と。乃兵を分ち賊を追ふ。義朝は關東に走り、信頼は仁和寺に至りて、哀を上皇に乞ふ。上皇爲に之を帝に請ふ。帝許し給はず。重盛曰く、「即之を宥せ彼れ何をか能く爲さん」と。清盛曰く、「首惡誅せざる可らず。且帝の命を如何せん」と。乃教盛を遣し、兵を引きて仁和寺を圍ましめ、信頼及び其黨源師仲、藤原成親等五十餘人を捕へ、信頼を六條磧に斬る。重盛、教盛、成親と姻あり。乞ひて之を宥す。

義朝誅せらる

帝、清盛の戰功を賞し、其子弟の官爵を進む。尾張の人長田忠致、義朝を誅し、其首を獻ず。之を獄門に梟す。頼盛の將平宗清、亦義朝の少子頼朝を捕へて至る。將に斬らんとす。宗清之を憫み、池尼に因りて宥されんことを請ふ。池尼は頼盛の母、清盛に於ては繼母たり。清盛聽さず。尼怒りて曰く、「刑部卿任ばら汝安ぞ我が言を侮るを得んや」と。重盛、頼盛と固く請ふ。乃死一等を減じ、伊豆に流す。義平、服を變じて京師に入り、清盛を狙擊せんとす。清盛之を覺り、捕獲して

平氏の威天下に振ふ

之を斬る。平氏の威天下に振ふ。

肥前の人日向通良亂を作す。平家貞を遣し之を討ち夷く。

【上皇】後白河
永暦元年

是時に當りて、政、上皇に在り。藤原經宗、藤原惟方、帝に勸めて政を親らせしむ。兩宮交惡し。上皇、清盛を引きて自援く。永暦元年、上皇、清盛を正三位に進め、參議に任ず。清盛、乃上皇の旨を奉じて、經宗、惟方を收執す。帝甞て故近衛帝の后を納れて中宮となす。世之を二代の后と呼ぶ。清盛二人の諫めずして、帝を惡に陷るゝを以て罪となし、之を斬らんと欲す。前關白忠通救ひ解く。乃死を宥し流に處す。明年、清盛累遷して權中納言に至る。六年、遂に從二位に進み、權大納言に任ず。重盛正三位參議に至る。

六年
清盛等昇進

永萬元年

永萬元年、秋、帝崩ず。諸寺の僧徒葬に會す。延暦、園城の二寺、禮を爭ひて鬪はんと欲す。上皇源頼政を召して自衛る。訛言あり。上皇、平氏を圖ると。平氏大に驚き、兵を聚めて自守る。重盛曰く、「事必妄なり。請ふ、法住寺に往きて親ら之を驗せん」と。法住寺は、上皇の宮なり。乃往く。途に上皇の來りて平氏の第に幸し、口づから解諭し玉はんと欲するに遇ふ。因りて扈還す。清盛、病と稱し出でず。重盛入りて諫めて曰く、「大人宜しく出でゝ謁すべし。吾が宗、功ありて

西光

六條天皇
【滋子】兵部大輔時信の女

仁安元年

二年

三年

高倉天皇
【帝の母】寵后
滋子

罪なし。事何んぞ遽に此に至らんや。大人愼みて之を辭色に形す勿れ。不ざれば則讒或は因りて以て入らん。苟くも吾忠直を執らば、何渠ぞ人言を畏れんや」と。清盛之を善とすれども、竟に出でず。上皇還り左右に謂て曰く、「訛言誰か之を使むるものぞ」と。藤原師光、前みて曰く、「天これを言しむるのみ」と。衆敢て應ふる者なし。師光は阿波の人、嘗て狡黠を以て、藤原憲に愛使せらる。後髮を剃り西光と稱す。院の北面たり、頗る寵あり。心、平氏の驕恣を嫉む。數間に承り、上皇に說く。

是時太子嗣いで立つ。是を六條帝とす。帝幼し。政、復上皇に歸す。上皇の寵后滋子は清盛の妻時子の妹たり。憲仁を生む。上皇之を立てんと欲す。仁安元年、清盛を以て正三位に叙し、內大臣に任ず。二年、遂に從一位に至り、太政大臣に陞る。隨身兵仗を賜ひ輦車にて宮に入るを聽す。敕して邑を播磨、肥前、肥後に賜ひ、大功田と爲して世襲しむ。重盛、從三位に叙し、權大納言に任ず。劒を帶して殿に昇るを聽す。次子宗盛、從三位に叙し、參議に任ず。三年二月、憲仁、禪を受く。而して五歲なり。是を高倉帝とす。帝の母の兄、大納言時忠、衆に謂て曰く、「一方今天下の人、平族に非ざる者は、人に非ざるなり」と。是の時に當り、平族

淨海

嘉應元年

資盛

基房

承安元年
【嬉子】建禮門院

四年

治承元年

の朝官たる者、六十餘人。其采邑三十餘州に跨る。朝政盡く清盛に決す。清盛疾あり、詔して非常の赦を行ひて、以て之を禱る。既にして清盛髮を削り淨海と稱す。別第を西八條に興して居る。童三百を選び、異服を服せしめ、京城の內外に散布し、誹謗する者を察して輒法に處す。京師目を側つ。上皇積みて平かなる能はず。嘉應元年、上皇髮を削り、法皇と稱す。平氏益々横なり。

重盛の次子資盛、數騎と出でゝ獵し、途に攝政藤原基房に値ふ。馬より下りず。徑に其衛を衝く。衛士捽みて之を下す、重盛、資盛の無禮を責む。基房、衛士を縛送して以て謝す。重盛其縛を釋きて、勢して之を遣る。清盛之を聞き、怒りて曰く、「今日に當りて、誰か敢て淨海の孫を辱むる者ぞ。必之に報いん」と。重盛諫め止む。清盛聽かず。三百人を伏せて、基房を路に要して其車を摧折し、從者の髻を切る。帝因りて朝を輟めらるゝこと三日。重盛、資盛を追ひて伊勢に之かしむ。

承安元年、清盛、其女德子を進めて女御と爲し、遂に立てて中宮とす。四年、右近衛大將闕く。重盛奏し請ひて自ら之を拜す。治承元年、左近衛大將に轉じ、尋いで內大臣に拜す。小松の第に居る。弟宗盛、右近衛大將となる。已にして正二位に進

成親即平氏を討んとす

行綱

鹿谷の會合

む。朝臣擧りて平氏を妬む。藤原成親、權大納言を以て法皇の執事となる。重盛、其妹を娶りて子の維盛を生む。又其女を娶りて子の婦とす。成親の子成經、教盛の女を娶る。然して成親、殊に大將と爲るを希ふ。しかれども得ず。居常憤々たり。遂に平氏を滅さんことを圖る。乃西光と與に謀り、藏人源行綱を嬖し、密に之に語りて曰く、「平氏の專恣なること、子の目する所なり。吾れ院勅を受けて、陰に之を圖る。而して未だ將率を得ず。子は源氏の胄なり。盍ぞ我將と爲りて、殊功を成し、顯位を取らざる」と。行綱之を諾す。成親遂に檢非違使平康頼、式部大輔藤原章綱、前近江守源成雅等に結ぶ。又法勝寺の執行俊寛に結ばんと欲し、數之に酒を飲しめ、姫人をして侍せしめ、因りて間に乘じて之に說く。其鹿谷の別館に會して事を計るや、宴酣にして馬逸す。坐者驚き起ち、誤ちて瓶子を仆す。成親曰く、「平氏仆る」と。西光曰く、「盍ぞ其首を梟せざる」と。康頼進みて曰く、「首を梟するは、檢非違使の任なり」と。瓶を取りて之を柱上に懸く。一坐大に笑ふ。成親因りて策を建て、曰く、「祇園の祭日、京市雜沓すべし。此時に乘じて火を平氏の第に縱ちて、疾く之を攻めば、以て逞しくすべし」と。乃行綱に布五十匹を遺り、諸將の向ふ所を部署す。未だ發せず。

明雲

行綱自首

【新大納言】成親

西光の子師高、加賀守となる。其目代師經、白山の僧徒と鬪ふ。僧徒來りて之を延曆寺に訴ふ。延曆寺の僧徒、之と兵を合せて京師に入りて、闕を犯す。重盛三千騎を以て宮門を衛り、擊ちて之を卻く。山徒服せず。還りて再擧を圖る。法皇、平時忠をして往きて之を諭解せしむ。五月、師高、師經を誚めて之を流す。西光慙恨す。終に叡山の坐主明雲を法皇に間して、流に處す。明雲素より清盛と善し。清盛爲に奏して之を救ふ。省ず。已にして山僧明雲を奪ひ還る。法皇怒りて、諸將士に敕して之を討たしむ。清盛敕を奉せず、則更に成親に敕す。成親大に喜び、因りて兵を聚む。

行綱、自度る事竟に成らじ、自首するに若かずと。乃、夜馳せて西八條に赴く。清盛福原に在りと聞きて、又赴き、面あたり事を告げんと請ふ。清盛出でて之に面す。行綱曰く、「院中兵を集む。君其由を知るや」と。清盛曰く、「山徒を攻めんと欲するのみ」と。行綱進みて其耳に附け、語りて曰く、「否々、事貴族に係る、嚮日新大納言氏俄に行綱を鹿谷に要す。謀云々。聞く法皇も亦親ら臨まんと欲す。法印靜憲之を諫むるに因りて止む。事已に此に至る。敢て告げずんばあらず」と。清盛大に駭き、直に京師に歸り、悉く子弟宗族を召し、檢非違使阿部資成を遣し、

【院中】後白河法皇の宮

院中に就きて奏して曰く、「凶徒ありて臣の宗を滅さんと圖る。臣且に執へて之を鞫さんとす。然れども事必源あらん。是を以て敢て奏す」と。法皇、色を失ひ、答へらるゝ所を知らず。

西光

乃西光を縛して至り、階下に跪かしむ。清盛叱して曰く、「下奴、過分の寵を恃みて、無非を構陷し、又敢て我が家を危くせんと欲す」と。西光笑ひて曰く、「何をか過分と謂ふ。公の父但馬守は朝官の齒するを愧づる所。公は其嫡子たり。常に高履を著きて中御門氏に伺候す。人呼びて高平太と曰ひき。十八九の比、海賊二十人を捕へし功を以て、四位兵衛佐と爲れるを、人以て異數となせり。而今乃太政大臣に至る。是れ之を過分と謂ふのみ」と。清盛大に怒り、躍り起ちて其面を蹴る。痛く之を掠治して、實を得たり。命じて其口を裂かしむ。

又人をして成親を召さしむ。成親未だ事の覺るゝを知らずして曰く、「平公山徒を宥さんと欲して、吾をして法皇に請はしむるのみ」と。乃往く。西八條に及ぶ比、甲士の繹騷するを見て、心驚き、門に入るに及びて、平氏の士難波經遠、妹尾兼康、綱進してこれを捽へて、小室に囚し、將に昏を待ちて之を殺さんとす。成經、康賴以下、皆逮捕せらる。久しくして重盛至る。乘迎へてこれに謂て曰く、

【惡左府】頼長

「大事あり。公來る何ぞ晩き」と。重盛曰く、「是れ私事なり。何ぞ大事と言はんや」と。入りて清盛に謂つて曰く、「大納言を殺さんと欲すと聞く。願くは之を再思せよ。兒豈姻戚を以て爾云はんや。彼れは名族たり。君の寵を受く。未だ私怨を用ゐて殺す可からず。往時少納言信西死刑を興行して、惡左府の墳を發けり。二歳ならずして、信西の墓も、亦藤原信賴に發かる。善惡の應ずる、殃慶立どころに至る。願くは之を再思せよ」と。出でゝ經遠、兼康を見て、其亡狀を讓め、因りて之を戒めて曰く、「慎みて我が公をして怒に乘じ、悔に抵らしむる勿れ」と。乃歸る。教盛も亦成經の爲に固く請ふ。皆死を減ずるを得たり。

清盛怒怒

【內府】重盛

而して清盛怒り自ら禁へず。乃就きて成親を見る。成親首を低る。清盛呼びて之を仰がしめて曰く、「公の面憎むべし。公は當に平治に死すべき者、內府の請ひに因りて之を宥す。祿位並に隆し。何を苦みて反くぞ」と。成親曰く、「僕何ぞ與り知らんや。事必讒口に出づるならん。僕、貴族に於て何の怨むる所ありて敢て倍畔せんや」と。清盛、左右を顧て、西光の狀を取り來らしめ、乃自讀むこと二過して曰く、「猶與り知らずと言ふか。公の面憎むべし」と。其狀を以て成親の面に擲ちて入り、經遠、兼康をして成親を拷掠せしむ。二人重盛を畏れ、成

清盛流涕

【新院】崇德上皇
【重仁親王】崇德帝の子
【故院】鳥羽法皇

親を庭に下し、其耳に附して曰く、「我が公壁を隔て聽く。君第叫號せよ」と。二人地を擊つ。成親輙叫ぶ。清盛曰く、「可なり」と。

是に於て、清盛乃甲を被り長刀を執り、出でゝ平貞能を召して曰く、「亟に將士を戒めよ。今擧朝の人、我を嫉みて我を圖る。蓋し、我が官爵の分を踰ゆると謂ふのみ。在昔田村丸は微者なり。東夷を下したる功を以て、大將に超拜す。他も此に類する者多し。豈獨淨海のみならんや。淨海の勤勞一日に非ざるなり。保元の變に我宗族大半新院に赴けり。且重仁親王は我父の覆育せし所なり。而るに我は故院の遺詔を思ひ、獨官軍に屬し、終に亂逆に克ち平く。平治の變に、信頼、義朝の猖獗なる、吾にして自愛せば、事未だ知る可からず。命を重んじ躬を輕んじ凶黨を夷滅して、以て經宗、惟方等を收むるに至る。數大難を冒す。官家の爲にするに非ざるものなし。此を以て之を言へば、官家の恩宥、子孫に窮むと雖も可なり。今乃輕しく讒言を信じて族滅せられんと欲す。即し告ぐる者なければ、豈危殆ならずや。異日細人、再、言を進むる有らば、則、宣を下し我を討ち、我を目けて賊とせん。悔ゆ可らざるなり。吾先づ發して之を鳥羽の宮に移さんと欲す。否らざれば此に幸するを請はんのみ。北面の奴輩或は且我を扞がん。亟に將士を戒しめよ」と。

主馬盛國といふ者あり。馳せて重盛に告ぐ。重盛、大に驚き、急に駕を命じて之に赴き、第門に入る。族人皆甲を擐き、馬に鞍し、旌幟列を成し、將に起たんとす。重盛、烏帽直衣にて入る。宗盛其袖を叩きて曰く、「公は何を以て甲を被らざる」と。重盛睨して曰く、「汝等何を以て甲を被る。敵人何くに在りや。吾れ大臣大將たり。寇賊闕を犯すこと有るに非ざるよりは、則甲を被る可らざるなり」と。清盛之を望み見て、遽に起ちて黑衣を表して出づ。數襟を正うすれども、襟呿くして甲覩る。重盛に謂て曰く、「吾れ西光の狀を察するに、成親等の如きは乃其枝葉のみ。間群小彙進して、覦覬すること已まず。而して御するに輕躁の君を以てす。何ぞ至らざる所あらんや。我れ且、一邊に幸せんとを請ひて。以て事の定るを待たんと欲す」と。語未だ畢らざるに、重盛泣數行下る。之を久しくして言て曰く、「重盛、尊貌を熟視するに、吾が家門已に衰運に屬するを知れり。重盛これを聞く、世に四恩あり皇恩を最とす。抑我門は桓武葛原の胤を辱くすと雖も、而れども降りて人臣と爲り、中ごろ微にして顯れず。平將軍の功を以てすら、國守となるに過ぎず。刑部卿、內昇殿を聽されし時、萬人反唇せり。大人に

重盛諫言

【輕躁の君】後白河法皇

【四恩】天地、國主、父母、衆生の恩

至るに及びて、乃太政大臣に陞る。兒の不肖を以て且大臣大將を辱くす。宗族朝廷、騈び植ちて、田園天下に半なり。恩を明ること極れり。官家の疾む所たり。誰か宜ならずと謂はんや。而れども運命未だ戈きず。讒人既に獲たり。宜しく罪の當る所を論じて、退きて事の由を陳ぶべし。則公家、豈威を霽さゞる有らんや。何ぞ必しも草々に爲さんや。兒、また之を聞く、王事を以て家事を辭し、家事を以て王事を辭せず」と。況や善惡較著なる者をや。重盛六位より三公に至る。君恩に沐浴する、舉ぐるに勝ふ可からず。嚮背の決、自、在るあり。素より撫循す

（平重盛諫言之圖）

る所の士、重盛の爲に死を願ふ者、二百餘人あり。保元の亂に、源下野守、敕命を以て六條判官を斬りき。兒當時に在りて、以て大逆無道、言ふに忍びざる者とせり。此れ大人親ら睹る所に非ずや。忠ならんと欲すれば則孝ならず。孝ならんと欲すれば則忠ならず。重盛、進退、此に窮る。生きて是感を覩るより死するに若かず。大人必今日の擧を遂げんと欲せば、先づ重盛の首を刎ねて、然る後發せよ」と。且言ひ、且泣く。坐を擧げて感動す。清盛曰く、「淨海、衰老を以て此擧を爲すは、一身の爲に計るに非ず。徒子孫を慮るのみ。乃以て不可と爲さば、汝好く之を計れ」と。乃起ちて內に入る。

平家物語（小松殿訓の事）

新大納言は、一間なる所に押し込められて、汗水になりつゝ、哀是は日頃のあらましごとの、洩れ聞えけるにこそ。誰洩しぬらん、定めて北面の輩の中にぞおらんなど、思はじことなう案じ續けておはしける所に、後より足音高らかにしければ、すは只今我命失はんとて、武士共の參るにこそと思はれければ、さはなくして、入道板數高らかに蹈み鳴し、大納言のおはしける後の障子を、さと引き開けて出でられたり。素絹の衣の短らかなるに、白き大口ふみくゝみ、ひじりづかの刀押しくつろげて指すまゝに、以の外に怒れる氣色にて、大納言を暫し睨まへて、抑御邊は平治にも既に誅せらるべかりしを、內府が身に代へ

で申し受け、首を繼ぎ奉りしはいかに。然るにその恩をわすれて、何の遺恨あり てか、當家傾けんとはし給ふなるぞ。恩を知るを以て人といふぞ。恩を知らざるをば畜生とこそいへ。されども當家の運命、未盡きざるによりて、是までは迎へたるなり。日比のあらましの次第、直に承らんとの給へば、大納言全くさる事候はず、如何樣にも人の讒言にてぞ候ふらん。能く〳〵御尋れ候ふべしと申されければ、入道いはせもはてず、人やある〳〵と召されければ、眞能つと參りたり。四光が白狀取りて參れとの給へば、持ちて參りたり。入道是を取りて、押し返し押し返し、二三返高らかに讀み聞かせ、あな惡くや、此上をば何とか陳ずべかなるぞとて、大納言の顏にさと投げかけ、障子をちやうと引き立てゝ出でられけるが、猶腹をすゑかねて、經遠發惡と召す。難波の次郎、妹尾の太郎まゐりたり。あの男取りて庭へ引き落せ、との給へば、是等左右なくもし奉らず、小松殿の御氣色、如何候はんずるやらんと申しければ、入道よしよし、己等は內府が命を重じて、入道が仰をば輕くしける、ござんなれ、入道よ上は力及ばずとの給へば、是等惡しかりけんとや思ひけん、立ちあがり、大納言の左右の手を取りて、庭へ引き落し奉る。其時入道心地よげにて、取りて伏せて、なめかせよとぞの給ひける。二人の者ども、大納言の左右の耳に口を當てゝ、如何樣にも御聲の出すべく候ふと、さゝやきて引き伏せ奉れば、二聲三聲おめかれけり。その體冥土にて、獄卒世界の罪人を、或は梼の杵に懸け、或は靜頗梨の鏡に引き向けて、罪の輕重に任せつゝ、阿房羅刹が呵責すらんも、是には過ぎじとぞ見えし。籌樂捕はれて、韓彭にらぎすされたり。鬼鉗戮を受け、衆議罪せらる。例へば蕭何、樂噲、韓信、彭越、是等は皆高祖の忠臣たりしか

ども、小人の讒によりて、過敗の恥を受くとも、かやうの事をや申すべき。新大納言は、我身の如此なるにつけても、子息丹波の少將成經、以下幼き者共の如何なる憂き目にか遭ふらんと、思ひやるにも覺束なし。さばかり暑き六月に裝束をだにもくつろげられず、暑さも堪へ難ければ、胸もせきあぐる心地して汗も涙も爭ひてぞ流れける。さりとも小松殿は思し召し放たじものを、さは思はれけれども、誰して申すべしとも覺え給はず。小松の大臣は、例の善惡に感ぎ給はぬ人にておはしければ、遙に日たけて後、嫡子權の佐少將維盛を、車のしりに載せつゝ、衛府四五人、隨身二三人召し具して、軍兵共をば一人も具せられず、誠に大やうげにておはしたれば、入道をはじめ奉りて、一門の人々皆思はずげにぞ見給ひける。大臣中門の口にて、御車より下り給ふ所へ、眞能つと參りて、など是程の御大事に、軍兵をば一人も召し具せられ候はぬやらん、と申しければ、大臣大事とは天下の事をこそいへ、かやうの私事を大事といふやうやある、との給へば、兵仗を帶したりける兵共、皆そゞろひてぞ見えたりける。その後大臣大納言をば、何處に置き奉りたるやらんと、此處彼所をあけあけ見給ふに、或障子の上にくも手結びたる所あり、こゝやらんとてあけられたれば、大納言おはしけり。涙に咽び打ち伏して、目も見あげ給はず、如何にやとの給へば、その時見つけ奉りて、嬉しげに思はれたる氣色、地獄にて罪人共が、地藏菩薩を見奉るらんも、かくやと覺えて哀れなり。何事にて候やらん今朝よりかゝる憂き目に遭ひ候ふ。さて渡らせ給へば、さりともとこそ深く頼み奉りて候へ。平治にも既に誅せらるべかりしを、御恩を以て首を繼がれ參らせ、剩正二位の大納言まで經上りて、年既に四十に餘り候、御恩こそ生々世々

にも報じ盡し難う候へども、今度も又かひなき命を助けさせおはしませ、沙汰にも候はゞ、出家入道仕り、如何ならん片山里にも籠り居て、一筋に後世菩提の勤を營み候はんとぞ申されける。大臣さ候へばとて、御命失ひ奉るまでのことはよも候はじ、假令さ候ふとも、重盛かくて候へば、御命には代り參らせ候ふべし、御心安く思し召され候へとて、父の禪門の御前におはして、あの大納言失はれんことは、能く〳〵御趣意候ふべし。その故は先祖修理の大夫顯季、白河の院に召し使はれ參らせしより以來、家にその例なき正二位の大納言に經上りて、剩當時君無双の御いとほしみ、頭を刎れられん事然るべくも候はず。只都の外へ出されたらんに、事足り候ひなんず。北野の天神は、時平の大臣の讒奏にて、うき名を西海の涙に流し、西の宮の大臣は、多田の滿仲の讒言により、恨を山陽の雲に寄す。各無實なりしかども、流罪せられ給ひにき。是皆延喜の聖代、安和の御門の御僻事とぞ申し傳へらる。上古猶此の如し、況や末代に於てをや。賢王なほ御誤あり、況や凡人に於てをや。既に召し置かれぬる上は急ぎ失れずとも何の恐か候ふべき。刑の疑しきなれば輕くせよ、功の疑しきなれば重くせよ、とこそ見えて候へ。事新しき申しごとにて候へども、重盛彼大納言が妹に相具して候。維盛又聟なり。かやうに親しく馴り成りて候へば、申すとや思し召され候ふらん。一向その儀にては候はず。只君のため國のため、世のため家のための事を申し候ふ。一年故少納言入道信西が、執權の時に相當りて、我朝には嵯峨の皇帝の御時、右兵衛の督藤原の仲成を誅せられてより、以來保元まで、君二十五代の間、行はれざりし死罪を始めて取り行ひ、宇治の悪左府の屍を堀り起して、執權せられたりし事などまでは、餘なる御政とこそ

存じ候へ。されば古の人も、死罪を行へば、海内に謀反の絶えずとこそ申し傳へて候へ。此闘につきて、中二年ありて、平治に又世亂れて、信西が埋まれたりしを堀り起し、頭を刎れて、大路を渡され候ひき。保元に申し行ひし事の幾程もなくて、はや身のとに報はれにき、と思へば恐しくこそ候へ。是はさせる朝敵にても候はず、かたゞ〳〵恐あるべし。御榮花殘る所なければ、思し召さるゝ事はあるまじけれども、子々孫々まで繁昌こそあらまほしく候へ。されば父祖の善惡は、必ず子孫に及ぶとこそ見えて候へ。積善の家には餘慶あり。積惡の門には餘殃止るとこそ見えて候へ。如何樣にも、今夜頭を刎れられんことは、然るべくも候はずと申されたりければ、入道げにもとや思はれけん、死罪を止ばし止り給ひけり。其後大臣中門に出でゝ侍共にの給ひけるは、仰なればとてあの大納言失はんこと、左右なくあるべからず。入道腹立のまゝに、物騒しきことし給ひて、後には必ず悔み給ふべし。僻事して我怨むなとの給へば、兵仗を帶したりける兵共、皆舌を振ひて恐れおのゝく。さても今朝經遠兼康が、あの大納言に情なく當り奉りたることこそ、返す〳〵も奇怪なれなど、重盛がかへりきかんずる所をば、憚らざりけるぞ、片田舍の侍は皆かゝるぞよとの給へば、難波も妹尾も、共に恐れ入りたりけり。大臣はかやうにの給ひて、小松殿へぞ歸られける。さる程に大納言の侍、急ぎ中御門、烏丸の宿所に歸り參りて、此由かくと申しければ、北の方以下の女房達、聲々になめき叫び給ひけり少將殿を始め參らせて、幼き人々も、皆捕はれさせ給ふべきよし、承りて候へ急ぎ何方へも、忍ばせ給ふべくもや候ふらんと申しければ、北の方今はこれ程になりて、殘り止る身とても、安穩にて何にかはせんなれば、只同じ一夜の露

さも消えんとこそ本意なれ。さても今朝をかぎりと知らざりつるとの悲しさよ。さて、引きかつぎてぞ伏し給ふ。既に武士共の近づく由聞えしかば、かくて船がましく、うたてき目を見んもさすがなればとて、十になり給ふ女子、八歳の男子、一車に取り乗せて、何地をさすともなく遁り出す。さてしもあるべき事ならねば、大宮をのぼりに、北山の邊雲林院へぞおはしける。その邊なる僧坊に下し置き奉り、送の者共は身々の捨てがたさに、皆暇申して歸りにけり。今は稚き人々ばかり残り居て、又こと問ふ人もなくしておはしけり。北の方の心の中、推し量られてあはれなり。暮れ行く影を見給ふにつけても、大納言の露の命、この夕をかぎりなりと、思ひ遣るにも消えぬべし。宿所には女房侍多かりけれども、物をだに取りしたゝめず、門をだに押しもたてず、既には馬共多く並み立ちたれども、草飼ふ者一人もなし。夜明けぬれば、馬車門に立ち並み賓客座に連りて、遊び戯れ舞ひ躍り、世を世ともし給はず。近きあたりの者共は、物をだに高くいはず、おぢ恐れてこそ、昨日までもありしに、夜の間に變るありさま、盛者必衰の理は、目の前にこそ現れたれ。樂盡きてかなしみ來るとぞかれたる、江相公の筆の跡、今こそ思ひしられけれ。

平家物語（教訓の事）

太政の入道は、かやうに人々數多いましめ置きても、猶心ゆかずや思はれけん既に赤地の錦の直垂に、黒糸威の腹卷の白金打ちたる胸板せめ、先年安藝の守たりし時、神拜の次に靈夢を蒙りて、嚴島の大明神より、うつゝに給られたりける、銀のひるまきしたる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを、脇にはさみ、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゆしくぞ見えし。眞能さめ

ず。筑後の守眞能は、木蘭地の直垂に、緋威の鎧きて、御前に畏りてぞ候ひける。入道の給ひけるは　如何に眞能、この事はいかゞおもふぞ。保元に平右馬助を始として、一門半過ぎて、新院の御方に參りにき。一の宮の御事は故刑部卿の養君にてまし〳〵しかば、旁見放ち參らせ難かりしかども、故院の御遺誡に任せて、御方にて先をかけたりき。是一つの奉公。次に平治元年十二月、信頼義朝が謀反の時、院内を取り奉りて、大内にたてこもり、天下暗闇となりたりしにも、入道殿分身を捨てゝ京都を追ひ落し、經宗維方を召しいましめしに至るまで、君の御爲に、既に命を失はんとする事度々に及ぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば、七代までは思し召し捨てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の無道人が申すことに、君のつかせ給ひて、動もすれば、此一門滅さるべきよしの御結構こそ然るべかられ。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となりて後は、如何に悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずばこれへまれ、御幸をなし參らせんと思ふはいかに。その儀あらば、定めて北面の者共が中より矢なも一つ射んずらん。其用意せよと、侍どもに觸るべし。大方は入道院方の奉公思ひ切りたり。馬に鞍置かせよ、きせながら取り出せとこそ給ひけれ。主馬の判官盛國、急ぎ小松殿へ馳せ參りて、世はいはやかく候ふと申しければ、大臣聞きもあへ給はず。あゝはや、成親の卿の頭刎れられたらんなどの給へば、その儀にては候はれども、入道殿の御きせながを召され候ふ上は、侍共をも打ち立ちて、只今院の御所、法住寺殿へ寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の

北殿へ移し參らすか、然らずば是へまれ、御幸をなし參らせんさは候へども、内々は鎭西の方へ流し參らせんさこそ、議せられ候ひつれさ申しければ、大臣何に依りて、只今さる事のおはすべきさは思はれけれども、今朝の禪門の氣色さる物狂しきこともやおはすらんさて、急ぎ車を飛ばせて、四八條殿へぞおはしたる。門前にて車より下り、門の中へさし入りて見給ふに、入道腹卷を着給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各色色の直垂に思ひ〳〵の鎧きて、中門の廊に二行に着座せられたり。其外諸國の守領衛府諸司などは、椽に居こぼれ、庭にもひしと並み居たり。旗竿ども引きそばめ〳〵、馬の腹帶をかため、甲の緒をしめ、只今皆打ち立たんずる氣色どもなるに、小松殿烏帽子直衣に、大文の指貫のそばさりて、さやめき入り給へば、事の外にぞ見へられける。入道ふしめになりて、あはれ例の內府が、世をへうする樣に振舞ふものかな。大に諫めばやと思はれけれども、さすが子ながらも、內には五戒を保ちて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮義を正しくし給ふ人なれば、あの姿に腹卷を着て向はんこと、さすが思へば、ゆうはづかしくや思はれけん、障子を少し引き立て、腹卷の上に素絹の衣を、あわてぎに着給ひたりけるが、胸板の金物の少しはづれて見へけるを隱さんさ、類に衣を引違へ〳〵ぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛卿の座上につき給ふ。入道の給ひ出さるゝこともなく、大臣も又申し上げらるゝ旨もなし。やゝありて入道の給ひけるは、あの成親の卿が謀反は、事の數にも候はず。一向法皇の御若構にて候ひけるぞや。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずばこれへまれ、御幸をなし參らせんと思ふはいかにとの給へば、大臣聞きもあへ給はず、はら〳〵さぞなかれける。入道さて如何にやいかに、とあきれ給へば、やゝありて大臣涙をおさへて、この仰承り候ふに、御運ははや末になりぬさ覺え候、人の運命の傾かんさては、必ず惡事を思ひ立ち候ふなり。又御有樣を見參らせ候ふに、更に現さも覺えず候。さすが我朝は、遙地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒根屋命の御末、朝の政を擧らせ給ひしより以來、太政大臣の官に至る人の甲冑を鎧ふこと、禮義を背くにあらずや。就中御出家の御身なり。それ三世の諸佛、解脫憶相の法衣をぬぎ捨てゝ、忽に甲冑を鎧ひ、弓箭を帶しましまさんこと、內には破戒無慚の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。旁恐ある申事にて候へども、心の底にしいしゆを殘すべきにも候はず。先づ世に四恩候ふ、天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩是なり。その中に、尤重きは朝恩なり。普天の下王地にあらずといふ事なし。されば彼顯川の水に耳を洗ひ、首陽山に薇を折りし賢人も、勅命背き難き禮義をば、存知すさこそ承はれ。如何にいはんや、先祖にも未聞かざりし、太政大臣を極めさせ給ふ、所謂重盛が無才愚暗の身を以て、連府槐門の位にいたる。加之國郡半は一門の所領となりて、田園悉く一家の進止たり。是幾代の朝恩にあらずや。是等の莫大の御恩を思し召し、忘れさせ給ひて、亂りがはしく法皇を傾け參らさせ給はん事、天照大神、正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんずそれ日本は神國なり、神は非禮を受け給ふべからず。然れば君の恩し召し立たせ給ふ所、道理半なきにあらず。中にも此一門は、代々の朝敵を平げて、四海の激浪を鎭むることは、無双の忠なれども、其賞に誇ることは、傍若無人さも申しつべし。聖德太子十七箇條の御憲法に、人皆心あり、心各執あり、彼を是

し我を非し、我を是し彼を非す。是非の理誰か能く定むべき。相共に賢愚なり環の如くにして端なし。爰を以て假令人怒るといふも、却りて我咎を恐れよ、とこそ見えて候へ。然れども當家の運命未盡きざるによりて、御謀反既に顯れさせ給ひ候ひぬ。その上仰せ合せらるゝ成親卿を、召し置かれぬる上は、假令君如何なる不思議を思し召し立たせ給ふとも、何の恐れか候ふべき。所當の罪科行はれぬる上は、退きて事のよしを陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈奉公の忠勤をつくし、民のためには慈撫育の愛憐を致させ給はゞ、神明の加護に預りて、佛陀の妙慮に背くべからず。神明佛陀惑聰あらば、君も思し召し直すこと、などか候はざるべき。君と臣とを比ぶるに、親疎私なし。道理と僻事を能べんに、いかでか道理につかざるべき。

重盛顧みて、諸弟を讓めて曰く、「今日の事、縱ひ公をして老耄して事を發せしむるも、子等何ぞ匡救せずして、乃之を慫慂するや」と。出でて將士を敕めて曰く、「公に從ひて院に赴かんと欲する者は、重盛の首を刎ぬるを見て、然して後行け」と。乃小松の第に還る。

既に夜となり、憂慮して措く能はず。是に於て令を出し兵を徵して曰く、「大事あり、速かに來り會せよ」と。衆相告げて曰く、「沈重の人、此の如き令を出すは、必ず由有らん」と。是に於て爭ひて之に赴く者、一夕に二萬餘騎なり。而して西八條復一人無し。重盛、乃家貞、貞能をして往きて清盛を護らしむ。清盛問ひて曰く、「小松の第何に由りて兵を徵す」と。二人對へて曰く、「院、內府に宣して曰く、『汝が父、君恩を忘れて、國家を亂さんと欲す、汝に命じて之を征伐せしむ』と。內府、君の自ら急にするを慮りて、臣等をして來り護らしめて曰く、『君これを安んせよ。重盛在り當に身を以て請ふべし』と。清盛、惶懼して曰く、「我が爲に內府に語げよ。吾れ前途已に迫る。事を事とせず、唯卿、これを令せよ」と。二人還り報ず。重盛、漣然として曰く、「父をして此語を爲さしむ。吾罪大なり」と。乃親ら臨み兵を勞して曰く、「汝等召に應じて即來る。眞に平生に負かず。而れども事謬傳に出づ。宜しく亟に罷め去るべし。後緩急有らば、幸にこれに狃ふなかれ」と。因りて盡く罷め去る。法皇之を聞きて泣きて曰く、「重盛怨に報ずるに恩を以てす。人をして慙愧せしむ」と。

已にして清盛、武士をして西光を禹せしむ。並に師高、師經を殺し、成親を備前に流す。後、人をして之を殺さしむ。成經、康賴、俊寬を硫黃島に放つ。敎盛常に成經に餽遺す。成經之を二人に分つ。因りて乏からざるを得たり。

二年、中宮妊す。清盛、身親ら嚴島の神に祈りて、皇子を得んことを冀ふ。敎盛、乃重盛に因りて、赦令を下さんことを請ふ。成經、賴康、歸るを得。俊寬、終に

【禹】肉を剔り骨に至る
【硫黃島】薩摩
治承二年
【嚴島】安藝

安徳天皇降誕
【法皇】後白河
三年
宋醫
重盛薨去
太政入道

島中に死す。十一月、中宮將に產せんとして難み給ふ、人或は成親、俊寛の祟る所と謂ふ。衆僧をして禳はしむ。法皇乃爲に經を誦む。卒に分身して皇子を生む。清盛喜極りて哭き、金綿を獻じて之を謝す。法皇懌ばず、其謝書を拋ちて曰く、「朕を驗者とし視るか」と。三年、立ちて皇太子と爲る。清盛、驕恣益甚し。重盛日夜憂惧す。一夕清盛誅せらるゝ夢む。覺めて泣く。會維盛至る。之に酒を飲ましめ、好に刀を以てす。因りて、維盛意へらく。是小烏と。小烏は、平家傳家の寶刀なり。受けて之を視るに。乃無文刀にして、葬る時佩る所のものなり。乃色を變ず。重盛曰く、「尤むる勿れ、公をして終を令くせしめば、吾將に佩びんとす。今之を汝に賜ふ。汝後當に之を知るべし」と。五月、重盛、熊野の祠に造りて死を祈り、歸りて、瘍疾を獲たり。適醫の宋より至るあり。清盛治せしめんと欲す。重盛辭するに、國體を失ふを以てす。且曰く、「兒の疾を獲るは、命なり」と。遂に治せしめず。法皇其疾を臨み視る。三月にして遂に薨ず、年四十二なり。法皇、攝政基房と議して、其封戶を收む。會中納言闕けたり。清盛の婿藤原基通任に當る。而るに基房の子師家之に任せらる。甫めて八歲なり。是時、清盛、福原に在り。十一月、地大に震ふ。京師相驚きて曰く、「太政入道來らん」と。已にして清盛、數千騎を以て京師に入る。基房入りて泣きて法皇に訴へて曰く、「清盛來り怨を臣に修めんと欲すと聞く。果して竄流せられん。復左右に奉ずること能はざらん」と。法皇曰く、「朕と雖も亦自ら保んずる能はざるなり」と。明日、法印靜憲をして、往きて清盛を諭さしめ、且其意を問はしむ。清盛見ず。昏に及ぶまで答ふる所なし。靜憲去らんと請ふ。清盛、子の知盛をして出でて答へしめて曰く、「臣毫たり。復た君に事ふる能はず。此の如き耳」と。靜憲趨り出で、颯言して曰く、「賢相の明德なる、天に跼まり地に蹐す」と。清盛之を聞き

（清盛順文と重盛肖像）

於赤數蓮華之教諸中尊赤晩先利物於舊栖素梓之卿餘至善根引導法界今日之願自趣如斯乃至福業所單四苑不限教日

長寛二年九月

日本法華經傳記卷第四清盛公

清盛逝去

て、召し返へして之に面して曰く、「子は鹿谷の幸を諫め止むる者と聞く。吾れ是を以て子を見るなり。抑我が家、何ぞ官家に負く所あらんや。重盛新に死すれども、遊幸自如たり。獨老夫を憫まざるか。重盛危を見て命を授くること數、なり。官家之に越前を賜ひて曰く、『汝の子孫に傳ふ』と。而るに死すれば即覩はる。死者何の罪かある。且吾基通の爲に、中納言を請ふこと再三せり。而るに師家に超拜せしむるは何ぞや。凡そ淨海の如き者は、即過惡有りとも、當に宥七世に及ぶべし。今臣の餘命幾ばくもなきに、動もすれば誅せられんとす。身後の事知る可きなり」と。言畢り涙を垂る。靜憲も亦泣く。少焉ありて說くに大義を以てし、且之を慰籍す。清盛意頗る解け、禮して之を遣る。既にして帝に奏して、基房を貶し、代ふるに基通を以てし、師家以下四十三人の官爵を削り、前太政大臣藤原師長を流し、宗盛をして、衆を率ゐて法皇に造らしむ。法皇問ひて曰く、「將に遠地に流んとするか」と。宗盛曰く、「敢て然るに非ざるなり。且く鳥羽殿に幸して以て事の定まるを待ち玉へ」と。遂に之を鳥羽に移す。靜憲請ひて從ふ。清盛乃人をして帝に白さしめて曰く、「今後諸政は陛下之を親し玉へよ」と。即日福原に還る。

法皇を鳥羽殿に移す

治承四年
安德天皇即位
【三宮】大皇太后宮、皇太后宮、皇后宮
【上皇】高倉

【以仁王】後白河帝の第二子高倉宮と號す

以仁王平家を滅さんとす

頼政

四年二月、帝、位を皇太子に禪る。世其清盛の意に出づと稱す。清盛の夫人時子既に二位を拜し、髮を削り、二位尼と稱す。是に於て夫妻並に三宮に准ぜらる。三月、上皇嚴島に幸して、清盛の意を解かんことを希はんとす。發するに臨みて、法皇に覲ゆ。法皇の鳥羽に徙さるゝや、中外の人、皆宗盛の其亡兄に若かざることを咎む。宗盛數清盛を諫めて、乃法皇を八條烏丸に還し奉る。

五月、熊野の別當變を上る。以仁王令を下し、東國の源氏を擧げて、平氏を滅し帝を廢して自ら立たんと欲す。曰く、「事成らば重賞あらん」と。那智、新宮の僧徒も、亦之に應ずと。清盛大に驚き、兵を率ゐて京師に入り、公卿と共に議す。檢非遠使源兼綱等を遣し、官兵を以て、高倉宮を圍しむ。將に王を土佐に徙さんとするなり。兼綱の父頼政、王の謀主たり。平氏未だ之を知らず。頼政急に王をして、先づ奔り園城寺の僧徒に倚らしめ、而して自子弟を率ゐて之に從ふ。清盛之を聞き、怒りて曰く、「吾、嘗て頼政を奏して、三位を授け、昇殿を聽さしむ。何ぞ我れに負くや」と。清盛の將藤原忠清、策を獻じて曰く、「叡山、南都の僧兵皆王に應ずと聞く、我れ前後に敵を防ぎ、曠日彌久、諸國の源氏來り會せば、勝敗未だ知る可からざるなり。宜しく速に院宣を山徒に下し、因りて召すに利を以

宇治戰

てすべし」と。清盛之に從ふ。山徒乃王に倍く。王、南都に奔る。清盛、子の重衡等を遣し、二萬騎を將ゐて、宇治河に追擊す。王、平等院に入り、橋を斷ちて軍す。僧徒善く鬪ふ。我が將平盛清、兵を分ちて、河内より進み、敵の前路を遮らんと請ふ。下野の人足利忠綱、進みて曰く、「我が家嘗て秩父氏と、利根河を夾み相挑む。未だ嘗て流を亂りて戰ひを決せずんばあらず。今日の利、速に戰ふにあり、何ぞ猶豫を爲ん」と。乃手下三百騎を以て先づ渡る。令を下して曰く、「駿者を上にし、駑者を下にし、淺に操りて、深に縱ち、其歩卒は迭に相提挈し、

足利忠綱（宇治平等院之景）

或は溺るゝ者は、梢を授けて之を援けよ」と。令畢りて濟る。一人をも亡はず。忠綱呼びて曰く、「我は藤原秀郷六世の孫なり。盍ぞ來りて死を決せざる」と。兼綱笑ひて曰く、「汝名族を以て、乃平氏に驅役せらるゝや」と。對へて曰く、「平氏詔を奉じて亂賊を討つ。安ぞ從はざるを得んや」と。乃大に戰ふ。終に兼綱を射殺す。我が軍悉く渡り、擊ちて大に源氏の兵を破る。頼政及び子の仲綱等皆死す。王、南に出でゝ走り、流矢に中りて薨ず。南都の僧兵木津川に至り、之を聞きて引去る。重衡等凱旋し、首を闕下に獻ず。清盛、忠綱を賞す。

平家物語（橋合戰の事）

さる程に、宮は宇治と寺との間にて、六度まで御落馬ありけり。是は去ぬる夜御寢ならざりし故なりとて、宇治橋三間引き離し、平等院に入れ奉り、暫く御休息ありけり。六波羅には、すはや宮こそ南都へ落ちさせ給ふなれ。追ひ懸けて討ち奉れやとて、大將軍には左兵衛の督知盛、頭中將重衡、薩摩の守忠度、侍大將には、上總の守忠清、其子上總の太郎判官景隆、高橋判官長綱、河内の判官秀國、武藏の三郎左衛門有國、越中の次郎兵衛盛嬢、上總の五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清を先として、都合其勢二萬八千餘騎、木幡山打ち越えて、宇治橋の爪にぞ押し寄せたる。敵平等院にと見てければ、関を作る事三箇度なり。宮の御方にも、同じく関の聲をぞ合せたる。先陣が橋を引きたるぞ、過すな、橋を引きたるぞ、誣すなとぞ、どよみけれど

も、後陣は是を聞きつけず、我先に〳〵と進む程に、先陣二百餘騎押し落されて水に溺れて失せにけり。さる程に、橋の兩方の爪に、打ち立ちて矢合せず。宮の御方より大矢野俊長、五智院の但馬、渡邊の省、授、綱の源太が射ける矢ぞ、楯もたまらず、鎧もかけず透りけり。源三位入道頼政は、今日を最後とや思はれけん、長絹の鎧直垂に科皮威の鎧きて、わざと甲をば着給はず、嫡子伊豆の守仲綱は、赤地の錦の直垂に黒糸威の鎧なり。弓を強く引かんがために、是も甲をば着ざりけり。爰に五智院の但馬、大長刀の鞘をはづして、只一人橋の上にぞ進みたる。平家の方には是を見て、唯射とれや、射取れとてさしつめ引きつめ、散々に射けれども、但馬少しも騒がず。あがる矢をば突きくゞり、下る矢をば躍り越え、向ひて來るをば長刀にて切りて落す。敵も味方も見物す。それよりしてこそ、矢切の但馬とはいはれけれ。又堂衆の中に、筒井の淨妙明秀は、褐の直垂に黒革威の鎧きて、五枚甲の緒をしめ、黒漆の太刀を佩き、二十四さしたる黒母衣の矢負ひ、塗籠藤の弓に、好む白柄の大長刀取り添へて、是も唯一人橋の上にぞ進みたる。大音聲あげて、遠からんものは音にも聞け、近からん人は目にも見給へ。三井寺にはかくれなし。堂衆の中に筒井淨妙明秀とて、一人當千の兵ぞや、我と思はん人々は、寄りあへや、見參せんとて、二十四さしたる矢を、指しつめ引きつめ散々に射る。矢庭に敵十二人射殺し、十一人に手負うせたれば、簗に一つぞ殘りたる。其後弓をばからと投げ捨てゝ、簗も解きて捨てゝけり。貫き脱ぎて跳になり、橋の行桁をさら〳〵と走りける。人は恐れて渡られども、淨妙房が心地には、一條二條の大路とこそ振舞ひたれ長刀にて向ふ敵五人薙ぎ伏せ、六人當るかたきに逢ひて、長刀中より打ち折れて捨てゝけり。其後太刀を抜きて戦ふに、敵は大勢なり、蜘蛛手かくなは十文字、蜻蛉がへり、水車、八方すかさず切りたりけり。向ふかたき八人切り伏せ九人にあたる敵が、甲の鉢に餘に強く打ち當て、目貫のもとより丁と折れ、ぐつと抜けて、川へざつふと入りにけり。頼む所は腰刀、死なんとのみぞ狂ひける。こゝに東圓坊の阿闍梨慶秀が、召し使ひける、一來法師といふ大力の剛の者、淨妙房が後に續きて戦ひけるが、行桁はせばし、側通るべきやうはなし。淨妙坊が甲のしころに手を置きて、悪しく候ふ淨妙房とて、肩をづんと跳り越えてぞ戦ひける。一來法師討死してけり。淨妙房は進ふ〳〵返りて、平等院の門の前なる芝の上に、物具脱ぎ棄て、鎧に立ちたる矢目を數へたれば、六十三うちかく矢五所、されども痛手ならねば、處々に炙治し、頭はからげ、淨衣着弓切りをり杖につき、平足駄穿き、阿彌陀佛申して、奈良の方へぞ翻りける。其後は淨妙房が渡りたるを手本として、三井寺の大衆、三位入道の一類、渡邊の黨我先にと走り續き〳〵、橋の行桁をこそ渡りけれ。或は分取して歸る者もあり、或は痛手負ひて腹かき切り、川へ飛び入るものもあり。橋の上の戦、火出づる程にぞ見えたりける。平家の方の侍大將上總の守忠清、大將軍の御前にまゐり、あれ御覽候へ、橋の上の戦手痛く候ふ。今は川を渡すべきにて候ふが、折節五月雨の比水まさりて候へば、渡さば馬人多く亡び候ひなん。淀、一口へや向ふべき、又河内路へや廻るべき、如何せんと申しければ、下野の國の住人足利又太郎忠綱、生年十七歳にてありけるが、進み出でゝ申しけるは、淀一口河内路へは、天笠震旦の武士を召して、向はれ候はんずるか、それも我等こそ承りて向ひ候はんずれ。目に懸けたる敵を討たずして、宮を南都へ入れ參らせ

なば、吉野十津川の勢ども馳せ集りて、愈御大事にてこそ候はんずらめ。武藏と上總との境に、利根川と申す大河候ふ。秩父足利中違ひて、常に合戰を仕り候ひしに、大手は長井の渡、搦手はこがすきの渡より寄せ候ひしに、爰に上野の國の住人、新田入道、足利に語らはれて、杉の渡より寄せんとて、設けたりける船どもを、秩父が方より、皆破られて申しけるは、只今こゝを渡さずば、長き弓筈の疵なるべし。水に溺れても死なば死れ、いざ渡さんとて、馬筏を作りて渡せばこそわたしげめ。坂東武者のならひ、敵を目にかけ、川を隔てたる軍に、淵瀬嫌ふやうやある。此河の深さ早さ、利根川に幾程の劣勝はよもあらじ。續けや殿原とて、眞先にこそ打ち入れたれ。續く人々、大胡、大室、深須、山上、那波の太郎、讃岐の廣綱、四郎大夫、小野寺の禪師太郎、邊屋子の四郎、郎等には、宇夫方の次郎、桐生の六郎、田中の宗田をはじめとして、三百餘騎ぞ續きける。足利大音聲をあげて、弱き馬をば下手に立てよ。強き馬をば上手になせ。馬の足の及ばんほどは、手綱をくれて歩ませよ。はづまばかきくりて泳がせよ下らん者をば弓の弭に取り附かせよ。手に手を取り組み、肩を並べてわたすべし。馬の頭沈まば引き上げよ。いたく引きて引きかづくな。鞍壺によく乘り定めて、鐙を強く蹈め。水しさまば、三頭の上に乘りかゝれ。川中にて弓引くな敵射るともあひ引きすな。常にしころを傾けよ。いたく傾けて手反射さすな。馬にはよわく、水には強く當るべし。かれに渡して推しおさるな。水にしなうて渡せやわたせと、おきてゝ、三百餘騎、一騎もながさず、向の岸へさつとぞ打ちあげたる。

平家物語（宮の御最後の事）

足利が其日の裝束には、朽葉の綾の直垂に、赤革縅の鎧着て、高角打ちたる甲の緒をしめ、金作の太刀を佩き、二十四さしたる切符の矢負ひ、滋藤の弓持ちて、連錢葦毛なる馬に、柏木にみゝづく打ちたる、金覆輪の鞍置きてぞ乘りたりける。鎧蹈み張り立ち上り、大音聲をあげて、昔朝敵將門を亡して、勳賞蒙りて、名を後代にあげたりし、俵藤太秀郷に、十代の後胤、下野の國の住人、足利の太郎俊綱が子、又太郎忠綱、生年十七歳に弼りなる。斯樣に無官無位なる者の、宮に向ひ參らせて、弓を引き矢を放つことは、天の恐少からず候へども、但し弓も矢も冥加のほども、平家の御上にこそ止り候はめ。三位入道殿の御方に。我と思はん人人は、寄りあへや、見參せんとて、平等院の門の内へ、責め入り〳〵戰ひけり。大將軍左兵衛の督知盛、是を見給ひて、渡せやわたせと下知し給へば、二萬八千餘騎、皆打ち入れてわたす。さばかり早き宇治川も馬や人にせかれて、水は上にぞたゝへたる。雜人原は、馬の下手に取りつき取りつき渡るほどに、膝より上をぬらさぬ者も多かりけり。おのづから外るゝ水には、何もたまらず流れたり。爰に伊賀伊勢兩國の官兵等、馬筏押し破られて六百餘騎こそ流れたれ。萠黃、緋縅、赤縅色々の鎧の浮きぬ沈みぬゆられけるは神無備山のもみぢ葉の、嵐の風にさそはれて、龍田川の秋の暮、井關にかゝりて流もあへぬに異ならず。その中に、緋縅の鎧着たる武者三人、網代に流れかゝりて、浮きぬ沈みぬゆられけるを、伊豆の守見給ひて、かくぞ詠じ給ひける

伊勢武者は皆火おどしの鎧きて宇治の網代にかゝりぬるかな

是等は皆伊勢の國の住人なり。黑田後平四郎、日野十郎、乙部の彌七といふ者なり。中にも日野十郎は、古兵にてありければ、弓の弭、岩のはざまにねぢ立

ちて、掻き上り、二人の者どもをも引き上げて、助けゝるとぞ聞えし。大勢皆渡りて、平等院の門のうちへ責め入り攻め入り戦ひけり。このまぎれに、宮をば南都へ先立たせ参らせ、三位入道の一類渡辺党、三井寺の大衆殘り止りて防矢射けり。源三位入道は、七十に餘りて軍して、弓手の膝口を射させ、痛手なれば、心醉に自害せんとて、平等院の門の内へ引き退く處に、敵駆ひかゝれば次男源大夫の判官兼綱は、紺地の錦の直垂に、唐綾縅の鎧きて、白月毛なる馬に金覆輪の鞍置きて、乘り給ひたりけるが、父を延さんがために、返し合せ返し合せ防ぎ戦ふ。上總の太郎判官が射ける矢に、源大夫判官、内甲を射させてひるむ處に、上總の守が實、次郎丸といふ大力の剛の者、萠黄匂の鎧着、三枚甲の緒をしめ、打物の鞘をはづして、源大夫判官に押し並べて、むずと組みてどうと落つ。源大夫判官は、大力にておはしければ、次郎丸を取りておさへて首をかき立ち上らんとする所に、平家の兵ども、十四五騎落ち重りて、終に兼綱を討ちてけり。伊豆の守仲綱も散々に戦ひ、痛手數多負ひて、平等院の釣殿にて自害してけり。其頸をば、下河邊の藤三郎清親取りて、大床の下へぞ投げ入れたる。六條藏人仲家、その子藏人太郎仲光も、散々に戦ひ、一所に討死してけり。此仲家と申すは、故帶刀先生義方が嫡子なり。然るを父討たれて後、孤にてありしを、三位入道養子にして、不便にし給ひしかば、日比の契約を遂へじとや、一所にて死にけるこそむざんなれ。三位入道、渡辺長七唱を召して我頸を打てと宣へば、主の生頸打たんずることの悲しさに、仕るとも存じ候はず、御自害候はゞ、其後こそ賜り候はめと申しければ、實にもとや思はれけん西に向ひ手を合せ、高聲に十念唱へ給ひて、最後の詞ぞあはれなる。

埋木の花咲くこともなかりしに身のなるはてぞかなしかりける

是を最後の詞にて、太刀の先を腹に突き立て、俯様に貫かれてぞ失せられける。その時に歌詠むべくはなかりしかども、若くよりあながちに好いたる道なれば最後の時も忘れ給はず。その頸をば長七唱が取りて、石に括り合せ、宇治川の深き所に沈めてけり。平家の侍ども、如何にもして、競漕口をば生捕にせばやと窺ひけれども、競も先に心得て、散々に戦ひ、痛手數多負ひ、腹掻き切りて死にゝける。園滿院大輔源覺は、今は宮も遥に延びさせ給ひぬらんとや思ひけん、大太刀大長刀左右に持ちて、敵の中を破りて出で、宇治川へ飛びて入り、物具一も捨てず、水の底を潜りて、向の岸にぞ着きにける。高所に走り上り、大音聲をあげて、如何に平家の君達、是までは御大事かようといひ捨てゝ、三井寺へこそ歸りけれ。飛騨の守景家は、古兵にてありければ、このまぎれに、宮は定めて南都へや落ちさせ給ふらんとて、混甲四五百騎、鞭鎧を合せて追ひ懸け奉る。案の如く、宮は三十騎ばかりにて落ちさせ給ふ所を、光明山の鳥居の前にて追ひ附き奉り、雨の降る様に射奉れば、何れが矢とは知られども矢一つ來りて、宮の左の御側腹に立ちければ、御馬より落ちさせ給ひて、御頸取られさせ給ひけり。御伴申したる丸佐渡、荒土佐、荒大夫、刑部俊秀も、命をば何のためにか惜むべきとて、散々に戦ひ、一所にて討死してけり。其中に乳母子の六條の助大夫宗信は、新野が池へ飛びて入り、浮草顔に取り散ひふるひ居たれば、敵は前をぞ打ち通りぬ。やゝありて、敵四五百騎、さゝめきて歸りける中に、淨衣着たる死人の頸もなきか、蒲の本より掻き出でたるを見れば、宮にてぞおはしましける。我死なば御棺に入れよ、と仰せられし。小枝と聞え

し御笛なも、未御腰にぞさゝせまし〳〵けり。走り出でゝ、取り附き奉らばやさは思へども、怖しければ、それも叶はず。敵皆通りて後池より上り、濡れたる物どもしぼり、さて泣く〳〵都へ上りたりけるを、惡まぬ者こそなかりけれ。

福原に遷都

さるほどに、南都の大衆七千餘人、甲の緒をしめ、宮の御迎に參りけるが、先陣は木津に進み、後陣は未興福寺の南大門にぞゆらへたる。宮ははや光明山の鳥居の前にて、討たれさせ給ひぬと聞えしかば、大衆力及ばず、涙を押へて止りぬ。今五十町ばかり待ちつけさせ給はで、討たれさせ給ひけるこそうたてけれ。

清盛、常に福原を愛し、又島を其南に築きて、以て漕運に便し。終に都を遷さんと欲す。六月遂に意を決して、帝、三宮、百官を趣して徙らしめ、帝を頼盛の第に奉じ、遂に之を已が第に徙し、兵をして法皇を守らしめ、宮城を建つるを議す。地狹くして建つ可からず。乃權に造る。物議囂然たり。

頼朝兵を擧ぐ

八月、源頼朝、以仁王の令を奉じて、兵を伊豆に擧ぐ。相摸の人大庭景親擊ちて之を走らす。武藏の人畠山重忠、又擊ちて其黨三浦氏を破る。景親急騎にて捷を報ず。且曰く、「頼朝走り死す」と。已にして東人交々來りて、「頼朝未だ死せず、兵復振ふ」と告ぐ。清盛大に怒りて曰く、「其國の奴輩は、皆彼が父祖の家人。而るに我れ彼れを東國に流す。是れ彼をして、胥けて我家を滅さしむるなり。何ぞ盜に餘を借し、に異ならんや」と。切齒する之を久くして曰く、「向に吾をして池尼の請ひを聽さゞらしめば、彼れ惡んぞ首領を保つを得んや。恩を忘れ利を規りて、敢て我が子孫に敵す。其れ能く神明の罰を免れんや」と。重忠の父重能、弟有重と、福原にあり。進みて曰く、「東人獨、北條時政、頼朝と婚す。其れ或は之に附かん。其他豈肯て流人に黨せんや。君、意と爲すなかれ」と。平氏の子弟、人々奮ひて東伐を願ふ。

【時政頼朝と婚す】時政、女政子を以て頼朝に娶はす

清盛宮に入て頼朝追討の勅を請ふ

清盛輩して入り、上皇に見えて曰く、「陛下妙齡蓋し未だ知るに及ばざるのみ。往時に爲義、義朝と云ひし者あり、敢て凶逆を行ひて、法皇に敵せんと欲せしを。臣謀略を以て之を誅夷せり。而して義朝の少子に頼朝と云ふ者あり。此の豎子を伊吹岳の麓に獲たり。當に斬らんとするとき、臣の繼母爲に之を宥さんことを請ふ。臣、即召して之を見る。十三歲といふ。短身涅齒。問ふこと有れば輙知らずと答へぬ。臣其幼稚を憫み、且自謂ふ、源氏と宿怨あるにあらず。特君命を以てせしのみと。遂に之を宥しき。今其配所に在りて、敢て不良を謀ると聞く。臣悔い恨むに堪へず。請ふ宣旨を得て之を討たん」と。上皇曰く、「法皇に稟へ」と。答へて曰く、「主上は幼し、陛下は親父なり。決、聖斷に在り。何ぞ直に法皇に稟ふ

【上皇】高倉
【法皇】後白河

ことを爲ん。陛下、乃、源氏を庇ふこと莫からんや」と。上皇咽ひて曰く、「猶此言を爲すか」と。即宣旨を賜ふ。因りて「大將を誰に屬すべし」と問ふ。曰く、「臣が嫡孫維盛可なり」と。

維盛追討使

即ち維盛に命ず。右近衛中將を以て、追討使と爲し、而して忠度之を翼く。高祖正盛、源義親を伐ちし故事を用ゐて、驛鈴を賜ふ。五千騎に將として、福原を發す。齋藤實盛、東事を諳するを以て嚮導とし、行々兵を收めて、駿河に至る。實盛曰く、「宜しく急に足柄を踰え武藏、相摸の兵を收むべし」と。藤原忠清曰く、「今我が兵は皆京畿の新募なり、此を以て深く入る、未だ其可を見ず」と。維盛之に從ふ。實盛乃辭して西す。維盛曰く、「實盛無きも、吾寧ぞ戰ふ能はざらんや」と。忠清を以て先鋒となし、進みて、富士河に軍す。此時に當りて、畠山重忠以下、皆頼朝に附き、二十萬騎を以て、河東に至る。使者をして來りて書を貽らしむ。護言多し。忠清、維盛に勸めて、其使者を斬らしむ。相持して未だ戰はず。我が軍夜水禽の起を聞き、相驚きて以て敵大に至るとなし、人馬相踏藉して走る。維盛怒りて留り戰はんと欲す。忠清固く諫む。乃西に歸る。平明、源氏の軍乃之を知り、一將をして來り追はしむ。伊藤某、殿戰して死す。維盛歸りて近江に至る。清盛其

富士河陣

京師に入るを許さずして曰く、「汝王命を奉じて亂賊を討ち、兵を交へずして歸る。何の面目ありて來りて我を見んとするか。軍即し利あらざれば、盍ぞ尸を原野に横たへざる」と。因りて維盛を流し、忠清を刎ねんと欲す。衆之を救解して止む。是より先き、源義仲兵を信濃に起す。義仲幼にして孤なり。齋藤實盛取りて之を育ふ。已にして之を木曾の人中原兼遠に屬す。是に於て宗盛、兼遠を召し、命じて亟に義仲を縛して來り獻せしむ。兼遠誓書を効して、還りて義仲を逐ふ。

源義仲兵を起す

是月、上皇再び嚴島に幸す。清盛從ふ。因りて上皇を要して書を作らしめ、源氏を右けざるを誓ふ。既に還り、宮を夢野に造りて、以て法皇を奉ず。清盛都を遷してより、上下之を苦しむ、山徒も亦歎、舊都に復せんことを請ふ。清盛、諸公卿を會して、兩都孰か便なるを問ふ。公卿皆其旨を希ひて曰く、「福原便なり」と。獨左大辨藤原長方曰く、「平安便なり」と。清盛色を作して入る。衆長方の爲に之を危ぶむ。已にして、清盛即三宮以下を奉じて、都を平安に復す。衆大に悅ぶ。時に十一月なり。或人長方に問ひて曰く、「子何を以て能く相國に忤ふか」と。答へて曰く、「悔ゆる心無からしめば、何ぞ人に問はんや。我因りて之を導きしのみ」と。清盛素より長方を重んず。是より先き、長方議を朝に建てゝ曰く、「亂人志を

【夢野】摂津

藤原長方都を平安に復す

得るは、是れ天意と人心との致す所なり。宜しく政を法皇に復し、甚房、師長等を召し還すべし。過を改め善に遷らば、庶幾くは免れん」と。清盛稍く其言に從ふ。

怪異

平氏の家、怪多し。清盛嘗て獨坐す。階下に數百の人頭あり。合して一大頭と爲り、眼を瞋して清盛を視るを見る。清盛も亦眼を瞋らして之を視る。人頭漸く縮小して滅す。占者曰く、「爲義、義朝等の鬼なり」と。又鼠あり、廐馬の尾に巣ふ。占者曰く、「小、大を侵し、子、午を犯す。源、平に迫るの兆なり」と。

近江源氏

都を復するの月、近江源氏の兵起る、翌月、知盛、資盛等を遣し、兵を將ゐ擊ちて之を夷ぐ。初め園城寺、賴政に黨して重譴を得。益平氏を怨む。是に至りて、山徒と皆近江源氏に應ず。乃清房を遣し、園城寺を攻め、燒て之を夷げ、僧八百人を殺す。又南都の叛くを聞き、妹尾兼康を遣し赴き攻めしむ。僧徒逆へ擊ちて之を敗る。又木丸を造り呼びて、淨海の頭と爲して、之を蹴擊す。清盛積怒す。是月、重衡を遣し、兵數千騎を率ゐて之を擊ち、東大、興福の二寺を燒き、僧數百人を殺す、而して諸道の源氏益興る。

南都征伐

養和元年

高倉上皇崩

養和元年正月、上皇病みて崩ず。清盛益悔悟し、政を法皇に復す。法皇聽さず。

固く請ふ。聽す。乃美濃、譜岐を獻じて其邑となす。詔して宗盛を以て近畿を總管せしむ。二月、河内の人源義基を斬る。源行家兵を擧げて美濃に至るを聞き、知盛通盛、清經、忠度等を遣して、之を伐たしむ。敵、板倉の壘に據る。我が兵遶りて其後に出で、火を縱ち攻めて之を拔き、行家を走らす。清盛又南海の兵をして東兵を控扼せしめ、而して糧を北陸、西海に徵す。西海の菊池氏、緒方氏、皆源氏に應ず。肥後守平貞能、往きて之を定めんと請ふ。法皇院廳官をして貞能に從はしむ。已にして知盛、洲股に在りて病作り、戍を置きて還る。源氏益振ふ。宗盛乃親ら大軍を將ゐて東伐せんと欲す。法皇之を許す。命じて諸武官を統べ、官符を以て兵を徵し、日を刻して發せしむ。

【板倉】美濃

洲股の戰

平清盛肖像

清盛遺言

衆曰く、「此の行必ず源氏を夷げん」と。二十七日を以て行を發す。發するに先つ一日に、清盛疾作る。宗盛行を止む。車馬六波羅に集まる。清盛煩熱を病み、冷水に浴す。水輒沸く。叫號する聲門外に徹す。閏二月、疾大に篤し。族を擧げて枕を擁し、言はんと欲する所を問ふ。清盛大息して曰く、「生者必ず死す。何ぞ獨我のみならん。我平治年間より、功を王室に建て、天下を專制し、位人臣を極め、

清盛薨ず

帝者の外祖と爲る。復何ぞ遺憾とする所あらん。遺憾とする所のものは、未だ頼朝の頭を睹ずして死するのみ。吾死して後、佛に供するを以て爲る勿れ。誦經を以て爲る勿れ。特頼朝の頭を斬りて、我が墓所に懸けよ。我が子孫臣隷、咸我が言に服して、敢て怠りあること勿れ」と。病むこと七日にして薨ず。歳六十四。法皇に遺表す。事必ず宗盛と議し玉へと。

（平清盛墳墓圖）

清盛既に薨じぬ、宗盛。法皇を法住寺殿に奉遊し、奏して曰く、「臣不肖、父の過を救ふ能はず。以て今に至る。今後將に唯聖旨を是れ仰がん」と。法皇乃公卿を會し、兵食を調せんことを議す。重衡、維盛、通盛、忠度等を遣し、美濃に入り、其戍兵を併せ、源行家、源義圓と水を夾みて戰ひ、義圓を斬り、行家を破り、行家の子行頼を虜し、行家を追ひて、參河に至りて還る。

頼盛

頼朝上書

藤原秀衡

城資長

北陸敗軍

【敦賀城】越前

壽永元年

頼朝、數書を頼盛に遣し、其舊恩を謝す。又間に上書して曰く、「臣敢て亂を爲すに非ず。乃亂を靖ずるのみ。陛下、尚平氏を棄てざれば、則請ふ兩ながら和を講じ、二姓並び仕ふること往昔の事の如くせん、其忠其否、簡ぶこと陛下に在り」と。法皇書を以て宗盛に示す。宗盛答へて曰く、「臣が父終に臨みて、臣等に命じて曰く、『必ず頼朝と死を決せよ』と。語、猶耳に在り。臣和する能はず」と。是に於て請ひて陸奥の藤原秀衡に勅して、頼朝を擊たしめ、越後城資長に勅して、義仲を擊たしむ。資長は、平維茂七世の孫なり。六月、資長弟長茂と、兵を收めて南して、義仲を擊つ。利あらずして還る。八月、資長を越後守に秀衡を陸奥守に叙し、趣して源氏を伐たしむ。資長復發す。疾作りて卒す。九月、宗盛從弟の通盛、經正を遣し、東、源氏と越前に戰ひて敗績す。經正走りて若狹に入る。通盛退きて敦賀城を保ち、經正を召す。未だ至らざるに、義仲の兵來り攻む。乃兵を解きて西に還る。

壽永元年九月、城長茂復南し、義仲を伐つ。復利あらずして還る。是月、宗盛內大臣に任じ、隨身兵仗を賜ふ。騶從を具へて拜賀す。二年二月、從一位に叙せらる。

追討使發遣

齋藤實盛

四月、維盛、通盛、忠度等を以て追討使となす。山陽、山陰、西海の諸國、及び參河以東、若狹以南の徵兵十萬餘人を率ゐ、北陸道に入りて、將に義仲を夷げて、然る後頼朝に及ぼさんとす。齋藤實盛遣中にあり。大庭景尙に謂て曰く、「平替り、源興る。盡ぞ木曾に降らざる」と。景尙曰く、「東人吾輩の姓名を知らざるなし。興衰を以て節を變ぜば、人言を若何せん」と。實盛曰く、「吾、徒に以て子を試みしのみ」と。入りて宗盛に見えて曰く、「越前は臣の鄕なり。古に曰く、『錦を衣て鄕に歸る』と。臣、君恩を受くる久し。今老たり。唯一死以て君に報ずるあるのみ。君、盡ぞ錦の直垂を賜はらざる。臣衣て以て歸らば、死すとも餘榮あらん」と。宗盛、之を憫み、其言の如くす。

燧城戰

【燧城】越前

【齋明】越前平泉寺の僧

義仲、我軍の越前に向ふと聞き、將を遣して燧城を守らしむ。城は山に據り、谿を帶び、最も要地たり。我が軍、谿水を阻て、近づく能はず。城將齋明と云ふ者あり。書を爲り、之を矢に約し、以て我が軍に射て曰く、「源氏隄を築きて水を貯ふ。君、東山の跡を決せば、たち所に涸れん。臣、內應を爲さん」と。我が軍之に從ひ、立所に其城を拔き、連戰皆捷つ。追ひて三條野に至る。敵將齋藤光平出でて戰ふ。實盛曰く、「我と同姓なり、寧ろ我に死せよ」と。與に鬪ひて之を斬る。

砥並山戰

【砥並山】越中

【志雄山】能登

【佐良岳】加賀

我が軍長驅して、越前を定め、進みて加賀に入る。源氏の兵退き、安宅渡に據る。平盛俊、子盛綱をして水を試しむ。還り報じて曰く、「亂るべし」と。盛俊兵五千を以て先づ渡る。大軍之に從ふ。遂に林、富樫の二城を拔きて之に據る。降將齋明、進言して曰く、「義仲越後にあり。越後、越中の界、寒原の險あり。君宜しく急に此を扼すべし。敵をして踰えしむる勿れ」と。乃盛俊を遣して之に赴かしむ。般若野に到る。敵已に寒原を踰ゆ、盛俊與に戰ふ。利あらずして退く。維盛乃七萬騎を以て砥並山に軍す。忠度三萬騎を以て志雄山に軍す。義仲五萬騎を以て至り、行家をして忠度を攻めしめ、而して自ら維盛に當る。維盛險を恃みて備へず。義仲夜に乘じて來り襲ふ。維盛大に敗走す。義仲勝ちに乘じて之を追ふ。參河守知度は清盛の七子なり。五十餘騎と大に呼びて敵陣を冒し、馬仆れて徒す。敵岡田親義あり。來りて知度を擊つ。知度刀を擧げて其冑を斫る。冑墜つ。因りて其首を斬る。親義の子重義、踵で至る。我が騎遮り鬪ふ。知度自屠りて死す。敵益進む。右兵衛佐爲盛は頼盛の次子なり。亦樋口兼光に殺さる。維盛退きて佐良岳を保つ。

此時に當りて、忠度、盛俊と擊ちて行家を破る。而して維盛の敗れしを聞き、兵を

篠原戰

引きて之と合し、退きて安宅の渡に據る。忽、鞍馬十匹あり、水を濟りて至る。畠山重能、前軍にあり。之を視て曰く、「敵近づく」と。乃、三百騎と篠原岳に登りて之を瞰、使を中軍に馳せ、告げて曰く、「源氏の兵悉く濟りぬ、臣將に先づ進まんとす。謂ふ、後繼を賜はれ」と。

義仲、樋口兼光を召し、岳頂を指さし、問ひて曰く、「汝彼一隊將は誰爲るを知るか」と。曰く、「畠山重能なり。臣數武藏に遊びて、其旗章を記す」と。義仲曰く「此れ與に鬪ふべき者」と。兼光を遣し、與に鬪はしむ。殺傷相當る。維盛等、乃、進みて義仲に當り、戰ひ且退き、成合に至り、返り擊ちて大に戰ふ。大庭景尙、自呼びて鬪ふ。義仲曰く、「名士なり」と。騎を麾きて之を迎ふ。景尙十三騎を斬り、創を被りて自殺す。衆悉く退く。實盛獨留り戰ふ。敵將手塚光盛呼びて其名を問ふ。實盛曰く、「汝我が首を斬り、木曾公に獻せよ。公は我を知るなり」と。進みて光盛に薄る。光盛の從騎之を遮る。實盛、騎を攫み將に之を殺さんとす。光盛之を救ふ。三人相搏ちて馬より墜つ。光盛遂に實盛を刺し、頭を義仲に獻じ、其狀を告げて曰く、「亘騎錦を衣る。其語は東音なり」と。義仲曰く、「乃、實盛なる莫きや」と。兼光を召してこれを視しむ。兼光曰く、「是也」と。義仲曰

實盛戰死

く、「吾れ實盛年高きを知る。今其髮の黑きものは何ぞや」と。對へて曰く、「實盛嘗て臣と東國に於て言ひて曰く、『白頭軍に從はゞ、吾將に我が髮を涅せんとす。否せざれば則以て壯者に伍し難し』と。蓋し、其言を踐めるなり」と。乃、其頭を洗ふに、頭髮皆白し。義仲泣きて曰く、「吾れ幼孤のとき、此老に鞠育せらる。其をして來り歸せしめば、將に父とし、之に事へんとせしに、乃、恩を重んじ死に就く。義と謂はざるべけんや」と。尸を收めて之を葬る。義仲、復我軍を追ふ。平盛綱、藤原景高等十餘人之に死し、我が諸將敗れ歸る。法皇曾議す。藤原長方漢の匈奴と和せし故事を引きて使を遣して、諸源の罪を赦さんことを請へども聽されず。平氏書を山徒に遺りて之を誘ふ。山徒從はず。

貞能西海を定む

七月、平貞能、既に西海を定む。降將菊池高直、原田種直以下、兵千騎、糧十萬石を以て至る。平氏咸喜ぶ。用ゐて東北を禦がんと欲す。美濃の人、來り告げて曰く、「義仲已に近江に至る」と。是に於て、資盛、知盛、重衡、貞能等と宇治、勢田を守る。又賴盛を遣し、之に繼ぐ。賴盛辭して往かず。强て之を遣る。已にして源行綱等、四方より京師を窺ふ。山徒も亦義仲に黨す。宗盛、乃諸將を召し還し、貞能を遣し、行綱を攝津に擊つ。知盛五百騎を以て粟津に次す。義仲の前軍

平氏都を去る

と戰ひ、利あらずして退く。

義仲、進みて叡山に軍す。宗盛大に族人を召し、議して曰く、「兵募し、我れ帝及び法皇を奉じて西國に奔り、以て再擧を圖らんと欲す。何如」と。知盛進みて曰く、「不可なり。我が祖の桓武、實に此都を肇め、後降りて武臣となる。今に於て八世なり、未だ嘗て退き避けず。寧ろ此に決戰せん。刀折れ、兵盡きて後已まん」と。敦盛、經盛等、皆以て然りと爲す。宗盛聽かず。人をして法皇に造らしむ。法皇在さず。宗盛大に收め、火を諸第に縱ち、其子右衛門督清宗、其弟中納言知盛、右中將重衡、淡路守清房、其義弟式部丞清定、丹波守清邦、其叔父參議經盛、中納言敦盛、薩摩守忠度、經盛の子皇后宮亮經正、苦狹守經俊、敦盛の子越前守通盛、能登守敦經、從五位下業盛、知盛の子武藏守知章、經俊の弟敦盛、清房の二弟經俊、良衡、故基盛の子左馬頭行盛等、及び攝政藤原基通、大納言平時忠を率ゐて西す。

頼盛
基通
【小松中將】維盛

權大納言頼盛、從ひて後れたり。鳥羽に及ぶ比、赤幟を撤て、東し、法皇に倚りて伏匿す。基通も亦還り走る。平盛嗣之を追はんと欲す。宗盛曰く、「之を舍け。吾れ此不義の人を用ゐる所なし」と。因りて問ひて曰く、「小松中將は何如」と。

畠山重能

曰く、「未だ來らず」と。宗盛曰く、「亦頼盛の比か」と。

乃、畠山重能兄弟を召して曰く、「汝の子弟、武藏にあり。汝盍ぞ東せざる」と。二人對へて曰く、「臣等、平氏の恩を蒙る、此に二十年、危を見て遁るゝは、爲ずに忍びず」と。宗盛曰く、「父子相慕ふは、貴賤となく一なり。父西にあり。子東に在りて、以て相殘滅するは、吾が心之を憫む、汝宜しく亟に去りて、頼朝に從ふべし」と。二人泣き辭して東す。

宗盛等關戸に至り、顧みて數百騎の至るを見る。則、維盛なり。其弟右中將資盛左中將清經、左小將有盛、侍從忠房、備中守師盛を率ゐて來る。衆大に喜ぶ。維盛曰く、「吾れ妻孥を遣して來る。皆啼哭して我を牽く。吾是を以て後れたり」と。宗盛曰く、「衆皆家を挈ぐ、子何ぞ獨否せざる」と。答へて曰く、「挈げて行くとも、終に庇ふ可けんや」と。相顧みて悽然たり。

經正

經正、幼きとき、仁和寺法親王に仕へ、其愛する所の琵琶を賜ふ。征行と雖も、未だ嘗て携へざることなし。是の日、齋し返して、王に謁して曰く、「臣等事已に此に至る。願くは一たび別を叙でて行くを得ん」と。因りて即席に數曲を彈ず。王及び左右皆涙垂る。經正曰く、「臣、嘗て此賜を守りて、以て子孫に傳へんと欲

す。今行きて且に死亡せんとす。寶器を併せて之を滅沒するに恐びず」と。乃、琵琶を奉還して去る。

忠度

忠度も亦淀河より還り、其和歌の師藤原俊成に詣り、夜門を叩きて刺を通じ、面謁を請ふ。俊成、微く門を啓きて之を見る。忠度曰く、「兵興りてより、君門に數するを得ず。今當に遠く別るべし。聞く『君敕を奉じて撰輯する所あらん』と。臣幸に一章を收むるを得ば、死すとも且不朽なり」と。乃、其歌集を鎧縫より出だす。俊成泣きて之を受く。

行盛

行盛、俊成の子定家を師とす、又其集を遺して留別す。

貞能

俊成、定家、後並びに撰集するに、二人の作る所を收むと云ふ。

是に於て族を擧げて、輿を奉じて西す。平貞能、攝津より還るに會ふ。馬を下りて、跪きて曰く、「諸公何に之かんと欲するや」と。宗盛故を告ぐ。貞能、大に其不可なるを諫むれども聽かず。貞能、獨東して京師に入る。則諸第、皆燼せり。乃、夜、重盛の墓に詣りて、白して曰く、「君豫め、今日あるを知るか。然れども願くは冥護を以て恢復を圖れ」と。且日墓を發き、其骨を收めて西し、追ひて福原に至る。宗盛等方に將士を會し、議して曰く、「我が家は惜むに足らざれども、帝王神器を何如せん」と。皆泣きて對へて曰く、「臣等世君恩を受く、隆替を以て志を易へず。海を窮め、天を極むるも、唯君の適く所のまゝならん。鳥獸すら且恩を記す。況て人々に於てをや」と。宗盛喜び、乃、相率ゐて清盛の墓を拜し、樂を墓前に張りて夜を徹す。天明に其宮殿諸第を燒き、航して西海に赴く。

平氏西海に赴く

平家物語（倶利迦羅おとしの事）

さる程に、源平兩方陣を合す。陣のあはひ僅三町ばかりに寄せたり。源氏も進ます、平家も進ます、やゝありて、源氏の方より精兵を勝りて、十五騎楯の面に進ませ、十五騎が上矢の鏑を、只一度に平氏の陣へぞ射入れたる。平家も十五騎を出して、十五の鏑を射返さす。源氏三十騎を出して、三十の鏑を射さすれば、平家も三十騎を出して、三十の鏑を射返さす。源氏五十騎を出せば、平家も亦五十騎を出し、百騎を出せば、百騎出づ。兩方百騎づつ、陣の面に進ませ、迭に勝負をせんとはやりけるを、源氏の方より制して、わざと勝負をばせさせず。かやうにあひしらひ日を待ちくらし、夜に入りて、平家の大勢を、後の倶利伽羅が谷へ追ひ落さんとたばかりけるを、平家これをば夢にも知らず、共にあひしらひ、日をまちくらすこそはなかけれ。さる程に、北南より廻る搦手の兵一萬餘騎、くりからの堂の邊に廻りあひ、籠の方立打ちたゝき、鬨をどつとぞ作りける。各後を顧み給へば、白旗雲の如くにさしあげたり。此山は四方巖石にてあるなれば、搦手よも廻らじと思ひつるに、こは如何にとぞ驚がれける。さる程に、大手より木曾殿一萬餘騎、鬨の聲を合せ給ふ。礪波山のすそ、

松長の柳原ぐみの木林に、引き隱したりける一萬餘騎、日の宮林に扣へたる今井の四郎六千餘騎も、同じう鬨の聲をぞ合せける。前後四萬餘騎がなめく聲に、山も河も、只一度に崩るゝとこそ聞えけれ。さる程に、次第に闇うはなる、前後より敵は攻め來る、穢しや返せや〳〵、といふ族多かりけれども、大勢の傾き立ちたるは、左右なう取りて返す事の難ければ、平家の大勢、後の俱利伽羅が谷へ、我先にとぞ落ち行きける。先に落したる者の見えれば、此谷の底にも、道のあるにこそとて、親落せば子も落し、兄が落せば弟も落し、主落せば家ゐ子郎等も續きけり。馬には人、人には馬落ち重り〳〵、さばかり深き谷一つを、平家の勢七萬餘騎にてぞ埋めたりける。泉涌血を流し、死骸岡をなせり。されば此谷の邊には、矢の穴刀の疵、今も殘りてありとこそ承れ。平家の侍大將、上總大夫判官忠綱。飛驒大夫判官景高、河內判官秀國も、此谷の底に埋れて亡せにけり。又備中國の住人瀨尾太郎兼康は、聞ゆる兵にてありけれども、運や盡きにけん、加賀國住人、倉光の次郎成澄が手にかゝりて、生捕にこそせられけれ。又越前國住人、齋藤が城にて返忠したりける。平泉寺の長吏齋明威儀師も、捕はれて出で來る。木曾殿、其法師は余ににくきに、先づ斬れとて斬らせらる。大將軍維盛、通盛、稀有にして、加賀の國へ引き退く。七萬餘騎が中、僅に二千餘騎こそ遁れたれ。同じき十二日、奥の秀衡が許より、木曾殿へ龍蹄二疋奉る。一疋は白月毛、一疋は連錢葦毛なり。やがて此馬に鏡鞍置きて、白山の社へ神馬に立てらる。木曾殿今は思ふ事なしとておはしけるが、但し叔父の十郎藏人殿は、志雄の戰ひこそおぼつかなけれ。いざや行きて見んとて、四萬餘騎が中より馬や人をすぐりて、二萬餘騎にて馳せ向ふ。爰にひみの湊を渡らんとし給ひけるが、なりふし鹽滿ちて、深さを知らざりければ、木曾殿まづはかりごとに、鞍置馬十疋ばかり追ひ入れられければ、鞍つめひたる程にて、相遠なく向の岸にぞ着きにける。木曾殿是を見給ひて、淺かりけるぞ、渡せやとて、二萬餘騎颯と渡して見給へば、案の如く十郎藏人殿は、散々に駈けなされ、引き退き、人馬の息を休むる所に、新手の源氏二萬餘騎、平家三萬餘騎が中へかけ入り、もみにもみて、火出づる程にぞ攻めたりける。大將軍三河守知度討たれ給ひぬ。是は入道相國の末子なり。其外兵多く亡びにけり。平家其處をも追ひ落されて、加賀の國へ引き退く。木曾殿は、志雄の山打ち越えて、能登の小田中、新王の塚の前にぞ陣をとる。

平家物語（主上の都落事）

同じき七月十四日、肥後守定能、鎭西の謀反平げて、菊池、原田、松浦黨、三千餘騎を召し具して上洛す。鎭西謀反をば僅に平げたれども、東國北國の軍はいかにも鎭らず。同じき廿二日の夜半ばかり、六波羅の邊おびたゞしう騷動す。馬に鞍置き腹帶しめ、物ども東西南北へ迸び隱す。唯今敵の打ち入りたる樣なりけり。明けて後聞えしは、美濃源氏に、佐渡の佐衛門尉重定といふ者あり。去ぬる保元の合戰の時、鎭西の八郎爲朝が方の軍に負けて、落人となりたりしを、搦めて出したりし勸賞に、元は兵衛尉たりしが、其時右衛門尉になりぬ、是によりて一門には怨まれて、此頃平家に詔ひけるが、其夜六波羅に馳せ參り、木曾既に北國より五萬餘騎にて攻め上り、天台山東坂本に滿ち〳〵て候。耶等に楯の六郎親忠、手書に大夫房覺明、六千餘騎天台山に競ひのぼり、三千の衆徒と同心して、唯今都へ亂れ入る由申しければ、平家の人々大に騷ぎて、方々

へ討手を指し向けらる。大將軍には、新中納言知盛、本三位中將重衡の卿、三千餘騎にて先づ山科に宿せらる。越前の三位通盛、能登守教經、二千餘騎にて宇治橋を固めらる。左馬頭行盛、薩摩守忠度、一千餘騎にて宇治橋を渡りて都へ入り、陸奥の新判官よしやすが子、矢田の判官代義清、大江山を經て上洛すとも申し合へり。又堀津國河内國の源氏等同心して、同じう都へ亂れ入るよし申しければ、平家の人々、此上は力及ばず、唯一所にていかにも成り給へとて、方々へ向へられたりけるる討手ども、皆都へ呼び返されけり。帝都名利の地には、鶏鳴きて安きことなし。治れる世だにもかくの如し。況や亂れたる世に於てをや。吉野山の奥の奥へも、入りなばやとは思し召されども、諸國七道悉く背きぬ。何處の浦かおだしかるべき。三界無安猶如火宅とて、如來の金言一乘の妙文なれば、なじかは少しも違ふべき。同じき廿四日の小夜ふけがたに、前の内大臣宗盛公、建禮門院のわたらせ給ふ、六波羅池殿に參りて申されけるは、木曾既に北國より五萬餘騎にて攻めのぼり、比叡山東坂本に滿ち〳〵て候ふ。耶尊の橋の六郎ちか忠、手書に大夫房覺明、六千餘騎天台山へ競ひのぼり、三千の衆徒引き具して、只今都へ亂れ入るよし聞え候ふ。人々は唯都の内にて、いかにもならんと申し合されけれども、まのあたり女院二位殿に、浮目を見せ參らせんことの口惜しく候へば、院をも内をも取り奉りて、西國の方へ御幸行幸をもなし參らせばやと、思ひなりてこそ候へと申されければ、女院今はたゞさもかくも、そこの計ひにてこそあらんずらめとて、御衣の御袂に餘る涙せきあへさせ給はれば、大臣殿も直衣の袖しぼるばかりにぞ見えられけるる。さる程に、法皇なば平家取り奉りて、西國の方へ落ちゆくべしなど申しことなど、内々聞し召す旨もやありけん、其夜半ばかりに、按察使大納言資賢卿の子息、右馬の頭資時ばかりを御供にて、竊に御所を出させ給ひて、御行方も知らずぞ御幸なる。人これを知らざりけり。平家の侍に、橘内左衛門尉季保といふ者あり、さか〳〵しき男にて院にも召し使はれけるが、其夜しも御宿直に參りて、遙に遠う候ひけるが、常の御所の御方さまに、世に物さわがしう、女房達忍び音に泣きなどし給へり。何事なるらんと聞きければ、俄に法皇の見えさせましまさぬは、何方への御幸やらんと申す聲にくきほどに、あなあさましとて、急ぎ六波羅へ馳せ參り、此由申したりければ、大臣殿定めて非事にてぞあらんとは宣ひながら、急ぎ參りて見參らさせ給ふに、實にも法皇わたらせましまさず。御前に候はせ給ふ女房だち、二位殿、丹後殿以下、一人も働きたまはず。いかにやと問ひ參らさせ給へども、我こそ法皇の御行方知り參らせたり、と申さるゝ女房たち、一人もおはせざりければ、大臣殿も力及ばせ給はず、泣く〳〵六波羅へぞ歸られける。さる程に、法皇都の中にわたらせ給はず、と申す程こそありけれ。京中の騒動斜ならず。況や平家の人々のあはてさわがれける有樣は、家々にかたきの打ち入りたりとも、かぎりあれば、是には過ぎじとぞ見えし。平家日比は院をも、内をも取り奉りて、西國の方へ御幸行幸をもなし參らせんと、支度せられたりしかども、かく打ち捨てさせ給ひぬれば、頼む木のもとに、雨の溜らぬ心地ぞせられける。貴めては行幸ばかりをもなし參らせよやとて、明くる卯の刻に行幸の御輿を寄せたりければ、主上は今年六歳、未幼うまし〳〵ければ、何心なうぞ召されける。御同輿は、御母儀建禮門院參らせ給ふ、神璽、寶劍、内侍所

印、鉦、時の簡、玄上鈴鹿などをも取り具せよと、平大納言時忠卿、下知せられたりけれども、餘にあはて驚きて、取りおさす物ぞ多かりける。豊御座の御劔などをも。取り忘れさせ給ひけり。やがて此時忠の卿　内蔵頭信基、讃岐の中將時實、父子三人、衣冠にて供奉せらる。近衛司御縄の位、甲冑弓箭を帶して行幸の御供仕る。七條を西へ、朱雀を南へ行幸なる。明くれば七月廿五日なり。かん天既にひらけて、雲東嶺にたなびき、明方の月白くさへて、鶏鳴又いそがはし。夢にだにかゝる事は見ず、一年都うつりして、俄にあわたゞしかりしは、かゝるべかりける先表とも、今こそ思ひ知られけれ。攝政殿も行幸に供奉して、御出ありけるが、七條大宮にて髮結ひたる童子の左の袂に、春の日と書きては、春日と訓めば、法相擁護の春日大明神、大織冠の御裔を守り給ふこそと頼もし思し召す處に、件のどうじの聲とおぼしくて、

いかにせん廉の末葉のかれゆけばたゞ春の日にまかせたらなん

供に候ふ遠藤左衛門高直を召して、此世の中の有樣を御らんずるに、行幸はなれども、御幸はならず。行末頼もしからず思しめすは、いかにと仰せければ、御牛飼に目をきつと見合せたり。聽て心得て、御車を遣りかへし、大宮をのぼりに、飛ぶが如くに仕うまつり、北山の邊、知足院にぞ入らせ給ひける。

平家物語（維盛の都落の事）

越中の次郎兵衛、大刀脇狹み、攝政殿の御留あるを、押し止め巻らせんと、頼に進みけれども、人々に制せられて、力及ばでとゞまりぬ。中にも小松の三位の中將維盛の卿は、日頃より思ひ儲け給へることなれども、指し當りて悲しかりけり。此北方と申すは、故中御門の新大納言成親の卿の女、父にも母にもおくれたまひて、孤にておはせしかども、桃顔露に綻び、紅粉眼に媚をなし、柳髮風に亂るゝよそほひ、又人あるべしとも見え給はず。六代御前とて、生年十になり給ふ若君、其妹八歳の姫君おはしけり。此人々も面々に後れじと慕ひ給へば、三位の中將宣ひけるは、我は日頃申しゝやうに、一門に具せられて、西國の方へ落ち行くなり。何處までも具足し奉るべけれども、道にも敵待つなれば、心安く通らん事ありがたし。假令我討たれたりと聞き給ふとも、樣など替へ給ふ事は夢々あるべからず。其故は、いかならん人にも見もし見えて、あの幼き者共をばぐゝみ給へ、情をかくべき人もなどかなく候ふべきと、やう〳〵に慰め宣へども、北の方とかくの返辭をもし給はず、引き被いてぞ伏し給ふ。中將既に打ち立たんとし給へば、北の方袂にすがり、都には父もなし母もなし、捨てられ奉りて後、又誰にかは見ゆべきに、いかならん人にも見えよなど、承るこそうらめしけれ。前世の契ありければ、人こそ憐み給ふとも、又人ごとにしもや情をかくべき、何處までも伴ひ奉り、同じ野原の露とも消え、一つ底の水屑ともならんとこそ契りしに、されば小夜の寢覺のむつごとは、皆偽になりにけり。せめては身一つならば如何せん、捨てられ奉る身のうさを、思ひ知りても止まりなん。幼き者共をば誰に見ゆづり、いかにせよとかおぼしめす、うらめしうも止め給ふものかなとて、且は恨み且は慕ひ給へば、三位の中將、誠に人は十三吾は十五より見初め奉りたれば、火の中水の底へも、共に入り共に沈み、限ある別路までも、後れ先だゝじとこそ思ひしか。今日は斯く物憂き有樣どもにて、軍の陣へ趣けば具足し奉りて、行末も知らぬ旅の空にて、憂き目

を見せ參らせんと、我身ながらうたてかるべし。其上今度は用意も候はず、何處の浦にも心安う落ちつきたらば、それより迎に人をこそ參らせめとて、思ひ切りてぞ立たれける。中門の廊に出て、鎧取りて着、馬引き寄せさせ、既に乘らんとし給へば、若君姫君走り出て、父の鎧の袖草摺に取りつき、是はされば何所へとて、渡らせ給ひ候ふやらん、我も參ちん我も行かんと嘆ひ泣き給へば、憂き世の糧と覺えて、三位中將、いとゞ堅方なげにぞ見えられける。御弟新三位の中將實盛、左中將清經、同じき少將有盛、丹後の侍從忠房、備中守師盛、兄弟五騎馬に乘りながら、門の中へ打ち入れ、庭に控へ、大音聲を上げて、行幸は春に延びさせ給ひぬらんに、いかにや今までの遲參候ふと、聲聲に申されければ、三位の中將馬に乘りて出られけるが、引きかへし、條の際に打ちよせ、弓の弭にて簾を颯と拔き上げて、これ御らん候へ、幼き者共があまりに嘆ひ候ふか、とかう拵へ置かんと仕る程に、存の外の遲參候ふと宣ひもあへず、はらはらと泣きたまへば、庭に控へ給へる人々も、皆鎧の袖をぞぬらされける爰に三位の中將の年頃の侍に、齋藤五齋藤六とて、兄は十九弟は十七になる侍あり。三位の中將の御馬の左右の水つきに取りつきて、何處までも御供仕り候はんと申しければ、三位の中將宣ひけるは、汝等が父齋藤別當實盛が、北國へ下りし時、供せうといひしを。存ずる旨あるぞとて、汝等を止め置き、遂に北國にて討死したりしは、奮きものにてかゝるべかりける事を、かれてさとりけるにこそ、あの六代を止めて行くに、心安う扶持すべき者のなきぞ、只理を曲げて止まれかしと宣へば、二人の者ども力及ばず、涙を抑へて止りぬ、北方は、日比かく情なき人とこそ、かけては思はざりしかとて、引き被きてぞ臥し給ふ。若君姫君女房達は、御簾の外まで轟び出で、聲をばかりになめき叫び給ひけり。其聲々耳の底に止りて、されば四海の立波の上、吹風の音までも、聞くやうにこそ思はれけれ。平家都を落ちゆくに、六波羅、池殿、西八條以下、人々の家々廿餘箇所、其外次々の驛の宿所々々、京白川四五萬軒が在家に火をかけて、一度に皆燒き拂ふ。

平家物語（忠度の都落の事）

薩摩守忠度は、いづくよりか歸られたりけん、侍五騎童一人、我身共にひた兜七騎取りて返し、五條の三位俊成の卿のもとにおはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず、忠度と名のり給へば、落人歸り來れりとて、其内さわぎ合へり。薩摩守急ぎ馬より飛びて下り、自ら高らかに申されけるは、これは三位殿に申すべきことありて、忠度が參りて候、假令門は開けられずとも、此際まで立ち寄り給へ、申すべきことの候ふと申されたりければ、俊成の卿、其人ならば苦しかるまじ、開けて入れ申せとて、門をあけて對面ありけり。事の体何となうものあはれなり。薩摩守申されけるは、先年申し承りてより後は、ゆめ〳〵疎略を存ぜずとは申しながら、此二三箇年は、京都の騷國々の亂出で來、剰當家の身の上にまかりなりて候へば常に參り寄ることも候はず。君既に帝都を出させ給ひぬ。一門の運命今日はや盡きはて候。それにつき候ひては、撰集の御沙汰あるべき由承りて候ひし程に、生涯の面目に、一首なりとも、御恩を蒙らんと存じ候ひつるに、かゝる世の亂出で來て、其沙汰なく候條、たゞ一身の嘆と存じ候、此後世靜まりて、撰集の御沙汰候はゞ、是に候卷物の中に、さりぬべき歌候はゞ、一首なりとも御恩蒙りて、草の陰にても嬉しと存じ候はゞ、遠き御

守さこそなり參らせ候はんずれとて、日頃詠み置かれたる歌どもの中に、秀歌さおぼしきを、百餘首書き集められたりける卷物を、今はとて打ち立たれける時、是を取りて持たれたりけるを、鎧の引合より取り出でゝ、後成の卿に奉らる。三位是を聞きて見給ひて、かゝる忘れがたみどもをも賜り候上は、ゆめゆめ疎略を存じまじう候。さても只今の御わたりこそ、情も深う哀も殊に勝れて、感涙抑へ難うこそ候へと宣へば、薩摩守、屍を山野に曝さばさらせ、浮名を西海の波に流さばながせ、今は浮世に思ひおくことなし。さらば暇申してとて、馬に打ち乘り甲の緒をしめて、西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位後を遙に見送りて立たれたれば、忠度の聲とおぼしく、前途程遠し、思ひを雁山の夕の雲に馳すと、高らかに口ずさみ候へば、後成の卿も、いとゞ哀に覺えて、涙を押へて入り給ひぬ。其後世靜まりて、千載集を撰ばれけるに、忠度のありし有樣、いひおきし言の葉、今更思ひ出でゝ哀なりけり、件の卷物の中に、さりぬべき歌いくらもありけれども、其身勅勘の人なれば名字なば、あらはされず、故郷花さいふ題にて、よまれたりける歌一首ぞ、よみ人しらずと入れられたる。

さゞなみや志賀の都は荒れにしをむかしながらの山ざくらかな

其身朝敵となりぬる上は、仔細に及ばずといひながら、うらめしかりしことどもなり。

平家物語（經政都落の事）

修理大夫經盛の嫡子、皇后宮亮經政は、幼少の時より、仁和寺の御室の御所に、童形にて候はれしかば、かゝる慌劇の中にも、君の御名殘きつと思ひ出で參らせ、侍五六騎召し具して、仁和寺殿へ馳せ參り、急ぎ馬より飛びて下り、門を叩かせ申し入られけるは、君既に帝都を出でさせ給ひぬ。一門運命、今日既に盡きはて候ひぬ。浮世に思ひおくことなけれ、只君の御名殘ばかりなり。八歳の年此御所へ參り始め候ひて、十三にて元服仕り候ひしまでけ、聊相勞ることの候はんより外は、白地に御前を立ち去るとも候はず。今日既に西海千里の波路に趣き候へば、又いづれの日いづれの時、必ず立ち歸るべしとも覺えぬことこそ、口をしう候へ。今一度御前へ參りて、君をも見參らせたう存じ候へども、甲冑をよろひ弓箭を帶して、あらぬ樣なるよそほひに罷りなりて候へば、憚り存じ候ふと申されければ、御室哀に思し召して、只其姿を改めずして參れ、とこそ仰せられけれ。經政其日は紫地の錦の直垂に、萠黃匂の鎧着て長覆輪の太刀を佩き、二十四さしたるきりふの矢負ひ、滋藤の弓脇に挾み、甲をば脫ぎて高紐にかけ、御前の御坪にかしこまる。御室嘘て御出ありて、御簾高くあげさせ、是へ是へと召されければ、經政大床へこそ參られけれ。供に候ふ藤兵衛尉有教を召す。赤地の錦の袋に入れたりける、御琵琶を以て參りたり。經政是を取り次ぎて御前に指し置き申されけるは、先年下し預りて候ひし宵山持せて參りて候。名殘は盡きず存じ候へども、さしもの我朝の重寶を、田舍の塵になさんことの、口をしう存じ候へば、參らせおき候。若し不思議に運命開けて、都へ立ちかへる事も候はゞ、其時こそ重れて下し預り候はめと、申されたりければ、御室哀に思し召して、一首の御詠を遊ばされてぞ下されける。

飽かずして別るゝ君が名殘をば後のかたみにつゝみてぞおく

經政御硯下されて、

奥竹のかけひの水はかはれどもなほすみあかぬ宮のうちかな

さて經政御前をまかり出でられけるに、數輩の同行、出世者、坊官、侍、僧にいたるまで、經政の名殘をゝしみ、袂にすがり涙を流し、袖を濡さぬはなかりけり。中にも幼少の時、小師にておはせし、大納言の法師行慶と申しゝは、葉室の大納言光賴卿の御子なり。餘になごりををしみ參らせて、桂川の端まで打ち送り、それより暇乞ひて歸られけるが、法印なく〳〵かうぞ思ひつゞけ給ふ。

あはれなり老木若木も山ざくらおくれさきだち花はのこらじ

經政の返事に、

旅ごろもよな〳〵袖をかたしきて思へば我はさほく來にけり

さて卷きて持せたりける赤旗、さつと指し上げたれば、あそこゝゝに控へて、待ち奉る侍ども、あはやとて馳せ集り、その勢百騎ばかり鞭を揚げ、駒をはやめて、程なく行幸に追ひつき奉る。

平家物語（一門の都落の事）

池の大納言賴盛の卿も、池殿に火かけて出られたるが、烏羽の南の門にて、寵れたる事ありとて、鎧につけたる赤印どもかなぐり捨てさせ、其勢三百餘騎都へ上られけり。鳥中の次郎兵衛盛次弓脇挾み、大臣殿の御前に馳せまゐり、急ぎ馬より飛びており、畏りてあれ御覽候へ、池殿は御留によりて、多くの侍共留り候ふが、奇怪に覺え候。池殿までは其恐も候へば、侍共に矢一つ射かけ候はゃやと申しければ、大臣殿今是程の有樣どもを、見果てぬ程の無道人は、さなくともありなんとの給へば、力及ばで射ざりけり。さて小松殿の公達はいかにとの給へば、未御一所も見えさせ給ひ候はずと申す。大臣殿都を出でゝ、今一日だに過ぎざるに、はや人々の心どもの變り行く、うたてさよとぞ宣びける

新中納言知盛の卿、行末とても賴もしからず、只都の內にていかにもならせ給へと、さしも申しつるものをとて、大臣殿の御方を、世にも恨めしげにぞ見給ひける。抑池殿の御留をいかにといふ、兵衛の佐賴朝、常はなさけを懸け奉りて、全く御方をばおろそかに思ひ奉らず、偖に故池殿の御わたらせとこそ存じ候へ。八幡大菩薩も御せうばつ候へなど、度々誓狀を以て申されける。平家追討の討手の使の上ろごとに、相構へて池殿の侍に向ひて、弓引くなんど、事に觸れて芳心せられたりければ、一門の平家は運盡きて都を落ちぬ。今は兵衛佐にこそ助けられんずれとて、落ち止られたりけるとぞ聞えし。八條の女院は、都をば軍に惡れさせ給ひて、仁和寺の常磐殿に、忍びてまし〳〵ける所へ參り籠られけり。此賴盛の卿と申すは、女院の御乳母、宰相殿と申す女房に、相具せられたりけるに因りてなり。自然の事も候はゃ、賴盛助けおはしませと申されければ、女院、今は世が世にてあればこそと、世に賴もしげもなうぞ仰せける。凡は兵衛佐ばかりこそ、芳心を存ずといへども、自餘の源氏等は如何あるらん、悉に一門には引き別れて落ち留りぬ。波にも磯にもつかぬ心地ぞせられける。さる程に小松殿の公達、兄弟六人、都合其勢一千餘騎、淀の六田河原にて、行幸に追ひつき奉らる。大臣殿斜ならず嬉しげにて、いかにや今までの遲參候と宣へば、三位の中將幼き者どもが、餘に慕ひ候ふな、とかう搭へ置かんと仕る程に、存の外の遲參と申されければ、大臣殿など、六代殿をば召し具せられ候はぬぞ、心强くも止め給ふものかなと宣へば、三位の中將、行末とても賴もしうも候はずとて、問ふにつらさの涙を流されけるこそ悲しけれ。落ち行く平家は誰誰ぞ、前內大臣宗盛公、平大納言時忠、平中納言教盛、新中納言知盛

修理大夫經盛、右衛門督清宗、本三位中將重衡、小松三位中將維盛、同じき新三位中將資盛、越前三位通盛、殿上人には內藏頭信基、讃岐中將時實、左中將清經、同じき少將有盛、丹後侍從忠房、皇后宮亮經政、左馬頭行盛、薩摩守忠度、武藏守知章、能登守教經、備中守師盛、尾張守清定、淡路守清房、若狹守經俊、藏人大夫成盛、經盛のなと子大夫敦盛、兵部少輔正章、僧には二位僧都專親、法勝寺の執行能圓、中納言の律師仲快、經師坊の阿闍梨祐圓、武士には、受領、撿非違使、衛府、諸司の樣、百六十人都合其勢七千餘騎、是は此三箇年が間、東國北國度々の軍に討ち洩らされて、僅に殘る所なり、平大納言時忠の卿、山崎關戸の院に、玉の御輿をかき据ゑさせ、男山の方伏し拜み、南無歸命頂禮八幡大菩薩、願くば君を始め參らせて、我等を今一度故郷へ歸し入れさせ給へと、祈られけるこそ悲しけれ。各後を返り見給へば、霞めろ雲の心地して、煙のみ心細くぞ立ちのぼる。　中納言教盛

はかなしなぬしは雲井に隔つれば宿はけぶりとたちのぼるかな

修理大夫經盛、

故郷をやけ野の原とかへり見て末もけぶりのなみ路をぞゆく

誠に故郷をば一片の煙塵に隔てつゝ、前途萬里の雲路に趣かれけん心の中、押し量られて哀れなり。肥後守貞能は、川尻に源氏待つと聞きて、蹴散さんとて、其勢五百餘騎にて發行したりけるが、非事なればとて、取つて返して上る程に。うさのゝ邊にて行幸に參り逢ひ、急ぎ馬より飛びて下り、大臣殿の御前に參り長まりて、あな心うや、こは何地へとて、渡らせ給ひ候ふやらん、西國へ下らせ給ひたらば、落人とて、あそこここにて打ち洩らされて、憂き名を流させまし

まさん事、口惜しう候ふべし。只都の內にて、いかにもならせ給ふべくもや候ふらん、と申しければ、大臣殿、貞能は未知らぬか、木曾既に北國より五萬餘騎にて攻め上り、比叡山東坂本に充ち〳〵たり。法皇も過ぎし夜半に失せさせ給ひぬ。人々は都の中にて、いかにもならんと申し合れけれども、まのあたり女院二位殿に浮目を見せ參らせんも、我身ながら口惜しければ、攻めて行幸ばかりもなし奉り、各をも引き具して、四國の方へ落ち下り、一先づもと思ふぞかしと宣へば、左候はゞ、貞能は身の暇賜りて、都の中にていかにもなり候はんとて、召し具したりける五百騎の勢をば、小松殿の公達たちにつけ參らせ、手勢三十騎ばかり都へ取りてかへす。平家の餘黨の都に殘り止りたるを討たんとて、貞能が歸り入る由聞えしかば、池の大納言は、頼盛が身の上にてぞあらんずらんと、大に恐れ騷がれけり。されども貞能は、西八條の燒跡に大幕引かせ、一夜宿したりけれども、歸り入らせ給ふ平家の公達、一人もおはせざりければ、さすが世の有樣心細くや思ひけん、源氏の駒の蹄に懸らさせじとて、小松殿の御墓掘らせ、御骨に向ひ奉りて、泣く〳〵申しけるは、あなあさまし、御一門の御はて御覽候へ、生ある者は必ず滅す、樂盡きて悲來るといふ事をば、昔より書き置きたる事にて候へども。まのあたりかゝる憂き事候はず。君はかゝるべかりける事を、かれてささらせ給ひて、佛神三寶に御祈誓ありて、御世を早うせさせまし〳〵けるとこそ、ありがたう候へ、いかにもして其時貞能も、後世の御供仕るべう候ひしものを、かひなき命ながらへて、今日はかゝる憂き目に逢ひ候事こそ口惜しう候へ。死期の時は、必ず一佛土に迎へさせ給へと、泣く〳〵遙に掻きくどき、骨をば高野へ送り、あたりの土をば賀茂川へ流させ、

行末頼もしからずや思ひけん、主と後合に、東國の方へぞ落ち行きける。貞能は先年宇都宮を申し預りて、其時情ありしかば、今度も又宇都宮をたのみて下りたりければ、そのよしみにや、芳心しけるとぞ聞えし。平家は小松の三位の中將維盛の卿の外は、大臣殿以下妻子を具せられけれども、次ざまの人々は、さのみ引きしらふにも及ばれば、後會其期を知らず、皆打ち捨てゝぞ落ち行きける。人はいづれの日いづれの時、必ず立ち歸るべしと、其期を定め置くだにも、別は悲しきならひぞかし。況や是は今日を最後、只今かぎりのことなれば行くも止るも互に袖をぞ絞りける。相傳譜第のよしみ、年頃日頃の重恩、いかでか忘るべきなれば、老いたるも若きも、皆跡をのみ顧みて、先へは進みもやらざりけり。或は磯邊の涙枕、八重の汐路に日をくらし、或は遠きを分け、險しきをしのぎて、駒に鞭打つ人もあり、船に棹さす者もあり、思ひ〳〵心々にぞ落ち行きける。

後鳥羽天皇即位

法皇、敕して平族百八十餘人の官爵を奪ひ、其邑を沒し、分ちて之を義仲等に賜ひぬ。乃、高倉帝の第四子を立てゝ、位に卽かしむ。平氏之を聞き、其取り去らざるを悔ゆ。

平氏九州に入る

遂に帝を奉じて、行在所を豐後に建つ。豐後の國司藤原頼輔の子頼經、州人緒方維義と與に、院宣を傳へて、西海の兵を收む。使をして來り告げしめて曰く、「公等宜しく此に止るべからず」と。時忠之を讓めて曰く、「正統の天子此に在り。若胡爲者ぞ」と。維義、對へずして、三萬騎を以て來り攻む。乃、貞能、高直、種直等を遣して、之を拒ぐ。敗れ還る。乃、箱崎に奔り、遂に山鹿に徙る。菊池、原田の諸族皆叛くを聞き、則又柳浦に徙り、宇佐宮に祈る。維義來るを聞き、終に航して遁る。清經、自縊に免る可からざるを度り、夜、能樓に上りて、月を看つゝ笛を吹き、海に投じて死す。

清經死す

平氏屋島に據る

時に長門の國は、知盛の管する所たり。其目代紀通資、船百餘艘を献じて、以て讃岐の屋島に徙らしむ。阿波の豪傑田口成能、千騎を以て來り附く。且、爲に四國を徇へ諭すに、順逆を以てす。來り屬する者多し。因りて屋島に行宮を建て、遂に山陽道を徇ふ。

水島戰【水島城】備中

閏十月、源義仲、足利義清、高梨高信、海野幸廣を遣し、來り犯さしむ。而して身之に繼ぐ。重衡、通盛、敎經、三百餘艘を以て迎へて、之を擊つ。水島城に據る。源氏千餘艘を以て陸を負ふ。敎經、城の東北門より出でゝ、敵を挑む。敵、五千騎を以て來り攻む。敎經、佯り走る。重衡、通盛、舟師を將ゐて、島の西南より、左右の翼を縱ちて之を遶る。敎經、豫、舟を連ね板を布き、以て進退に便し、親射て高信を殺す。北兵水戰を習はず。日蝕晦冥に屬し、我が兵之に乘ず。

北兵遂に大に敗走す。追擊して義清、幸廣を斬り、首を獲しこと千二百級。

妹尾兼康

初め篠原の戰に、妹尾兼康、敵將倉光成澄に遇らる。因りて成澄に仕へて親信せらる。今井兼平、義仲に謂て曰く、「彼れの瞻視常に異なり。之を殺すに若かじ」と。義仲聽かず。兼康從容として成澄に說くに、其鄕、妹尾の地の肥美の狀を以てす。成澄乃、義仲に請ひて、往きて之を收む。兼康、嚮導を爲し、先づ往く。其子宗康以下千餘人を會して、成澄を掩殺し、板倉の寨に據る。義仲、將に備中に赴かんとす。聞きて怒り、今井兼平をして、來りて兼康を擊たしむ。兼康戰ひ且走り、屋島に赴かんと欲す。宗康、体肥えて行く能はず。兼康之を棄てゝ走る行くこと里許にして、復、還りて之を視る。追兵湧り至る。乃、宗康を刄して、死す。義仲、將に屋島を攻めんとす。賴朝の來りて己を討つを聞きて、則東に還る。

【板倉】備中

十一月、敎盛、敎經、重衡等、源行家と室山に戰ひ、大に之を破る。山陽、南海の十餘州、來り屬する者多し。

室山戰【室山】播磨

是の時に當りて、義仲兵を縱ちて、京師を暴掠す。亦事を以て法皇を怨望し、將士に謂て曰く、「汝、其凡人に敵するよりは、寧ろ、王者に敵せよ」と。遂に兵を

法住寺戰

舉げて反し、法住寺殿を焚く。矢、乘輿に及ぶ。遂に帝を閑院に、法皇を五條宮に幽し奉る。公卿、皆裸跣して遁る。義仲、乃將士に謂て曰く、「帝と爲り、院と爲るも、唯吾が欲する所。公となり、卿と爲る、唯汝が請ふ所のまゝのみ」と。乃、公卿以下四十九人の官爵を奪ひ、其妻の兄藤原師家を以て攝政となす。京師其暴に苦しみ。乃、平氏を思ふ。義仲既に賴朝と隙あり。其來り討たんことを恐れ、平氏と從を爲さんと欲し、書を屋島に贈りて、其意を言ふ。宗盛之を許さんと欲す。知盛曰く、「義仲我をして其極に至らしむ。我乃之と和しなば、恐らく賴朝我を笑はん。公宜しく答へて、『天子在せり、汝冑を免ぎ、弓を弛べ、自來りて降るを乞はば、吾れ則之を許さん』、と曰ふべし」と。宗盛之に從ふ。

義仲書を屋島に貽りて平氏と合從せんとす

壽永二年平氏福原に城く

明年、山陽既に定まりしを以て、帝を奉じて福原を復し、因りて城く。山を負ひ海に臨む。兵を集めて之を守る。二月、敎盛、五百騎を以て、備中の下道に屯す。會〻讃岐の廳衆二千騎、叛きて源氏に應じ、船に乘りて下道を過ぎ、仰ぎて我營を射る。敎盛怒りて曰く、「此輩甞て我馬に秣かひ、我馬に飲はんと云ひし者。今敢て亡狀此の如し」と。廳を飛して之を追ふ。廳衆淡路に走り、源義嗣、源義久に倚る。敎盛攻めて之を塵にし、並に義嗣、義久を殺し、遂に河野通信を伊豫に

東軍來り攻む

攻む。通信遁れて安藝に走り、緒方維義と合し、東して備前に入り、今木城に據る。敎經、赴き攻め、一晝夜に之を拔く。宗盛帝に奏して、敎盛を正二位大納言に進む。辭して拜せず。

是時、賴朝の二弟範賴、義經、義仲を討ちて之を殺し、終に院宣を以て、大舉して來り攻む。關東の將士悉く之に從ふ。期を刻して會戰す。知盛、重衡、東門を拒ぐ。貞能等、西門を拒ぐ。而して資盛、有盛、師盛等、兵七千を以て北山を守る。義經、高騎を以て夜之を襲ふ。我が兵大に敗走す。資盛之を愧ぢて、獨、屋島に奔る。宗盛諸將をして之に代らしむ。皆往くを憚る。敎盛之に當らんと請ふ。即夜、通盛、盛俊と、往きて北山を守る。範賴、東門に至る。土肥實平等西門に至る。藤原景清等力めて西門を拒ぐ。敵入る能はず。重衡、知盛、又東門の敵を擊ちて之を卻く。已にして、義經間道より來り襲ひて、火を縱つ。城卒に陷る。重衡、西に走る。東人莊家長追ひて其馬を射る。馬倒る。其騎、副馬に騎る。重衡呼びて之を取らんとす。騎聞かざる爲して走る。重衡自殺せんと欲し、遂に家長に獲はる。○忠度も亦岡部忠澄に追る。忠度紿きて曰く、「吾は東兵なり」と。忠澄曰く「帽して齒を涅する者は、東兵に非るなり」と。忠度返り鬪ひ、忠澄を

經正【大藏谷】播磨

知盛

搏ちて之を伏せ、三たび之を刺せども入らず。忠澄の僕來る。終に爲に殺さる。忠澄、其鎧を撿して歌稿を得たり。因りて其忠度たるを知れり。○經正走りて大藏谷を過ぐ。莊高家呼びて、鬪を求む。顧み答へて曰く、「吾れ若と鬪ふを羞るなり」と。高家怒りて、之に逼る。經正、馬より下りて自殺す。其弟經俊、及び通盛、業盛、師盛、清定、清房、盛俊等、皆死す。通盛の妻、其夫の死を聞きて海に投じて死す。敎經航して淡路に赴く。宗盛、帝を舟に奉ず。諸敗兵、舟を爭ひて溺るゝ者無數なり。知盛初め武藏守と爲る。國人識りて之を追ふ。及ぶに垂とす。其子の知章、時に年十七。遮り鬪ひて、其一騎を斬りて之に死す。知盛間を得て遁れ、馬を下り舟に上る。舟隘くして馬を容れず。則馬首を北して之に鞭つ。馬躍りて陸に上る。田口成能曰く、「良馬なり、其敵に獲られんより、寧ろ射て之を殺さん」と。知盛曰く、「吾れ此れに由りて免る。之を殺すに忍びず」と。馬、知盛を望みて三たび嘶く。終に義經に獲はる。知盛、宗盛に謂て曰く、「子は死して父を救ふ。父は子を棄てゝ走る。他人をして此の如くならしめば、吾れ當に其面に唾すべし。今吾れ之を爲す。之を何と謂はんや」と。因りて歔欷して涕を流す。

敦盛

（平敦盛肖像）

敦盛も亦知章と同齢なり。知盛の舟を望みて之を馳せ、熊谷直實に獲はる。是日直實、曉を冒して西門に向ふ。城上に笛聲あるを聞きしが。敦盛を獲るに及びて其腰に笛を挿めるを見る。念ふに嚮に聞きし所のものは是なりと。乃首を義經に請ひ、其笛を併せて、之を經盛に歸る。

義經、諸の首虜を以て、歸りて法皇に献ず。

平家物語（忠度の最後の事）

薩摩守忠度は、四の手の大將軍にておはしけるが、其日の裝束には、紺地の錦の直垂に黒糸縅の鎧着て、黒き馬の太う逞しきに、沃懸地の鞍置きて乘り給ひたりけるが、其勢百騎ばかりが中に打ち圍れて、いささわがず控へ〜落ち給ふ所に、爰に武藏國の住人、岡部の六彌太忠澄、よき敵と目をかけ、鎧を合せて追ひかけ奉り、あれはいかに、よき大將軍とこそ見參らせて候へ、正なうも敵に後を見せ給ふものかな、返させ給へと、詞をかけゝれば、是は味方ぞとて、振り仰ぎ給ふ内兜を見入れたれば、鐵漿黑なり。あつぱれ味方に鐵漿つけたる者はなきものを、いかやうにも、是は平家の公達にてこそおはすらめとて押し並べてむずと組む。是を見て百騎ばかりの兵ども、皆國々のかり武者なりければ、一騎も落ち合はず、我先にとぞ落ち行きける。薩摩守は、聞ゆる熊野そだちの大力、風覓の早業にておはしければ、六彌太を圍みて、憎い奴が味方ぞといはばいはせよかしとて、六彌太を取りて引き寄せ、馬の上にて二刀、おちつく所にて一刀、三刀までこそ突かれけれ。二刀は鎧の上なれば通らず。一刀は内兜へ突入られたりけれども、薄手なれば死なざりけるを、取りて押へて首を掻かんとし給ふ所に、六彌太が童、後ればせに馳せ來て、急ぎ馬より飛びて下り、討ち刀をぬいて、薩摩守の右の腕を、臂の本よりふつと打ち落す。薩摩守今はかうとや思はれけん、暫し退け、最後の十念とぞなへんとて、六彌太を圍みて、弓丈ばかりぞ投げ退けらる。その後西に向ひ、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨との給ひもはてれば、六彌太うしろより、薩摩守の首をとる。よい首討ち奉りたりとは思へども、名をば誰とも知らざりけるが、箙に結ひ附けられたる文を、取りて見ければ、旅宿花といふ題にて、歌をぞ一首よまれたる。

行きくれてこの下かげを宿とせば花や今宵のあるじならまし　忠度

と書かれたりける故にこそ、薩摩守とは知りてけれ。やがて首をば太刀の先に貫き、高く指しあげ、大音聲をあげて、此日頃日本國に、鬼神と聞えさせ給ひたる薩摩守殿をば、武藏の國の住人、岡部の六彌太忠澄が討ち奉りたるぞや、と名乘りたりければ、敵も味方も是を聞きて、あないとほし、武藝にも歌道にも勝れて、よき大將軍にておはしつる人をとて、皆鎧の袖をぞぬらしける。

平家物語（敦盛最後の事）

さる程に、一の谷の軍敗れしかば、武藏の國の住人、熊谷の次郎直實、平家の公達、助船に乘らんとて、汀の方へ落ち行き給ふらん、あつぱれ好き大將軍に組まばやと思ひ、細道にかゝりて、汀の方へ歩ませる所に、爰に練絹に鶴ぬひ

敦盛

（平敦盛肖像）

敦盛も亦知章と同齢なり。知盛の舟を望みて之を馳せ、熊谷直實に獲はる。是日直實、曉を冒して西門に向ふ。城上に笛聲あるを聞きしが。敦盛を獲るに及びて其腰に笛を挿めるを見る。念ふに嚮に聞きし所のものは是なりとし乃首を義經に請ひ、其笛を併せて、之を經盛に歸る。

義經、諸の首虜を以て、歸りて法皇に献ず。

平家物語（忠度の最後の事）

薩摩守忠度は、四の手の大將軍にておはしけるが、其日の裝束には、紺地の錦の直垂に黒糸縅の鎧着て、黒き馬の太う逞しきに、沃懸地の鞍置きて乘り給ひたりけるが、其勢百騎ばかりが中に打ち圍れて、いとさわがず控へ〳〵落ち給ふ所に、爰に武藏國の住人、岡部の六彌太忠澄、よき敵と目をかけ、鎧を合せて追ひかけ奉り、あれはいかに、よき大將軍とこそ見參らせて候へ、正なうも敵に後を見せ給ふものかな、返させ給へと、詞をかけゝれば、是は味方ぞとて、振り仰ぎ給ふ内兜を見入れたれば、餓鬼黒なり。あつぱれ味方に餓鬼つけたる者はなきものを、いかやうにも、是は平家の公達にてこそおはすらめとて押し並べてむずと組む。是を見て百騎ばかりの兵ども、皆國々のかり武者なりければ、一騎も落ち合はず、我先にとぞ落ち行きける。薩摩守は、聞ゆる熊野そだちの大力、風覓の早業にておはしければ、六彌太を組みて、憎い奴が味方ぞといはばいはせよかしとて、六彌太を取りて引き寄せ、馬の上にて二刀、おちつく所にて一刀、三刀までこそ突かれけれ。二刀は鎧の上なれば通らず。一刀は内兜へ突入られたりけれども、薄手なれば死なざりけるを、取りて押へて首を掻かんとし給ふ所に、六彌太が童、後ればせに馳せ來て、急ぎ馬より飛び下り、討ち刀をぬいて、薩摩守の右の腕を、臂の本よりふつと打ち落す。薩摩守今はかうとや思はれけん、暫し退け、最後の十念とぞなへんとて、六彌太を廻みて、弓丈ばかりぞ投げ退けらる。その後西に向ひ、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨との給ひもはてれば、六彌太うしろより、薩摩守の首をとる。よい首討ち奉りたりとは思へども、名をば誰とも知らざりけるが、箙に結ひ附けられたる文を、取りて見ければ、旅宿花といふ題にて、歌をぞ一首よまれたる。

行きくれてこの下かげを宿とせば花や今宵のあるじならまし　忠度

と書かれたりける故にこそ、薩摩守とは知りてけれ。やがて首をば太刀の先に貫き、高く指しあげ、大音聲をあげて、此日頃日本國に、鬼神と聞えさせ給ひたる薩摩守殿をば、武藏の國の住人、岡部の六彌太忠澄が討ち奉りたるぞや、と名乘りたりければ、敵も味方も是を聞きて、あないとほし、武藝にも歌道にも勝れて、よき大將軍にておはしつる人をとて、皆鎧の袖をぞぬらしける。

平家物語（敦盛最後の事）

さる程に、一の谷の軍敗れしかば、武藏の國の住人、熊谷の次郎直實、平家の公達、助船に乘らんとて、汀の方へ落ち行き給ふらん、あつぱれ好き大將軍に組まばやと思ひ、細道にかゝりて、汀の方へ歩まする所に、爰に練絹に鶴ぬひ

たる直垂に、萌木匂の鎧着て、鍬形打ちたる兜の緒をしめ、金づくりの太刀を佩き、二十四さしたる載生の矢負ひ、滋藤の弓持ち、連錢葦毛なる馬に金覆輪の鞍置きて、乘りたりける武者一騎、沖なゝ船を目にかけ海へ颯と打ち入り、五六反ばかりぞ泳がせける。熊谷あれはいかに、好き大將軍とこそ見參らせて候へ、まさなうも敵に後を見せ給ふものかな、返させ給へ〳〵と、扇を揚げて招ぎければ、招がれて取りてかへし、汀に打ち上らんとし給ふ所に、熊谷波打つ際にて押し並べ、むずと組みてどうと落ち、取りて抑へて首をかゝんとて、兜をおし仰けて見たりければ、源化粧して鐵漿黑なり。我子の小次郎の齡程して、十六七ばかりなるが、容顏まことに美麗なり。抑如何なる人にて渡らせ給ひ候ふやらん、名乘らせたまへ、助け參らせんと申しければ、先づかういふ和殿は誰ぞ、物その數にては候はれども、武藏國の住人、熊谷の次郎直實と名のり申す。さては汝がためには好いかたきぞ、名のらずとも首を取りて人に問へ見知らうずるぞと宣ひける。熊谷あつばれ大將軍や、此人一人討ち奉りたりとも、負くべき軍に勝つべきやうなし。又助け奉つるとも、勝つ軍に負くる事もよもあらじ。今朝一の谷にて、我子の小次郎が、薄手負ひたるなだにも、直實は心苦しく思ふに、此殿討たれ給ひぬと聞き給ひて、さこそは歎き悲み給はんずらめ。助け參らせんとて、後を顧みたりければ、土肥梶原五十騎ばかりにて出で來る。熊谷涙をはら〳〵と流して、あれ御覽候へ、いかにもして助け參らせんとは存じ候へども、味方の軍兵、雲霞の如くにみち〳〵て、よも通し參らせ候はじ。あはれ同じうは、直實が手にかけ奉りて、後の御孝養をも仕り候はんと申しければ、只何樣にも疾う〳〵首を取れとぞ宣ひける。熊谷餘にいとほしくて、何處に刀を立つべしとも覺えず。目もくれ心も消え果てゝ、前後不覺に覺えけれども、さてしもあるべき事なられば、泣く〳〵首をぞ掻きてける。あはれ弓矢取る身ほど、口惜しかりけることはなし、武藝の家に生れずば、何しに唯今かゝる憂き目を見るべき。情なうも討ち奉りたるものかなと、袖を顏に押しあてゝ、さめ〳〵とぞ泣き居たる。首を包まんとて、鎧直垂を解きて見ければ、錦の袋に入れられたりける笛をぞ、腰にさゝれたる。あないとほし、この曉城の内にて、管絃し給ひつるは、此人にておはしけり。當時味方に東國の勢何萬騎かあるらめども、軍の陣に笛もつ人はよもあらじ。上臈は猶もやさしかりけるものなとて、是を取りて、大將軍の御見參に入れたりければ、見る人涙を流しけり。後に聞けば修理大夫經盛の乙子、大夫敦盛とて、生年十七にぞなられける。それよりしてこそ、熊谷が發心の心は出で來にけれ。件の笛は祖父忠盛、笛の上手にて、鳥羽の院より下し給られたりしを、經盛相傳せられたりしを、敦盛笛の器量たるに依りて、持たれたりけるとかや、名をば小枝とぞ申しける。狂言綺語のことわりといひながら、遂に發佛生の因となるこそ哀れなれ。

重衡書を屋島に貽る

法皇、人をして重衡を諭さしめて曰く、「汝書を宗盛に貽り、神器を効さしめば、則汝が死を宥し、屋島に放ち還さん」と。對へて曰く、「臣の宗、世勳を王家に建てゝ、而して子孫卒に君に乘てらる、以て此に至るは命なり。勝敗は豈臣一人に關らんや。臣、不才にして纍囚と爲るに至る。假令、生きて還らしむるとも、將

【時子】重衡の母宗盛書を法皇に上る（千手前平重衡を慰むる圖）

（重盛と千手との圖）

何の面目ありて、宗族に見えんや。宗族も亦必臣を以て、神器に易るを肯せざるなり。然りと雖も、臣敢て敕を奉せずんばあらず」と。乃、書を作りて院宣使に從はしめ、屋島に至る。時子書を得て悲み泣き、之を聽さんと欲す。知盛、執りて不可なりとし、宗盛に敕へ、答表を作らしめて曰く、「謹みて宣旨を領す。通盛以下既に命を授く。重衡、豈獨生を欲せんや。神器の若きに至りては、須臾も聖体を離る可からざるなり。陛下尚貞盛、清盛の遺勳を思ひ給はゞ、則辱なく龍駕を枉げて、西州に臨幸せよ。臣等、護るに西南四道の兵を以て、以て亂賊を討たん。不らざれば、臣等三韓、契丹に赴くこと有らんのみ。命を奉ずる能はず」と。平時忠、院使を捕へ剸りて之を遣る。

重衡鎌倉に下る

法皇怒り、重衡を以て頼朝に附して、誅せしむ。頼朝之を鎌倉に檻致せしめ、延きて見る。梶原景時をして、命を將はしむ。來りて重衡の傍に跪く。重衡聽くを肯せず。遙に頼朝に語りて曰く、「重衡此に至るは命なり。公尚先人の德を記せば、則請ふ、速に死を賜へ」と。頼朝、乃之を狩野宗茂に屬し、湯沐を具へ、姫千手をして浴に侍し、因りて其欲する所を問はしむ。重衡、髮を削らんと欲す頼朝、許さず。因りて酒を饋り、千手及び工藤祐經を遣し、之を佐けしむ。祐經鼓を擊ち、千手琵琶を彈ず。重衡、杯を千手に屬し、朗吟して曰く、「燭は暗し數行虞氏の淚、夜は深し四面楚歌の聲」。頼朝、微行して、耳を戸外に側て、聞きてこれを憐む。更に名姫伊王を遣し、千手と更直せしむ。明年六月、南都の僧侶の請を以て、奈良坂に斬る。二女、髮を削り尼と爲ると云ふ。

平家物語（千手）

さる程に、兵衛の佐殿、三位の中將殿に對面して申されけるは、抑頼朝、君の御憤を休め奉り、父の耻を清めんと思ひたちし上は、平家を亡さんことは、案の内に存ぜしかども、正しくかやうに、御目にかゝるべしとはかけて存じ候は

す。この狀にては、屋島の大臣殿の見參にも入りぬべしと覺え候ふ。さても南都炎上のことは、故入道相國の御成敗にて候ひけるが、又時に取りての御計ひか、以の外の罪業にてこそ候ふめれ、と申されければ、三位の中將の給ひけるは、先づ南都炎上のことは、故入道相國の成敗にもあらず、又重衡が私の發議にても候はず、衆徒の惡行を鎭めんがために、謀り向ひて候ひし程に、不慮に伽藍の滅亡に及び候ひぬることは、力及ばざる次第なり。事新らしき申事にて候へども、昔は源平左右に爭ひて、朝家の御固たりしかども、近き比は、源氏の運傾きたりし事、人皆存知の旨なり。就中當家は保元平治より以來、度々朝敵を平げ、勳賞身にあまり、奈くも一天の君の御外戚として、父祖太政大臣にいたり、一族の昇進六十餘人、廿餘年がこのかたは、官加階天下に肩を雙ぶるものも候はず。それにつきては、帝王の御かたき討ちたるものは、七代まで朝恩盡きずと申すことは、極めたるひが事にてぞ候ひける。その故は、まのあたり故入道相國は、君の御爲に命を失はんとする事、度々に及ぶ。されども其身一代の幸にて、子孫かやうになるべきやは。運つき世亂れて後は、尸を山野にさらし、惡き名を四海の波に流さばやとこそ存ぜしに、生きながら捕はれて、是まで下るべしとはゆめ〳〵存じ候はず。只前世の宿業こそ口惜しく候へ。但殷湯は夏臺に捕はれ、文王は幽里に捕はるといふ文あり。上古猶此の如し。況や末代に於てをや。弓矢取る身の敵の手に渡りて、命を失はんこと、全く恥にて恥ならず。只報恩には疾く〳〵頭を刎ねらるべしとて、其後は物をもの給はず梶原是を承りて、あつぱれ大將軍やさて、涙をながす。侍どもゝ皆袖をぞぬらしける。兵衛の佐殿も、誠にあはれに思はれければ、抑平家を頼朝が私の讐とは、ゆめ〳〵思ひ奉らず。只帝王の仰こそ思ひ候へ。さりながらも、南都を亡されたる伽藍のかたきなれば、大衆定めて申す旨もやあらんずらんとて、伊豆の國の住人、狩野の介宗茂にぞ預けられける。その體冥土にて、娑婆世界の罪人を、七日々々の十王の手に渡さるらんも、かくやと覺えて哀れなり。されども狩野の介は情ある者にて、いたく殿しくも當り奉らず。やう〳〵にいたはり參らせ、剩湯殿のしつらひなどして、御湯引かせ奉る。中將道すがらの汗いぶせかりければ、身を清めて失はれんにこそと思ひて、待ち給ふところに、やゝありて年の齡二十ばかりなる女房の、色白く清げにて、髮のかかり眼に美しきが、めゆひの幡子に染附のゆきさして、湯殿の戸押しあけて參りたり。其跡に十四五ばかりなる女の童の、髮はあらめだけなりけるが、こむらごの幡子着て半挿盥に櫛入れて持ちて參りたり。此女房かいしやくにて、やゝ久しく御湯ひかせ奉り、髮洗などして、暇申し出でけるが、男などはこさなくもぞ思しめす女はなか〳〵苦しかるまじとて、鎌倉殿より參らせられて侍ふ。何事も思し召すことあらば、承りて申せとこそ、兵衛の佐殿は仰せ候ひつれ。中將今はかゝる身となりて、何事か思ふべき。只思ふ事とて、出家ぞしたきと宣へば、彼女房歸り參りて、兵衛の佐殿にこの由を申す。兵衛の佐殿、それ思ひよらず、私の讐ならばこそ、朝敵として預り奉りたれば、叶ふまじとぞの給ひける。かの女參りて、三位の中將殿に此由を申す。暇申して出でければ、中將守護の武士に宣ひけるは、さても只今の女房は、優なりつるものかな、名をば何といふやらんと問ひ給へば、狩野の介申しけるは、あれは手ごしの長者の女にて候ふがみめかたち心ざま優にわりなきものとて、此二三年は、佐殿に召し置かれて候

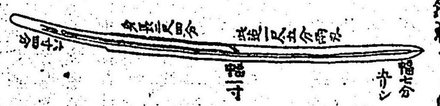
ふ、名なば千手の前と申し候ふとぞ申しける。其夕雨すこし降りて、萬物淋しげなるなりふし、件の女房、琵琶琴持ちて參りたり。狩野の介も、家の子郎黨十餘人引き具して、中將殿の御前近く候ひけるが、酒を勸め奉る。千手の前酌をとる。中將すこしうけて、いと興なげにておはしければ、狩野の介申しける は、且聞し召されてもや候ふらん。宗茂は本より伊豆の國の者にて候へば、鎌倉にては旅にて候へども、心の及ばんほどは、奉公仕り候ふべし。何事も思し召すことあらば、承りて申せと、兵衛の佐殿仰せ候ふ。それ何事にても申して酒をすゝめ奉り給へといひければ、千手の前、酌をさしおき、羅綺の重衣たるは、情なき事を機婦にれたむ、といふ則詠を、一兩返したりければ、三位の中將、此則詠をせん人をば、北野の天神、毎日三度かけりて守らんと誓はせ給ふとなり。されども重衡は、今生にてははや捨てられ奉りたる身なれば、しよゐんしても何かせん。但さいしやうかる見ぬべきことならば、從ふべしとの給へば、千手の前、やがて十悪といふとも猶引攝す、といふ則詠をして、樂願はん人は、皆彌陀の名號を唱ふべしといふ。今樣を四五返誦ひすましたりければ其時中將杯を傾けらる。千手の前たまはりて、狩野の介にさす。宗茂が飲む時に琴をぞ引きすましたる。三位中將、普通には此樂をば五常樂といへども、今重衡がためには、後生樂とこそ覺すべけれ。やがてわうじやうのきうを彈かんとたはむれ、琵琶を取り、てんじゆをねぢて、わうじやうのきうをぞ彈かれける。かくて夜もやうやう更け、萬心のすむまゝに、あな思はずや吾妻にもかゝる優なる人のありけるよ。それ何事にても、今一曲との給へば、千手の前、重れて一樹の蔭に宿りあひ、同じ流をむすぶも、皆是先生の契といふ白拍子を、

誠に面白くかぞへたりければ、三位の中將、燈暗くして數行虞氏が淚、といふ則詠をぞせられける。譬へばこの則詠の心は、昔唐土に、漢の高祖と楚の項羽と位を爭ひ、合戰すること七十二度、戰毎に項羽勝ちぬ。されども遂には、項羽戰負けて亡びし時、雖といふ馬の、一日に千里をとぶに乘りて、虞氏といふ后と共に逃げ去らんとし給へば、馬いかゞ思ひけん、足を整へて働かず。項羽淚を流して、我威勢既にすたれたり、敵の襲ふは事の數ならず、只この后に分れんことをのみ、歎き悲み給ひけり。燈暗くなりしかば、虞氏心細さに淚を流す。更け行くまゝには、軍兵四面にときをつくる。此心を橘相公の詩に作るを三位の中將今思ひ出で、口すさみ給ふにやいとやさしくぞ聞えし。さる程に夜も明けゝれば、狩野の介は暇申して罷り出づ。千手の前も歸りけり。其朝兵衛の佐殿は、持佛堂に法華經讀みておはしける所へ、千手の前歸り參りたり。兵衛の佐殿打ち笑み給ひて、さても夕中人をば面白くしつるものかなと宣へば、齊院の次郎親能、御前に物書きて候ひけるが、何事にて候ふやらんと申しければ、佐殿宣ひけるは、平家の人々は、この二三箇年は、軍合戰のいとなみの外は、又他事あるまじきとこそ思ひしに、さても三位の中將の琵琶の撥音、則詠の口すさみ、夜もすがら立ち聞きつるに、優にやさしき人にておはしけりと宣へば、親能申しけるは、誰も夕承りたく候ひしかども、折節あひいたはる事の候ひて、承らず候ふ。此後は常に立ち聞き候ふべし。平家は、代々歌人才人達にて渡らせ給ひ候ふ。先年あの人々を花に譬へて候ひしには、此三位の中將殿をば、牡丹の花に譬へて候ひしかとぞ申しける。三位の中將の琵琶の撥音、則詠の口すさみ、兵衛の佐殿、後までもありがたき事にぞ宣ひける。其後中將南

都へ渡されて、斬られ給ひぬと聞えしかば、千手の前は、中々思ひの種とやなりにけん、やがてさまをかへ、濃き墨染にやつれはてゝ、信濃の國善光寺に行ひすまして、彼後世菩提をとぶらひけるぞ哀れなる。

初め重衡の虜となり、京師に入りしとき、維盛の妻孥、京師に在りて、三位中將虜せらるゝと聞きて、其維盛なりと意ふや、僕をして之を視しめしに、非らず。然れども師盛の首を見て、則憂恐す。維盛、屋島に在りて、亦家を懷ひて措かず。

（小島の圖）
【先君】重盛
維盛熊野に死す
【内府維盛を疑ふ】父重盛嘗て頼朝を敵す、故を以て吾も亦頼朝に貳心あるかと疑はる
【頼盛】志源氏に嚮ふ
小島、拔丸
頼盛



是歲三月、間に出でゝ、京師に之きしに、途梗りて達せられず。是に於て高野山に赴き、偶、其舊臣の僧と爲れる者に値ひ、之に語るに情を以てせり。曰く、「先君、嘗て頼朝に德せり。内府故を以て猜疑し、吾を頼盛に比す。吾れ故に遁れて此に至る。一たび熊野の祠に詣で、水に赴きて死なんと欲す」と。乃、與に俱に詣で、那智の海に投じて死す。豫、隷人に命じ、還りて資盛に告げしめて曰く、「唐皮の甲、小烏の刀、貞能の許にあり。公宜しく之を取るべし。萬一、事平がば、幸に之を我が兒に傳へよ」と。初め平氏、小烏、拔圓の二刀あり。例に嫡長に傳ふ。忠盛に至りて、小烏を清盛に傳へ、拔圓を頼盛に傳ふ。二家是より相惡めり。頼盛、時に京師にあり。是歲五月、頼朝、書を以て之を召す。且曰く、必宗清を携へよと。頼盛即東に行く。宗清從ふを肯せず。曰く、「臣禍福を辨せざるに非す。獨、西海の諸公舊僚に愧ざらんや」と。乃頼盛を送りて、近江に至り、辭して西し、來りて屋島に至る。

三日平氏

是月、貞能の弟貞繼、兵を伊賀に起し、平氏に應じ、二百人を集め、襲ひて州の守護大内惟能を破り、遂に近江に入り、源秀義と戰ひて之を斬る。已にして惟能に敗られ、之に死す。世呼びて三日平氏と曰ふ。

兒島戰

平氏、山陽道を復せんと欲し、九日、行盛、兵二千を以て兒島に屯す。範頼十萬騎を以て來り攻む。我が軍敗れ還る。宗盛以下、日々悒々として樂まず。知盛曰く、「吾れ嚮に京師を守らんと欲すれども、公等從はず。今終に如何」と。宗盛、以て應ふることなし。

明年春、知盛、長門の引島に城きて、門司關を扼す。又兵を遣し、擊ちて土肥實平を備前に破り、兒島を復す。又擊ちて河野通信を破り、其族黨百六十人を斬り、首を屋島に効す。宗盛之を檢す。

屋島戰

時に源義經、阿波より來り攻むと聞く。而れども未だ確報を得ず。明日、高松里

【高松里】讃岐

に火起るを望む。田口成能曰く、「敵來り襲ふなり。請ふ、急に舟に御せよ。將士をして陸に拒がしめん」と。之に從ふ。義經果して襲ひ至る。我が兵、能く拒ぐ。義經火を行在に縱つ。我が兵盡く舟に上り、海陸交射る。景清、岸に上りて戰ひを挑む。美尾屋十郎と云ふ者、來り鬪ひて走る。景清追ひて其鋌を攫む。鋌斷ゆ之を薙刀に掛け、狩て呼びて曰く、「吾は景清なり。蓋ぞ來りて決せざる」と。敵敢て近づくものなし。我が兵疲ぎて上り、大に戰ひ、伴り卻きて舟に上り、以て義經を餐致す。幾ど獲へんとして之を逸す。宗盛、敎盛を召して曰く、「我が兵數、義經を逸す。義經の兵數百騎に過ぎざるのみ。公の一戰を煩はさん」と。敎經、乃盛嗣、景清等三十人と、陸に迫りて射る。敎經、强弓、長箭、射て敵の精騎數十人を殺し、日暮に會ふ。義經軍を高松に退く。敎經八島に軍し、夜源氏を襲はんと欲す。盛嗣、江見盛方と先を爭ひ、曉に徹するまで襲ふを果さず。天明に、義經七千騎を以て來り攻む。我が三十人步行して、短兵を持して接戰す。敵騎披靡す。敎經、因りて之を射る。戰ひ遂に利あらず。遂に舟に上りて退く。熊野湛增、河野通信、盡く源氏に屬す。源氏の軍、日に盛なり。平氏、乘輿を奉じて志度に避く。義經、復來り攻む。乃、退きて引島を保つ。已にして、長門、周防、

美尾屋景清

敎經

悉く源氏に應ず。乃、箱崎に赴く。範頼、大衆を以て豐後に在りと聞きて、則旋りて塩浦に泊す。

【塩浦】長門

塩浦戰

源氏の軍、海陸に充塞す。兵艦三千、四面より來り攻む。我れ五百艘あり。知盛船首に立ちて、諸將士に謂て曰く、「勝敗の決、今日にあり。汝が輩、進みて死する有れ。退きて生くるなかれ。心を一にして力を戮せ。必義經を獲て而しで後已まん」と。景清、盛嗣等、爭ひて決戰せんことを願ふ。田口成能、潛に欵を敵に通ず。知盛、宗盛に謂て曰く、「士氣奮へり。獨成能疑ふべし。請ふ、斬りて以て徇へん」と。聽さず。固く請ふ。宗盛、乃、成能を召して之を勗めしむ。成能、唯々す。知盛、刀を握り宗盛に目す、宗盛、終に斷ずる能はず。已にして大に戒ふ。我が兵奮擊す。東軍數郤く。成能、義經に降り、之に告げて曰く、「平氏帝を兵船に徙し、兵を帝船に徙す。敵を誘ひて夾みて、之を擊たんと欲す」と。義經、乘輿の在る所を知りて、軍を合せて疾く攻む。知盛、乃、帝船に赴く。諸嬪迎へて狀を問ふ。知盛、大に笑ひ、答へて曰く、「卿等當に東國の男子を睹るべきのみ」と。一船皆哭く。知盛手づから船中を掃除し、盡く汚穢の物を棄つ。時子、乃、帝を抱きて相約するに帶を以てし、劒璽を挾み、出でゝ船首に立つ。帝時に

田口成能

安德天皇崩御

八歳なり。時子に問ひて曰く、「安に之くか」と。時子曰く、「虜、矢を御船に集む。故に將に他に徙らんとす」と。遂に與に俱に海に投じて死す。皇太后、繼で投ず。東兵、其髮に鈎して之を獲たり。行盛、有盛、之を聞きて、皆力戰して死す。教經、驍名素より著る。敵爭ひ之を獲んと欲す。教經、殊死して戰ふ。敵を殺す數なし。知盛、呼びて曰く、「公盍ぞ早く自計を爲さゞる。多く雜兵を殺すと爲すなかれ」と。教經曰く、「中納言、吾れ義經と死を決せんと欲するのみ」と。乃、進みて義經を索む。卒に之と遇ふ。教經、冑を免ぎ、鎧袖を撤し、躍りて其船に入る。敵兵遮り鬪ふ。輙搏ちて之を仆し、直に義經に逼る。敵中、安藝家村といふ者あり。力三十人を兼ぬ。二力士を率ゐて、進みて教經に當る。教經蹴りて其一人を仆し、二人を挾みて、海に投じて死す。宗盛、清宗と自裁する能はず。從士之を海に擠す。泗ぎて遁る。敵兵鈎して之を獲たり。藤原景經は、景清の從弟なり。之を見て曰く、「奴輩、敢て吾が君を辱かしむるか」と。進みて一人を斬り、箭に中りて死す。知盛聞きて切齒する久くして曰く、「吾れ以て死す可し」と。教盛と皆自殺す。平家長等八人之に殉す。時に壽永二年、三月廿四日なり。經盛、資盛、皆遁る、已にして自殺す。

知盛

壽永二年三月廿四日平氏滅ぶ

平家物語（壇の浦合戰の事）

さる程に、判官屋島の軍に打ち勝ちて、周防の地へ押しわたり、兄の三河の守と一つになる。平家は長門の國引島につくと聞えしかば、源氏も同じ國の內、追津につくこそ不思議なれ。こゝに紀伊の國の住人、熊野の別當湛增は、平家重恩の身なりしが、忽に心がはりして、平家へや參らん、源氏へや參らんと思ひけるが、先づ田邊の新熊野に七日參籠し、御神樂を奏して、權現へ祈請申しければ、只白旗につけとの御託宣ありしかども、猶疑をなし參らせて、白き雞七つ、赤き雞七つ、是を以て權現の御前にて勝負をさせけるに、赤き雞一つも勝たず。皆負けてぞ逃げにける。さてこそ源氏へ參らんとは思ひ定めけれ。

さる程に、一門の者ども相催し、都合其勢二千餘人、二百餘艘の兵船に取り乘り、若王子の御正体を船に載せ參らせ、旗の横紙には、金剛童子を書き奉りて、壇の浦へ寄するを見て、源氏も平家も共に拜し奉る。されども此船源氏の方へゆきければ、平家興さめてぞ見られける。又伊豫の國の住人、河野の四郎通信も、百五十餘艘の大船に乘り連れて漕ぎ來り、是も同じく源氏の方へ附きければ、平家いとゞ興さめてぞ思はれける。源氏の勢は重れば、平家は落ち勢行く。源氏の船は三千餘艘、平家の船は千餘艘、たうせん少々相交れり。元暦二年三月廿四日の卯の刻に、豐前の國田の浦門司の關、長門の國壇の浦赤馬が關にて、源平の矢合とぞ定めける。其日判官と梶原と、既に同士軍せんとす。梶原進み出て、今日の先陣をば、景時に給へ候へかし。判官義經がなくばこそと宣へば、梶原まさなく候ふ、殿は大將軍にてまし〳〵候ふものを、と申しければ、判官それ思ひも寄らず、鎌倉殿こそ大將軍よ、義經は軍奉行を承りたる

身なれば、只和殿原と同じことよ、とぞ宣ひける。梶原先陣を所望しかれて、天性此殿は侍の主にはなり難しとぞつぶやきける。判官、和殿は日本一の嗚呼のものかなとて、太刀の柄に手をかけ給へば、梶原こはいかに、鎌倉殿より外別に主をば持ち奉らぬものとて、是も同じく、太刀の柄に手をぞかけゝる。父が氣色を見て、嫡子の源太景季、次男平次景高、同じき三郎景家、親子主從十四五人うち物の鞘をはづして、父と一所に寄りあひたり。判官の景色を見奉りて、伊勢の三郎義盛、奥州の佐藤四郎兵衛忠信、江田の源三熊井太郎、武蔵坊弁慶などいふ、一人當千の兵ども、梶原を中に取りこめて、我討ち取らんとぞ進みける。されども判官には、三浦の介とりつき奉り、梶原には、土肥の次郎つかみつきて、兩人手をすりて申しけるは、是程御大事を前に抱へながら、同士軍したまひなば、平家に勢附き候ひなんず。且は鎌倉殿の返り聞し召されんずる所も穏便ならずと申しければ、判官靜り給ひぬ。梶原進むに及ばず。それよりして梶原判官を憎み初め奉りて、讒言して終に失ひ奉りたりしとぞ。後には聞えし。さる程に源平兩方陣をあはす。陣のあはひ海の面、纔に三十餘町をぞ隔てたる。門司、赤間、壇の浦は、たぎりて落つるしほなれば、平家の船け心ならず。潮に向ひて押し落さる。源氏の船は、おのづから潮に迫ひてぞ出できたる。沖は潮の早ければ、汀につきて、梶原敵の船の行き遠ふか、熊手に懸けて引き寄せ、乘り移り〳〵親子主從十四五人、打物の鞘をはづして、縦べに散々に薙ぎて廻り、分捕數多して、その日の功名の一の筆にぞつきにける。

平家物語（先帝御入水の事）

判官、是は八幡大菩薩の現じ給へるにこそと悦びて、甲をぬぎ、洗手洗口して

これを拜し奉り給ふ。兵どもゝ皆此の如し。又沖よりいろかといふ魚一二千ばひて、平家の船の方へぞ向ひける。大臣殿、小博士晴信を召して、いろかは常に多けれども、未かやうのことなし。吃度考へ申せと宣へば、このいろか、はみかへり候はゞ、源氏亡び候ひなんず。はみ通り候はゞ味方の御軍危く覺え候ふ、と申すもはてぬに、平家の船の下を、すぐにはひてぞ通りける。世の中は今はかくとぞ見えし。阿波の民部重能は此三箇年が間、平家に附きて忠を致したりしかども、子息田内左衛門教能を生捕にせられて、今は叶はじとや思ひけん、忽に心がはりして、源氏と一つになりにけり。新中納言知盛の卿、あつばれ重能めを、斬りて捨つべかりつるものをと、後悔せられけれども、かひぞなき。平家の方の謀には、よき武者をば兵船に乘せ、雜人原をば唐船に乘せて、源氏心にくさに、唐船を攻めば、中に乘りこめて討たんと、支度せられたりしかども、重能が反忠の上は、唐船には目もかけず、大將軍のやつし乘り給へる兵船をぞ攻めたりける。其後は四國餓四の兵ども、皆平家を背きて源氏につく今まで從ひ附きたりしかども、君に向ひて弓を引き、主に對して太刀をぬく。かしこの岸に着かんとすれば、波高くして叶ひがたし。こゝの汀に寄せんとすれば、敵矢先を揃へて待ちかけたり。源平の國爭ひ、今日を限とぞ見えたりける。さる程に、源氏の兵ども、平家の船に乘り移りければ、水主梶取ども、或は射殺され、或は切り殺されて、船をなほすに及ばず、船底に皆倒れ伏しにけり。新中納言知盛の卿、小船に乘りて、急ぎ御所の御船へ參らせ給ひて、世の中は今はかくと覺え候ふ。見苦しき者どもをば、皆海へ入れて、船の掃除めされ候へとて、掃きたり、拭ひたり、塵ひろひ、舳艫に走り廻りて、手づから掃

除し給ひけり。女房達、やゝ中納言殿、軍のさまは如何にや、如何にと問ひ給へば、只今珍しき吾妻男なこそ、御覽ぜられ候はんずらめとて、から〳〵と笑はれければ、何條只今の戯ぞやとて、聲々になめき叫び給ひけり。二位殿は、日比より思ひ設け給へることなれば、鈍色の二ぎぬ打ちかづき、れり袴のそば高くとり、神璽を脇に挾み、寶劍をば腰にさし、主上を抱き參らせて、我は女なりとも、敵の手にはかゝるまじ、主上の御供に參るなり、御志思ひたまはん人々は、急ぎつゞき給へやとて、しづ〳〵と舟へぞ歩み出でられける。主上今年は、八歳にぞならせおはします。御年の程より遙にれびさせ給ひて、御かたちいつくしく、傍も照り輝くばかりなり。御髮黑くゆら〳〵と、御背中過ぎさせ給ひけり。主上あきれたる御有樣にて、そも〳〵あまさ、我をば何地へ具して行かんとはするぞ、と仰せければ、二位殿幼き君に向ひ參らせ、涙をはら〳〵と流して、君は未知し召され候はずや、先世の十善戒行の御力によりて、今万乘の主とは生れさせ給へども、惡緣に引かれて、御運既に盡きさせ給ひ候ひぬ。先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮に御暇申させおはしまし、其後西に向はせ給ひて西方淨土の來迎に預らんと、誓はせおはしまして、御念佛候ふべし。此國はそくさんへんどゝ申して、物憂き境にて候ふ。あの波の上にこそ、極樂淨土とてめでたき都の候ふ。それへ具し參らせ候ふぞと、樣々に慰め參らせしかば、山鳩色の御衣にびんづら結はせ給ひて、御涙におぼれ、小く美しき御手を合せ、先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮、正八幡宮に御暇申させおはしまし其後西に向はせ給ひて、御念佛ありしかば、二位殿やがて抱き參らせて、波の底にも都のさふらふぞ、と慰め參らせて、千尋の底にぞ沈み給ふ。悲しきかな

や、無常の春の風、忽に花の御姿を散らし、いたましきかな、ぶんだんの荒き浪、玉體を沈め奉る。殿をば長生と名づけて、長きすみかと定め、門をば不老と號して、老いせぬ關とは書きたれども、未十歳のうちにして、底の水屑とならせおはします、十善帝位の御果報、申すも中々愚なり。雲上の龍下りて、海底の魚となり給ふ。大梵高臺の閣の上、しやくだいきけんの宮の中、古は槐門棘路の間に、きうそくをなびかし、今は船の内波の下にて、御身を一時に亡し給ふこそ悲しけれ。

平家物語（能登殿最後の事）

女院は、此有樣を見參らせ給ひて、今はかくとや思し召されけん、御硯御やき石、左右の御懷に入れて、海に入らせ給ふを、渡邊の源五右馬允昵、小舟をつと漕ぎ寄せて、御ぐしを熊手にかけて引き上げ奉る。大納言の佐の局、あなあさまし、それは女院にて渡らせ給ふぞ、過仕るなと申されたりければ、判官に申して、急ぎ御所の御舟にうつし奉る。さて大納言の佐の局は、内侍所の御からうどを取りて、海に入らんとし給ひけるが、袴の腰を舟に射つけられて、氣惡ひ仆れ給ひけるを、武士共取り止め奉る。その後、御からうどの錠をれぢ切りて、御壺を既に開かんとす。忽に目くれ、鼻血たる。平大納言時忠の卿は、生捕にせられておはしけるが、あはれいかに、内侍所にて渡らせ給ふぞ、凡夫は見奉らぬことぞと宣へば、兵ども舌を振りて、恐れをのゝく。其後判官時忠の卿に申し合せて、元の如くからげ納め奉らる。さる程に、門脇の平中納言教盛、修理の大夫經盛兄弟、手に手を取り組み、鎧の上に錨を負ひて、海にぞ沈み給ひける。小松新三位の中將資盛、同じき少輔有盛、從弟の左馬の頭行盛も

手に手を取り組み、是も鎧の上に鎧を頂ひて、一所に海にぞ入り給ふ。人々はかやうにし給へども、大臣殿父子はさもし給はず、舷に立ち、四方見廻しておはしければ、平家の侍ども、あまりの心憂さに、側をつと走り通るやうにて、先づ大臣殿を海へかばと突き入れ奉る、是を見て右衛門の督、やがて續きて飛び入り給ひぬ。人々は鎧の上に、重き物を頂ひたり、抱きたりして入ればこそ沈め。此人親子はさもし給はず、なまじひに水練の上手にておはしければ、大臣殿は、右衛門の督沈まば我も沈まん、助からば我も共に助からんと思ひ、互に目を見かはして、彼方此方へ泳ぎありき給ひけるを、伊勢の三郎義盛、小舟をつと漕ぎ寄せて先づ右衛門の督を、熊手にかけて引き上げ奉る。大臣殿いとど沈みもやり給はざりしを一所に取り上げ奉りてけり。乳母子の飛脚の三郎左衛門景經、此由を見奉りて我君取り奉るは何者ぞとて、小舟に乗り、義盛が船に押し並べて乗り移り、太刀を抜きて打ちてかゝる。義盛あぶなく見えける所に、義盛が童、主を討たせじと中に隔り、三郎左衛門に打ちてかゝる。三郎左衛門が打つ太刀に、義盛が童甲の眞向打ち割れて、二の太刀に頭打ちおとさる。義盛が猶危く見えけるを、隣の船より畑の彌太郎親經、能く引きてひやうと放つ。三郎左衛門、内甲を射させてひるむ所に、畑の彌太郎義盛が船に乗り移り、三郎左衛門に組みて伏す。畑が郎等やがて續きて乗りうつり、三郎左衛門が腰の刀をぬき、鎧の草摺引き上げてつかむ、拳も通れ〳〵と、三刀刺して頸を取り、大臣殿は、乳母子が目の前にて、かやうになるを見給ひて、如何ばかりの事をか思はれけん。凡能登殿の矢先に廻る者こそなかりけれ。敎經は今日を最期とや思はれけん、赤地の錦の直垂に唐綾縅の鎧きて、鍬形打ちたる甲の緒をしめ、いか物作の太刀を佩き、二十四さしたるきりふの矢頂ひ、滋藤の弓持ちて、さしつめ引きつめ散々に射給へば、者ども多く手負ひ射殺さる。矢種皆盡きければ、黒漆の大太刀、白柄の大薙刀、左右に持ちて、散々に薙ぎて廻り給ふ。新中納言知盛の卿、能登のもとへ使者を立てゝ、いたく罪なつくり給ひそ。さりとてはよき敵かはと宣へば、能登殿、さては大將に組み、ござんなれとて、打物くき短にとり、ともへに散々になぎ廻り給ふ。されども判官を見知り給はれば、物具の能き武士たれば判官かと目をかけて、飛びてかゝる。判官も、内々面に立つ樣にはし給へども、とかくちがへて能登殿には組まれず。されどいかゞはし給ひたりけん、判官の船に乗りあたり、あはやと目を懸けて跳びてかゝる。判官叶はじとや思はれけん、薙刀をば弓手の脇にかい挾み、味方の船の二丈ばかりのきたりけるに、ゆらりと飛び乗り給ひぬ。能登殿早業や劣られたりけん、續きても飛び給はず。能登殿今はかくとや思はれけん、太刀薙刀をも海へ投げ入れ、甲も脱ぎて捨てられけり。鎧の袖草摺をもかなぐり捨て、胴ばかりきて、大童になり、大手を廣げて、船のやかたに立ち出で、大音聲をあげて、源氏の方に我と思はん者あらば、寄りて敎經組みて生捕にせよ。鎌倉へ下り、兵衛の佐に物一言いはんと思ふなり。寄れや寄れと宣へども、寄る者一人もなかりけり。こゝに土佐の國の住人、安藝の郷を知行しける、安藝の大領實康が子に、安藝の太郎實光とて、凡二三十人が力あらはれたる大力の剛の者、我にちつとも劣らぬ郎等一人具したりけり。弟の次郎も、普通には勝れたる兵なり。彼三人寄り合ひて、經今能登殿心こそ剛におはすとも何程のことかあるべき。長十丈の鬼なりとも、我等三人が摑みつきたらんに、などか從

へざるべきとて、小舟に乘り、能登殿の船に押し並べて、乘り移り、太刀の鋒を整へて、一面に打ちてかゝる。能登殿是を見給ひて、先づ眞先に進みたる安藝の太郎が郎等に、組み合せて、海へどうと飛入れ給ふ。續きてかゝる安藝の太郎をば、弓手の脇にかい挾み、弟の次郎をば馬手の脇に取りて挾み、一しめしめて、いざそれ、己等死出の山の供せよとて、生年二十六にて、海へつゝぶとぞ入り給ふ。

【篠原】近江宗盛捕さる

宗盛父子、皇弟、皇太后、平時忠以下と、義經に從ひて東す。命ありて、宗盛以下を京師に徇ふ。宗盛、輿中より四望す。清宗、仰ぎ視す。既に罷む。皆義經の第に拘す。宗盛、衣を解かず。寢るに袖を以て清宗を庇ふ。守兵見て之を憫む。五月、鎌倉に送る。頼朝之を前舍に延き、庭を隔てゝ相見る。命を將ふ者至る。宗盛、悚然として死を宥されんことを請ふ。頼朝、魚を俎に措き、刀を加へて之を示し、諷して自殺せしめんとす。宗盛、其意を曉らず。又送りて京師に還す。篠原に至り、父子別に拘す。將に殺されんとするを知るや、乃僧を請ひて佛を稱して曰く、「吾、壇浦に死せざるは、清宗あるを以ての故のみ」と。是に於て皆斬らる。宗盛、次子あり。副將と曰ふ。先に京師に斬らる。初め壇浦の敗に、時子衆に謂て曰く、「宗盛は故相國の子に非ず。吾の再姙するや、相國其男を生むを期す。而して女生まる。吾れ相國の恨怒を恐れ、密かに人をして之を一傘工の男兒に易へしむ。宜なるかな、其重盛に若かずして、以て此に至る」と。宗盛既に死し、時忠等、皆流に處す。

義經平氏殘黨

時に義經、頼朝と隙あり。逃れて西海に奔る。頼朝其平氏の遺黨と相依託して、亂を作さんことを恐るゝや、北條時政を京師に遣し、平氏の胤子の所在に伏匿する者を購ひ索めしめ、幼孩は之を生ながら埋め、稍長ずる者は之を刃す。其母若くは保、往々隨ひて死す。啼哭四に聞ゆ。維盛の子を六代と曰ふ。其母に依りて大覺寺の側に匿れ、人に告げられて斬に當る。其乳母、僧文覺に因りて宥を請ふ。頼朝、素より文覺を重んず。且重盛の已れに德するを思ふや、特に之を宥す。髮を削りて文覺の弟子と爲る。文覺不軌を圖るに及びて六代も坐せられて死す。

六代

忠房

初め維盛の弟忠房、壇浦を遁れて紀伊に匿る。知盛の次子知忠、族人の西奔する時に當りて、甫めて三歲なり。乳母の子紀友方携へて備後に匿れ、後伊賀に徙る。平氏の舊臣藤原忠清、宗盛に先だつこと一年にして捕斬せらる。平貞能、髮を削り、重盛の骨を奉じて、常陸に隱る。忠清の二子忠光、景清は、平盛嗣等と各所に潛匿す。後八年、鎌倉土木の事あり。頼朝臨む。忠光役徒に雜はり、頼朝

忠光

を刺さんと欲す。魚鱗を眼に嵌して、以て眇と爲り、巻を荷ひて出入す。頼朝、見て怪しみ、之を執ふれば、利刀を懷にせり。曰く、「平氏の臣忠光なり。故主のために仇を復せんと欲す」と。其黨を究問す。曰く、「獨盛嗣あるあり。聞く前に丹波にあり。今何に之けるを知らず」と。復言はず。食飲を絶つこと、月餘にして死す。頼朝大に天下に索むれども、獲る所なし。

盛嗣

後五年、知忠、伊賀より還りて京師に入り、法性寺の側に匿る。盛嗣、景清之を聞きて皆至る。諸舊臣稍來り屬し、頼朝の妹婿前原能保を襲はんと謀る。能保之を覺り、兵をして圍み攻めしむ。我が兵二十餘人亂射し、敵を殺して死す。知忠友方と俱に自殺す。盛嗣、景清、遁れ走り、忠房紀伊に在りと聞き、往きて之に歸し、兵を擧げて湯淺城に據る。熊野別當に攻め破られ、忠房捕殺せられ、盛嗣、景清、又遁る。

景清

頼朝、東大寺に慶するに會ふ。景清、衆中に雜れて、これを刺さんと欲す。事覺れて捕へらる。これを和田義盛に屬す。義盛、其不遜を苦しみ、之を辭す。乃、八田知家に屬す。景清、終に食はずして死す。盛嗣、姓名を變じ、但馬の人氣比道廣に仕へ、其厩卒となる。因りて其女に通ず。馬に浴する毎に馳射の狀を爲す。道廣其の盛嗣なるを知れども問はず。既にして道廣に隨ひて京師に如き、故の妾家に遊ぶ。妾家之を源氏に告ぐ。乃、道廣をして之を捕へしむ。道廣、力士數人を遣し、其浴するを候ひて之を圍む。盛嗣、罵りて曰く、「奴輩、吾遁れんと欲せば、即遁れん。而れども主人を累はすを欲せず」と。出でて縛に就く。頼朝之を面讓して曰く、「盍ぞ旗浦に死せざる」と。對へて曰く、「平氏の胤を擁して、以て舊業を復せんと欲するのみ」と。又問ひて曰く、「汝義盛に依ると聞く、諸ありや」と。盛嗣曰く、「否らず。嚮に京に在りしとき、判官を圖りて遂げず、爾來頗る利刃鋭鏃を儲けて、一たび之を將軍の身に試みんと欲するのみ」と。遂に斬らる。

平氏の評

外史氏曰く。我が先王の、國を開き給ひしより、僭亂の臣なきに非ざるなり。而れども未だ社稷を危くせんことを謀りし者有らず。獨一の將門ありて、しかも平氏より出づ。豈其宗の大耻に非ずや。然れども能く之を討滅する者も、亦平氏より出でたれば。以て相償ふに足れり。且、將門、一たび誅に伏せしより、後世復神器を覬覦する者なし。彼れ其身を以て、天下の大戒を標せんと謂ふべきなり。

天慶の亂の源因

抑々將門をして一檢非違使を得しめば、則未だ必しも甘じて反賊とならじ。故に天慶の亂は、皆相門驕傲にして、上下を壅塞せしが致す所なり。其事なきに當りては、朝廷の名爵を私門に籠めて、人の職を失ふを恤へず。其急なるに及びては、乃、遽に朱紫を揭げ、天下に呼號し、天下の英雄をして、以て朝廷を窺ふこと有らしむ。後世源平爭ひ起り、功を以て其上に邀ふ者は焉ぞ其此に基かざるを知らんや。

源平興起の原因

清盛の評

【相家】藤原氏清盛藤原に擧ぶ

【詩】小雅、裳裳者華の篇

世、清盛の功は其罪を償はずと稱し、不臣の者を擧ぐれば、輙、以て稱首とす。而して相家の不臣なるは、已に清盛に什倍するを知らず。清盛は蓋し視てこれを學びしのみ。否らざれば則何ぞ遽に此に至らんや。詩に曰く、『唯其れ之あり、是を以て之を似す』と。

相門の權を專にしてより、后は皆其女、天子は皆其女の生みし所。而して卿相は皆其子弟親屬なり。苟も其族類に非ざれば、鋤して之を去る。皇族と雖も免るゝこと能はず。甚しきは則其主を易へ置くこと。猶奕棊を視るが如し。清盛の爲す所、一として彼の己氏に似ざる者なし。而して加ふるに驚悍を以てす。其意に曰く、「無功の人を以て猶權寵を擅にせしこと此の如し。吾れの王室に大造ある、

【師】藤原氏後白河天皇清盛の勢を養成す

何をしてか不可ならん」と。世、其拔與の漸無きを以て、群起して之を咎む。而れども之が師と爲る者有るを言はず。』且、清盛の此に至る所以は、後白河帝の其勢を養成せしに由るのみ。夫れ名爵、公器は、私に用ゐる可からず。人臣にして名爵を私するは、是れ其君に負くなり。人君にして名爵を私するは、是れ其先王に負くなり。帝、先王の名爵を清盛に濫授し、藉りて以て其私を濟す。而して其功を負み、上に邀ふの心を長じ、制す可らざるに至る。將誰を咎めんや。然りと雖も平氏の勢を成すものは、獨、帝に始まりしにあらざるなり。初め忠盛、寵を白河、鳥羽に受け、遂に官爵を進む。人以て不次と爲す。蓋し朝廷其力に倚りて以て源氏を抑へぬ、源氏を抑へたるは、相家の權を殺ぎし所以なり。源氏、滿仲頼光より、每に相門の爪牙たり。攝政兼家の花山を騙しゝや、源頼信、實に道途を捍衛せり。降りて文治の際に至りて、朝廷、關白兼實の源頼朝を助けしを疑ひしも、亦其世相黨援せしを以てせしに非ずや。是に由りて之を觀れば、平宗を延きて以て相門に抗せしめしは、院政國論の相傳承する所、其れ猶寛平の菅氏を擢任せしが如きか。文武異なりと雖も、其意は一なり。嘗公の賢を以てして、猶權を懲ふ意なき能はず。平氏は、重盛を除くの外、皆不學無術なり。其功に矜り、

平氏の力を以て源氏を抑へ藤原氏の權を殺ぐ

寵を擅にし、進みて止るを知らざるも、曷ぞ尤むるに足らんや。

源平二氏の評論

假設ば、重盛、父に後れて死し、盡く其爲す所を反して、子弟を戒飭し、王室を輔翼せば、則藤原氏に踵を接ぎ、隆を比すと雖も可ならん。而れば源氏、何に資りて以て起らんや。源氏名は暴亂を治むと爲して、其實は王權を攘竊せしなり。源平の罪、未だ輕重し易からざるなり。且夫れ源氏の猜忍にして、骨肉相食む、平氏の闔門、死に至るまで、懿親を失はざりしに比して、孰與ぞや。

世、平語を傳へ、琵琶に倚せて之を演ず。其音悲壯感憤にして、聽く者悽愴せざるは莫し。余嘗て西、長門に遊びて、壇浦を過ぎ、平氏覆滅の所を觀き。又肥後に抵りて、其州に五家山あり。山谷深阻、平氏或は竄匿し、子孫今に至りて猶存する者あり。外人と交通せずと聞きぬ。夫れ平氏の王家に於る功罪相償へり。天必しも其後を勦絶せざれば、則是れ其れ或ひは然らん。

外史氏曰く。王權の武門に移りしは、平氏より始まり、源氏に成れり。而して之を基しゝものは藤原氏なり。故に略王室、相家の系統を叙でゝ以て參觀に備へん。

【神祖】神武帝
【大友】弘文

蓋し神祖より後三十九世を、天智と曰ふ。是を中宗とす。天智の子大友位に即く。而して天武叔父を以て簒立し、之に持統、文武、元明、元正、聖武、孝謙、帝大炊に傳へらる。凡七世にして天武の嗣絶ゆ。光仁は天智の孫を以て、入りて大統を繼ぎ、之を其子に傳へらる。是を桓武帝とす。桓武の三子、平城、嵯峨、淳和、兄弟相及ぶ。仁明は嵯峨の子を以て之を繼ぐ。文德は仁明の子を以て又之を繼ぐ。文德、幼子なれども、藤原氏の故を以て、立ちて位に即く。是を清和帝とす。清和の子陽成は、藤原氏に廢せらる。光孝は文德の弟を以て之に代へらる。光孝より下、宇多、醍醐、朱雀、村上、父子相繼ぐ。村上の子冷泉、圓融、兄弟相及ぶ。花山は冷泉の子を以て圓融に繼ぐ。一條は圓融の子を以て花山に代る。三條は又冷泉の子を以て、一條に繼ぐ。一條の子後一條、後朱雀、兄弟相及ぶ。後朱雀より下、後冷泉、後三條、白河、堀河、鳥羽、崇德、父子相繼ぐ。崇德より下源平語中に詳なり。崇德より上文德に至るまで二十一世、其藤原氏の出に非ざりしものは、宇多、後三條のみ。故に皆其權を抑ふるを計りて、在位長からず。能く志を遂げらるゝことなし。然して宇多以後三朝、攝關を置かず。政、天子にあり。白河以後既に位を辭して、猶政を聽く。政、上皇にあり。其餘は皆藤原氏の成すを仰ぎたまへり。而して其政を擅にするは、文德より始ると云ふ。

【大炊】淳仁

帝王廿一世皆藤原氏の出

【政を擅にす】攝關政を擅にするなり

然れども、余謂へらく、藤原氏の驕專なる、其來る久し。獨、文德の時に始りしに非ざるなり。鎌足、天智を助け、力を王室に効し、其子不比等四朝の元老たり。文武、聖武、並に其女を娶りて、孝謙は其外孫女なり。而れども皆淫縱、惠美押勝、孝謙に嬖せられ、殆ど國家を危くす。實に不比等の孫なれば、則其家法知るべきなり。其後光仁、桓武、仁明、獨、藤原氏に出でず。而して平城より以下、文德に至るまで、又みな其出なり。文德の外舅左大臣冬嗣は、不比等四世の孫たり。冬嗣の子良房、又女を文德に納れて、清和を生む。文德、長子の惟喬を立てんと欲して良房を憚り、遂に清和を立つ。則藤原氏の威、人主を懾する、一日に非ざりしこと、又知るべきなり。清和、生れて九歲にして位に即く。良房外祖を以て政を攝す。其子の基經、陽成を廢して、光孝を立て、萬機を攝關す。攝關の號此に始まる。基經の二子時平、忠平あり。忠平は朱雀の朝に攝政す。其二子の實賴、師輔と並に三公に列す。是に於てか、天慶の亂あり。冷泉の二弟、爲平、守平あり。村上、爲平を立てゝ、冷泉の儲貳と爲さんと欲す。而して實賴等、其藤原氏の出に非ざるを以て、之を沮みて守平を立つ。是を圓融とす。是に於てか、安和の變あり。師輔三子あり。伊尹、兼通、兼家と曰ふ。兼家三子あり

鎌足【四朝】持統、文武、元明、元正

藤氏の積威一日に非ず

攝關號の始

藤氏と帝室との關係を論ず

道隆、道兼、道長と曰ふ。皆兄弟政を爭ふ。伊尹の女、華山を生む。兼家の女、一條を生む。故に兼家、道兼をして華山を賺し位を遜れしめて、而して一條を以て之に代らしむ。是れ其最甚しき者なり。後一條より下三帝、皆道長の女の生みし所、是れ其最寵榮を極めし者なり。道長の二子賴通、敎通、相繼ぎて政を執る。而して賴通、師實を生む。師實、忠實を生む。忠實、其長子の忠通を疎じて、少子賴長を愛す。是に於てか、保元の禍あり。忠通の三子基實、基房、兼實あり。基實、基通を生む。基房、師家を生む。兼實、良經を生む。更朝政を源平の際に執る。其論議觀るべき者は、獨、兼實あり。他は位に充つるのみ。其後一姓分れて、五派と爲り、更攝關と爲る。而して其進退は、皆、復天下の事に關らず。錄するに足らざるなり。之を總ぶるに良房より下奕葉鈞を秉る、大抵務めて私門を營み、國家の休戚を以て心に經せず。而して其權を爭ふに當りては、父子、兄弟、且相保たずして、奔競從諛し、朝を擧げて風を成せり。宜なるかな、大亂の是に基すること。而して其終り王室と俱に衰へ、共に頹れ、徒に空名を存せり。哀まざるべけんや。

外史氏曰く。吾れ史を閱して、王覇の廢興せる所以を知るあり。源賴朝、嘗て

兼實

五瑞家【五派】近衛、九條、二條、一條、鷹司、

藤原の末路

藤氏公卿の門閥論を嘲る

大江廣元を奏して、廳使、衛尉と爲す。攝政兼實其不可を議して曰く、「儒家進仕の例に非ず」と。嗚呼門閥を以て賢と爲し、格例を以て政を爲す。其才俊驅りて以て梟雄を資けしめて、猶覺悟せずして此の區々を爭ふ。兼實すら且然り。其他知るべし。向に相家をして國を憂ふるの心と、變に通ずるの略あらしめば、何ぞ王權の外移するを患へんや。顧ふに嚮者、天慶の亂も、亦藤原忠平の廳使を平將門に許さゞりしに由るなり。久い哉、相家の豪傑を沈滯せしむること。抑、將門は自與せんと欲せしなり。而して得失を以て榮辱と爲せり。賴朝は之を其下に與へんと欲せしなり。而して從違を以て損益を爲さざりき。又以て世變を觀る可きかな。

外史氏曰。自我先王之開國也。非無僭亂之臣也。而未有謀危社稷者。獨有一將門焉。而出於平氏。豈非其宗之大恥哉。然能討滅之者。亦出於平氏焉。則足以相償矣。且自將門一伏誅。而後世無復覬覦神器者。可謂彼以其身標天下大戒也。抑使將門得一檢非違使。則未必甘爲反賊。故天慶之亂。皆相門驕傲。壅塞上下之所致也。當其無事也。籠朝廷名爵於私門。而不恤人之失職。及其急也。乃遽揭朱紫。呼號天下。使天下英雄有以

窺朝廷。後世源平爭起。以功邀其上者焉。知其不甚於此也。世稱清盛功不償其罪。舉不臣者。輒以爲稱首。而不知相家不臣已什倍清盛。清盛蓋視而學之。否則何遽至此。詩云。唯其有之。是以似之。自相門之專權也。后皆其女。天子皆其女所生。而卿相皆其子弟親屬。苟非其族類。鋤而去之。雖皇族不能免焉。甚則易置其主。猶視奕棋。清盛所爲。無一不似彼己氏者。而加以驚悍。其意曰。以無功之人。猶擅權寵如此。吾之有大造於王室。何爲而不可。世以其拔與之無漸。羣起咎之。而不言有爲之師者焉。且清盛所以至此。由後白河帝養成其勢爾。夫名爵公器。不可私用。人臣而私名爵。是負其君也。人君而私名爵。是負其先王也。帝濫授先王名爵於清盛。藉以濟其私焉。而長其負功邀上之心。至於不可制。將誰咎哉。雖然。成平氏之勢者。不獨始於帝也。初忠盛受寵於白河鳥羽。連進官爵。人以爲不次。蓋朝廷倚其力。以抑源氏。抑源氏。所以殺相家之權也。源氏自蒲仲賴光。每爲相門之爪牙。攝政兼家之驅。花山也。源賴信實捍衛道途。降至文治之際。朝廷疑關白兼實之助源賴朝。亦非以其世相黨援哉。由是觀之。延平宗以抗相門。院政廟論。所相傳承。其猶寬平之擢任菅氏耶。文武

雖異其意一也。以菅公之賢。猶不能無懲權之意。平氏除重盛之外。皆不學無術。其矜功擅寵。進不知止。曷足尤焉。假設重盛後父而死。盛反其所爲。戒彷子弟。輔翼王室。則雖接踵比隆於藤原氏。可也。而源氏何資以起哉。源氏名爲治暴亂。而其實攘竊王權。源平之罪。未易輕重也。且夫源氏猜忍。骨肉相食。就下與平氏鬬門至死不失懿親。邪世傳平語。倚瑟琶演之。其音悲壯感憤。聽者莫不悽愴。余嘗西遊長門。過壇浦。觀平氏覆滅之處矣。又抵肥後。聞其州有五家山。山谷深阻。平氏或竄匿焉。子孫至今猶有存者。不與外人交通云。夫平氏於王家。功罪相償。天不必勦絕其後。則是其或然也。

外史氏曰。王權之移。於武門。始於平氏。成於源氏。而基之者。藤原氏也。故略敘王室相家之系統。以備參觀云。盛神祖而後三十九世。曰天智。是爲中宗。天智子大友即位。而天武以叔父篡立。傳之持統。文武。元明。元正。聖武。孝謙。帝大欺。凡七世而天武之嗣絕。光仁以天智孫入繼大統。傳之其子。是爲桓武帝。桓武三子。平城。嵯峨。淳和。兄弟相及。仁明以嵯峨子繼之。文德以仁明子又繼之。文德幼子。以藤原氏故立即位。是爲清和帝。清和子陽成。爲藤原氏所廢。光孝以文德弟代之。光孝而下。宇多。醍醐。朱雀。村上。父子相繼。村上之子冷泉。圓融。兄弟相及。花山以冷泉子繼圓融。一條以圓融子代花山。三條又以冷泉子繼一條。一條之子。後一條。後朱雀。兄弟相及。後朱雀而下。後冷泉。後三條。白河。堀河。鳥羽。崇德。父子相繼。崇德而下。群於源平語中。崇德而上。至於文德。廿一世。其非藤原氏之出者。宇多。後三條而已。故皆計抑其權。而在位不長。莫能遂志。然宇多以後三朝。不置攝關。政在天子。白河以後。已辭位而猶聽政。政在上皇。其餘皆仰藤原氏之成。而其擅政始於文德云。然余謂藤原氏驕專。其來久矣。非獨始於文德時也。鎌足助天智。效力王室。其子不比等。爲四朝元老。文武。聖武。並娶其女。而孝謙其外孫女也。而皆淫縱。惠美押勝。變於孝謙。殆危國家。實不比等孫。則其家法可知也。其後光仁。桓武。仁明。獨不出於藤原氏。而自平城以下。至於文德。又皆其出。文德外舅左大臣冬嗣。爲不比等四世孫。冬嗣之子良房。又納女文德。生清和。文德欲立長子惟喬。而憚良房。遂立清和。則藤原氏之威懾人主。非一日。又可知也。清和生九歲即位。良房以外祖攝政。其子基經。廢陽成。立光孝。關白萬機。攝關之號始此。基經二

子。時平。忠平。忠平。攝政於朱雀之朝。與其二子實賴師輔。並列三公。於是乎。有天慶之亂。冷泉二弟。爲平。守平。村上欲立爲平。爲冷泉儲貳。而實賴等以其非藤原氏出。沮之。而立守平。是爲圓融。於是乎。有安和之變。師輔三子。曰伊尹。兼通。兼家。兼家三子。曰道隆。道兼。道長。皆兄弟爭政。伊尹女生花山。兼家女生一條。故兼家令道兼賺花山遜位。而以一條代之。是其最甚者也。後一條而下三帝。皆道長女所生。是其最極寵榮者也。道長二子。賴通。教通。相繼執政。而賴通生師實。師實生忠實。忠實疎其長子忠通。而愛少子賴長。於是乎。有保元之禍。忠通三子。基實。基房。兼實。基實生基通。基房生師家。兼實生良經。更執朝政於源平之際。其論議可觀者。獨有兼實。他充位而已。其後一姓分爲五派。更爲攝關。而其進退皆不復關天下事。不足錄也。總之。良房而下。麋葉秉鈞。大抵務營私門。不以國家休戚經心。而當其爭權。父子兄弟。且不相保。奔競從諛。舉朝成風。宜乎。大亂之兆。於是。而其終與王室俱衰其頹。徒存空名。可不哀邪。外史氏曰。吾閱史。有知王覇所以廢興也。源賴朝嘗奏大江廣元。爲廳使衙尉。攝政兼實議爲不可。曰。非儒家進仕之例。嗚呼。以門閥爲賢。以格例爲政。驅其才俊。以資梟雄。而猶不覺悟。爭此區區。兼實且然。其他可知。向使相家有憂國之心。通變之略。何患於王權之外移邪。顧嚮者天慶之亂也。亦由藤原忠平之不許廳使於平將門也。久矣哉。相家之波滯豪傑也。抑將門欲自與也。而以得失爲榮辱。賴朝欲與之其下也。而不以從違爲損益。又可以觀世變矣夫。

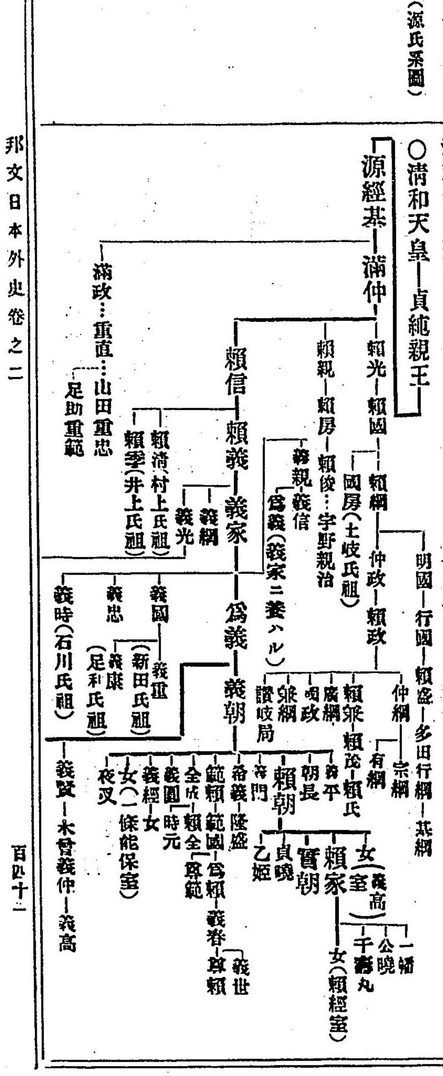
邦文日本外史卷之一終

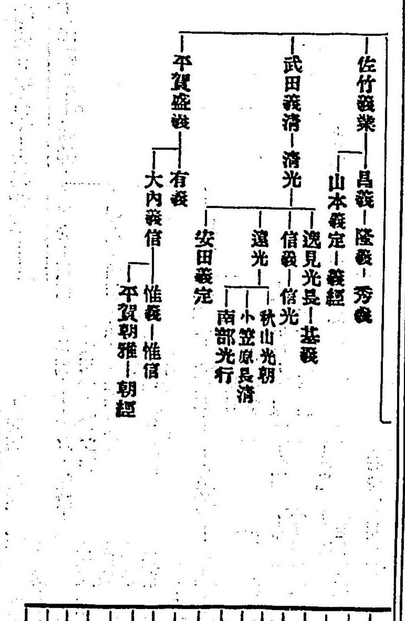
邦文日本外史卷之二

源氏正記

源氏上

（源氏系圖）





源氏系統
貞純親王

六孫王經基

源氏は、清和天皇より出づ。天皇の宮人王氏、貞純親王を生む。四品に叙し、兵部卿に任せられ、桃園親王と稱せり。親王二子あり。經基と曰ひ、經生と曰ふ。皆源氏姓を賜はる。

經基、武幹あり、騎射を善くす。親王は帝の第六子たりしを以て、世、經基を呼びて六孫王と曰ひき。天慶中、武藏介と爲る。平將門の反せし時、間行して、入りて之を奏す。因りて從五位下に拜す。藤原忠文に從ひて、將門を伐ち、又小野好古に從ひて賊黨藤原純友を伐つ。終に正四位下に叙し、鎮守府將軍に任せらる。子孫世武臣たり。其旗白きを用ゐる。

經基の子多田滿仲
【父の職位】正四位下、鎮守府將軍
安和二年安和の變

八子あり。長は滿仲、攝津の多田に生る。父の職位を襲ぎ、關東の士心を得たり。冷泉帝安和二年、中務少輔橘繁延、前相模介藤原千晴等、密に爲平親王を挾みて關東に奔り、亂を爲さんことを謀る。滿仲これに與る。已にして滿仲、繁延と隙あり。遂に自首す。攝政藤原實頼の旨を以て、弟滿季と與に繁延、千晴を捕へて之を流す。是時に當りて京師の騷擾、天慶の亂の如しと云ふ。

滿仲、嘗て謂へらく。武臣天子を衛るに、利刀無かる可らずと。乃、筑前の良冶某を召し、鍛錬すること六旬にして、二刀を得たり。名づけて鬚截といひ、膝圓といふ。之を子孫に傳へぬ。滿仲、官左馬頭に至る。卒するに及びて、從三位を贈らる。

鬚切、膝丸

滿仲の子
大和源氏
頼光

四子あり。頼光、頼親、源賢、頼信。源賢、僧となる。頼親、興福寺の僧と鬪ひしに坐して、流に處せらる。子孫大和に居り、大和源氏と稱す。

頼光、材武に名あり。東宮大進たり。永延中、攝政藤原兼家、新第を造り、之を落す。頼光、馬三十匹を遺りて、以て賓客に分つ。兼家の子道隆、攝政を襲ぐ。

其弟右大將道兼、之と權を爭ふ。頼信、素より道兼に事へたり。頼光に謂て曰く、「吾が力能く道隆を刺し、我が主をして之に代らしめん」と。頼光、其口を掩ひて曰く、「妄言する母れ。事敗るれば、肝腦地に塗れん。汝が主も亦豈晏然として止る可けんや」と。頼信、乃止む。頼光、三子あり。長は頼國、子孫世多田に居り攝津源氏と稱す。

攝津源氏

平忠常の亂

頼信、尤勇敢にして、善く兵を用ゐる。長元中甲斐守と爲る。會上總介平忠常、亂を作す。朝廷上野介平直方をして東海、東山の兵を將ゐてこれを討たしむ。三歳にして平ぐること能はず。乃、頼信を以て常陸介となし、之を伐たしむ。頼信、命を聞きて卽往く。人其兵の集るを待ちて進まむことを勸むれども聽かず。遂に子の頼義等を率ゐて。進みて鹿島に赴く。忠常舟を奪ひ、柵を海岸に列ぬ。濟る可からず。頼信、弱を示して之を怠らせんことを計り、使をして和を請はしむ。忠常肯せず。是に於て、衆を聚めて戰を議す。衆謂へらく、「其れ舟筏なし。宜しく海を循りて赴き攻むべし」と。頼信曰く、「不可なり。賊險を恃む。吾れ直に渡りて、其備へざるを攻めば、一戰にして下す可きなり。聞く、淺き處ありて騎渡すべしと。軍中豈之を知る者有らんか」と。高文といふ者あり。自之を知ると稱し、馳せて海に入り、行陣を立てゝ表と爲す。頼信、軍を麾きて之に從ふ。忠常驚怖し、出でゝ降る。之を斬り、首を京師に効す。功を以て從四位上に叙し、上野、常陸介に任ず。頼信謝して曰く、「臣天威を藉り、刃に血ぬらずして强賊を降すを得たり。何の功か之れ有らん。臣老いたり、遠任に堪へず。願はくは改めて丹波を守るを得ん。敢て望む所に非るなり」と。許されず。

頼信、忠常を斬る

子の頼義、沉斷にして武略あり。小一條院の判官代となる。毎に獵に從ひ、善く弱弓を用ゐて猛獸を殪す。平直方、其材藝を奇とし、女を以て之に妻す。既にして頼義、八幡神より劍を賜ふと夢み、其妻姙むことありて、子を生む。頼義喜びて曰く、「此兒、必我が家を興さん」と。因りて名づけて義家と曰ふ。長ずるに及びて八幡の祠前に冠し、八幡太郎と稱す。人と爲り英果にして、射を善くす。征行ある毎に、未だ嘗て從はずんばあらず。頼義相模守となる。州俗、武を好む。頼義、義家、撫するに恩威を以てす。豪傑爭ひ服し之が用を爲すを樂しむ。

頼義

八幡太郎

奥州の安倍氏略系

（安倍氏系圖）

○忠頼―忠良―頼時―貞任―千代
　　―宗任
　　―正任
　―爲元

└貞昭
　├家任
　├重任
　└則任
└女（伊具十郎要）
└女（清衡、家衡母）

前九年戰
安倍頼時

是時に當りて陸奥の豪傑安倍頼時、諸部落を併せて、六郡の酋長と爲る。國守、秋田城介と、兵を合せて之を伐つ。頼時、逆へ擊ちて大に之を敗る。白河關以北海に傳るまで、盡く叛き附く。朝議、頼義を以て陸奥守と爲す。義家及び次子の義綱と、兵を率ゐて赴き伐つ。大赦に會ふ。頼時、兵を解きて降り、頼義に臣として事ふ。頼義遂に鎮守府將軍を兼ぬ。

永承七年

永承七年、任滿ちて、將に還らんとし、府に入りて事を視る。頼時、厚く其軍を犒ふ。既にして罷めて國府に歸り、阿栗川に宿す。人あり、夜、藤原光貞の營を襲ふ。初め頼時の長子貞任、婚を光貞に請へども聽さず。故を以て之に報せしなり。

衣川關

是に於て、頼義、貞任を執へんと欲す。頼時、乃兵を擧げて反し、衣川關に據る。頼義奏して再任を請ひ、兵を發して之を伐つ。頼時の婿藤原經清、平永衡、來りて官軍に屬す。或人、永衡、虜と私ありと告ぐ。頼義、永衡を捕へてこれを

頼時誅せらる

天喜五年

斬る。經清も亦自ら安んぜず。遁れて頼時に歸す。頼時の族富忠、勇にして衆あり。頼義、勅旨を以て諭し、官軍に應せしむ。頼時も亦親往きて之を說く。頼義富忠をして兵を伏せて要擊せしめ、頼時を獲て、之を誅す。而れども貞任の軍猶張る。貞任魁傑にして、善く兵を用ゐる。官軍數利あらず。歲比に飢に屬し糧食給らず。天喜五年、頼義、奏して兵食を徵せんことを請ふ。其十一月、自兵千八百を將ゐて、貞任を河崎に伐つ。大風雪に會ひて、人馬凍飢す。貞任選兵四千を以て、鳥海に戰ひ、左右の翼を縱ち、大に我が軍を敗る。我が軍餘る所僅に六騎なり。虜、急に之れを圍む。矢下ること雨の如し。頼義、義家みな馬を傷つく。從騎下りて之を授く。義家、藤原範明等と、縱横に奮擊す。虜兵相警めて曰く、「八幡太郎なり」と。遂に退き去る。

鳥海の戰

源頼義
【出羽守】頼義
【新守】源齊頼
頼義の再從兄弟

頼義既に免れ、乃、奏すらく、「兵食の至らざる、遠近皆然り。且出羽守、臣と力を戮せず」と。是に於て、詔して出羽守を罷む。新守至るも、亦敢て來り援けず。貞任の勢益張る。經清をして私符を以て官物を徵さしむ。令して曰く、「白符を用ゐよ、赤符を用ゐる勿れ」と。赤符は官符なり。頼義、益困しむ。對守せしこと數歲なり。

康平五年

清原光頼、武則

【營岡】陸奥

【萩埒】陸奥

【小松】出羽小松柵

康平五年、任滿ち、高階經重に詔して代り任せしむ。國民頼義を慕ひて、經重に服せず。經重已むを得ずして去る。

是に於て、頼義必虜を滅ぼさんことを矢ひ、人をして出羽の曾清原光頼、及び弟武則に說かしめ、諭すに大義を以てせしむ。七月、武則、子弟以下萬餘人を率ゐて至る。頼義、三千人を以て營岡に會議して、七陣と爲し、武則等を以て分ちて之に將たらしめ、而して自第五陣に將たり。進みて萩埒に至る。將に小松の柵を攻めんとし、凶日を以て果さず。清原氏の候騎、誤りて火を民家に失するに會ふ。柵中大に囂し。頼義、武則に謂て曰く、「機失ふ可らず。日に拘りて何をか爲さん」と。對へて曰く、「我が兵怒りて火の如し。宜しく此時に及びて之を用ゐるべし」と。乃騎兵を遣し、其衝路を絶ち、而して步兵薄りて之を攻む。深江是則等、死士を以て險を冒し、柵に入る。虜大に援る。貞任、弟の宗任をして、出でて戰はしむ。頼義、麾下を以て横に擊ちて之を破る。虜の遊軍、又我第七軍を襲ふ。亦擊ちて大に之を破る。虜遂に柵を棄てゝ走る。乃、柵を焚きて退く。霖雨に會ひて留ること旬餘。磐井以南盡く宗任に應じて、我が糧道を侵奪す。頼義兵を分ちて赴き拒く。九月、貞任我が兵の寡きを瞰ひ、精騎八千を以て來り襲

長蛇陣

衣川險

【二樋】大麻生野、瀬原鳥海の樋

【三樋】黑澤尻鶴脛、比與登利、出羽

【厨川】出羽厨川柵

ふ。武則、曰く、「我れ客兵にして、糧乏し。利速に戰ふに在り。彼れ坐ながら之を困しめんとせずして來り戰ふは、是れ自、首を授くるなり」と。頼義大に喜び、長蛇陣を爲し、逆へ戰ふこと半日、大に之を破る。走るを追ひて、磐井河に至りて曰く、「吾れ機に乘じて遂に其巢穴を擣かんと欲す」と。則、武則をして八百騎を以て、夜之を追はしむ。武則更に死士五十を揀び、間道より貞任の營を焚き、內外より合擊す。虜の軍大に亂れ、走りて衣川の險を保つ。頼義、義家、進みて之を攻む。河水方に漲る。武則等、戰利あらず。河岸樹有りて水を覆ふを見、武則、矯捷の者をして樹を攀ぢて河を踰え、火を虜の營に縱たしむ。貞任駭き走る。頼義追擊して、連に二柵を破り、進みて鳥海の柵を拔く。乃、將士を會して飲み、武則に謂て曰く、「吾れ此に至るを得しは、子の力なり。子吾が面目を覩る奚若」と。對へて曰く、「臣、將軍の爲に鞭を執る。何の力か之れ有らん。將軍、忠を天子に盡し、野に暴露する十餘年、頭髮みな白し。天地爲に動き、將士爲に奮ふ。虜を破る河を決するが如し。臣、今將軍を覩るに、髮復半黑なり。即し貞任を獲ば、則、全黑とならん」と。頼義喜び、又進みて三柵を破り、貞任を追ひて、厨川の柵に至る。柵、水澤に據り、壘を高くし、塹を深くし、塹中に刄を植

て、死を以て之を守り、我が兵數百人を殺す。頼義、人家を壊ち塹を堙めしめ、馬を下りて遙に京師を拜し、手に火を取り、號して神火と爲し、之を投ず。風起るに會ひ、壘柵皆火となる。我が軍因りて急に之を圍む。虜、殊死して戰ふ。武則其一角を解く。虜逃れ走る。頼義擊ちて之を塵にす。貞任、乃、獨身出でて圍ふ。我が兵之を叢刺す。殊せず。之を巨楯に載せ、六人にて之を舁きて至る。頼義之を視るに、腰圍七尺、長之に稱ふ。頼義其罪を數へて之を斬る。其子千代其弟重任に及ぶ。經清も亦縛せられて至る。頼義命じて鈍刀を用ゐて之を斬る。曰く、「猶よく白符を用ゐるか」と。宗任等皆降る。頼義、柵中に虜の掠むる所の美女數十人あるを見、盡く分ちて將士に賜ふ。六年二月、人をして貞任以下の首を齎して、闕下に献せしむ。詔して正四位下に叙し、伊豫守に任ず義家從五位下に叙し、出羽守に任ず。義綱を左衛門少尉と爲し、清原武則を

貞任捕はれて斬らる

宗任降る

六年

前九年、後三年役地圖

前九年後三年役地圖

出羽

陸奥

七年

頼義上書

鎮守府將軍と爲す。八月、頼義、八幡の祠を鎌倉鶴岡に建てゝ戰功を賽す。七年春、頼義、義家諸の降虜を以て入朝し、奏して有功の將士を賞せんことを請ふ。朝議未だ許さず。故を以て未だ任に赴かず。任國登らず。私資を以て賞賦を濟す。是の如くせしこと二年、上書して重任を請ひて曰く、「臣聞く、人臣勳功を建てゝ、恩賞を受くることは、和漢古今同じき所なり。是を以て或は徒隷より起りて、金紫を係け、卒伍より出で、將相に至る者ありと。頼義、功臣の裔を以て恪勤の節を効すこと舊し。適東夷蜂起し、郡縣を侵盜し、人民を鈔略す。六郡の地、皇威に服せざる者數十年なり。近歲に及びて、日に益猖獗なり。頼義、永承六年を以て、任を彼州に受け、天喜中に至りて、兼て鎮府に帥たり。臣、鳳凰の詔を喇み、以て虎狼の國に向ひ、堅を被り鋭を執り、身に矢石を受け、千里の外に暴露して、萬死の途に出入す。天子の威と、將卒の力とを藉りて、終に其功を奏するを得たり。其渠帥安倍貞任、藤原經清等、皆誅戮に伏し、首を京師に傳ふ。其餘の醜虜安倍宗任等、手を束ねて歸降す。其巢窟を掃ひ、之を縣官に收む叛逆の徒、皆王民と爲る。乃、功績を錄することを蒙り、伊豫を守るを得たり。臣、聖恩を忝くし、欽荷に暇あらず。而して餘燼を鎮服するを以て、猶奥地に留

る。且、征戰の際、功勞有る者十餘人、爲に抽賞を請へども、未だ裁許を得ず。是を以て敢て任に赴かず。況や去歲九月、任符を賜はる。遲引の罪、已むを獲ざるに出づ。四歲の任、空く二稔を過ぎ、官物を徵納する能はず。而るに封家納官、督責雲の如し。仍りて私物を以て、且進濟を償へり。彼州の吏言を聞くに、頻年旱凶にして、田に秋實なく、民に菜色ありと。臣謹みて傍例を按ずるに、境に涖むの年限を延べて、以て闔國の凋弊を救ふ者、其人寔に繁し。況や希世の功を致す者、寧ぞ殊常の恩無からんや。昔班超は三十年を以て西域を平げぬ。今頼義は十二歲を以て東夷を誅せり。遲速優劣は、採擇する難きに非ず。饒、千戶の封を受くる無きも、曷ぞ重任の典を許さざらんや。天恩を望み請ふらくは、臣が意を哀矜して、忝く允可を賜ひ、臣をして徐に興復の計を處し、以て辨濟の方を致すを得られんことを。臣、懇欵に任へず」と。

宗任

是より先、諸の降虜皆流に處せらる。義家、宗任の勇を愛して、特に之を親信す。一夜、私する所の女子を問はんと、車に乘りて往く。獨宗任從ふ。心陰に報復を圖り、刀を拔きて車中を窺へども、其睡るを見て敢て發せず。後遂に心を傾けて之に事へきと云ふ。

承暦三年【美濃亂】源重宗、源國房、兵を構ふ

延久三年

永保三年

義家、嘗て藤原頼通が第を過り、陸奥の戰事を談ず。博士大江匡房、別室に在りて、之を聞きて曰く、「好男子、惜むらくは未だ兵法を知らず」と。宗任微に之を聞き、慍りて義家に告ぐ。義家曰く、「其或は然らん」と。匡房の出づるを見て、之に禮し、遂に就きて學ぶ。

承暦三年、美濃亂る。義家に詔して往きて之を定めしむ。亂人之を聞きて皆遁る。

延久三年、陸奥亂る。守源頼俊討ちて之を平ぐ。頼俊は頼親の孫、頼義の從姪なり。

永保二年、頼義卒す。

奥州の藤原氏略系

○藤原鎮足……魚名……秀郷―千晴―千清―正頼―頼遠―亘理經清―

（藤原氏系圖）

―清衡―其衡―秀衡―國衡
　　―家清　　―泰衡
　　―正衡　　―忠衡
　　―清綱―女（嗣信忠信世）
　　―經元　　―高衡
　　―酒衡
　　―頼衡

奥州の清原氏略系

○天武天皇――舍人親王……深養父……基真――基光――光方――武則
　└武貞――眞衡――成衡
　└女（吉彦秀武妻）
　└清衡（實は藤原經清の子）
　└武衡
　└家衡

（清原氏系圖）

後三年の戰

吉彦秀武

三年、義家に詔して陸奥守と爲し、鎮守府將軍を兼ねしむ。初め清原武則、二子あり。武貞、武衡と曰ふ。武貞、眞衡を生む。又藤原經清の寡婦を納れて、家衡を生む。亦經清の子清衡を養ふ。而して眞衡を嫡嗣と爲す。家衡、清衡、以下皆之に臣として事ふ。其姑夫吉彦秀武、事を以て眞衡を怨み、兵を擧げて之に背く。眞衡赴きて之を攻む。秀武、人をして家衡、清衡に說きて、其虛を襲はしむ。眞衡、乃、還り救ふ。已にして義家至ると聞き、迎へて之を饗し、復、往きて秀武を攻む。二弟又來り襲ふ。義家、兵を從へて其城に入り拒ぎて之を卻く。義家、自、出羽に赴きて、家衡を攻む。利あらずして還る。武衡喜び來りて、家衡に謂て曰く、「子は八幡太郎に克つ。吾曹の榮なり。當に與に力を戮すべし」と。遂に兵を合せ金澤の柵に據る。義家大に怒る。

金澤柵

寛治元年

鎌五郎景政
【敵】島滝彌三郎

寛治元年九月、自數萬騎を將ゐて之を攻む。柵を去ること數里にして雁行の亂るゝを望み見て曰く、「是れ伏有らん」と。兵を縱ちて搜り索む。果して獲て之を塵にす。衆に謂て曰く、「兵法に言はく、『鳥亂るゝ者は伏なり』と。我れ學ばざらば則殆からん」と。遂に進みて柵を圍む。相摸の人鎌倉景政戰を挑む。敵射て其右目に中つ。景政箭を拔かずして己を射たる者を索め、終に之を射殺す。武衡險に據りて死鬪し、多く我兵を傷く。又卒千任といふ者をして、義家を詬言せしめて曰く、「汝の父名簿を我に納れて、以て敵に克つを獲たり。簿、見に我に在り汝何を以て我に負くか」と。義家怒りて、之を攻めて、未だ下す能はず。

新羅三郎

義家の弟義光、新羅三郎と稱す。亦勇智ありて技能多し。是の時右兵衛尉たり。京師に在りて、兄の軍利あらざるを聞き、奏して赴き援はんことを請ふ。許されず。遂に官を舍てゝ之に赴く。義光素より音を好む。嘗て笙を豐原時元に學ぶ。

豐原時秋

是の時、時元已に死せり。其孤子時秋、義光を送りて足柄山に至り、月明なるに會ふ。義光因りて笙を吹き、盛く學びし所を授けて訣別し、遂に陸奥に至る。義家喜び泣きて曰く、「吾れ汝を見る、猶先君を見るが如し」と。乃、與に俱に進み攻む。柵固くして拔けず。義家會食に因りて、勇怯の兩列を設け、以て戰士を勵

ます。義光の從臣腰秀方、日として勇列に列らざるなし。吉彦秀武、降りて我軍に在り。進みて說く、「宜しく久きを持し、之を困しましむべし」と。義家之に從ひ、令を下して戰を休む。武衡、人をして來り言はしめて曰く、「我が軍、事無きを苦しむ。我に健兒鬼次といふ者あり。請ふ、一力人を得て之を角べん」と。乃ち鬼武といふ者を遣す。勝ちて之を殺す。廚、愧恥して出でゝ戰ふ。

鬼次
鬼武

已にして廚、食盡き、羸兵を出して來り降らしむ。秀武曰く、「是れ糧を紓するなり。宜しく斬るべし」と。義家又之に從ふ。廚益窮しみ、義光に因りて降を乞ふ。聽さず。再、乞ひ、且、義光に、柵中に臨みて、要結を爲すを請ふ。義光往かんと欲す。義家之を止む。乃、秀方をして往かしむ。廚、刃を露して之を待つ。秀方夷然たり。武衡之に賂ふに金を以てす。秀方之を卻けて曰く、「我が輩將に旦暮之を分ち取らんとす。汝が賂を煩さゝるなり」と。刀を撫して出づ。時に天漸く寒く、軍士凍を恐る。一夜、義家令を軍中に出して曰く、「我が營を燒きて煖を取れ。今夜、廚の柵陷らん。復、營を用ゐざるなり」と。黎明に柵中火起り、家衡遁れ、武衡池水の中に潛る。義家之を獲て、請ゐて曰く、「而が父、吾が父に屬して功を樹て。吾が父請ひて官爵を授けたり。若、怨を以て德に報ずるは何ぞや。名簿果して安に在る」と。因りて千任を執へて其舌を抜き、武衡を斬らしむ。武衡哀を義光に乞ふ。義光請ひて曰く、「降る者は宜しく赦すべし」と。義家、色を作して曰く、「過を悔いて來り歸す。宗任の如き者、是れ之を降ると謂ふのみ。擒へられて活を求むるは、降るに非ず」と。遂に之を斬る。家衡は其下に殺さる。義家、武衡、家衡以下の首を獻せんと欲して、奏して官符を下さんことを請ふ。廷議、其を私鬪なりと謂て許さず。故を以て將士を賞せず。遂に首を途に棄てゝ還る。

金澤柵陷る

（源義背像）

義家、父祖の業を承ぎ、善く將士を撫す。其陸奥を征するや、前は九年、後は三年。東國の士民、皆其恩信に服し、相與に共に請ひて其子弟を留め、之を擁戴して、自其家人と呼び、義家を稱して八幡公と曰ふ。是時に當りて八幡公の威名、朝野に徧し。白河法皇、嘗て夢魘を患ひ給ふ。義家に詔して、其

天仁元年義家卒す

兵器を献せしめて、之を鎮む。義家一の玄弓を献じて御枕の上に建つ。即、患無し。法皇問ひて曰く、「乃、東征に執る所なる母からんや」と。對へて曰く、「臣記せざるなり」と。法皇これを嗟賞す。然して義家の官位甚だ卑し。正四位下右衛門尉を以て天仁元年に卒す。年六十八。

義家の子義忠

六子あり。義宗、義親、義國、義忠、義時、義隆。義忠、最、名あり。官、檢非違使に至る。季父義光之を嫉み、義忠の臣鹿島某を誘ひて、陰に之を殺さしむ。

【鹿島某】三郎殺連

義綱

初め義忠の叔父義綱、義家と相惡みて、兵を構ふ。詔して兩家の兵、京師に入るを禁せられて、事寢むを得たり。後義綱陸奥守を以て、擊ちて亂人平師妙を出羽に平ぐ。功を以て從四位上に拜す。其黨、頗、廣し。此に至りて、朝議、義忠の死を以て、義綱の子義明に出づとし、兵を遣して之を殺さしむ。義綱、甲賀山に據る。源爲義に詔して、之を討たしむ。義綱、自、髡して降る。佐渡に流す。

甲斐源氏

義光の子孫、世甲斐に居る。因りて甲斐源氏と稱す。

爲義

爲義は、義親の子なり。義親、對馬守と爲り、罪を以て誅せらる。爲義幼にして孤なり。義家之を奇とし、以て義忠の嗣と爲さんと欲す。甲賀の捷に、左兵衛尉に拜す。時に年十四なり。其明年、義家卒す。爲義、遂に直に義家の後に承ぐ。

爲義の子餘四人嫡爲朝

居ること五歲、南部の僧兵叡山を攻む。又爲義に命ず。爲義、十七騎と、栗子山に逆へ擊ちて、之を走らす。後十餘歲、累遷して檢非違使左衛門大尉と爲り、從五位に叙せらる。

爲義、二十三子あり。長を義朝と曰ふ。尤、善く戰ふ。相模の鎌倉に居る。關東の家人盡く之に附く。下野守と爲る。第八子を爲朝と曰ふ。猿臂にして善く射る。幼にして諸兄を凌犯す。爲義之を患ひて、之を豐後に逐ふ。鎭西八郎と曰ふ自、九國總追捕使と稱し、妻の父阿曾忠國を以て鄕導と爲し、數菊池、原田の諸大姓と戰ふ。十五歲に比びて、遂に盡く九國を伏す。九國の守介交、之を訴ふ。朝廷、太宰府に敕して之を討たしむれども、克つこと能はず。爲義坐して官を免せらる。爲朝聞きて之を病ひ、須藤家季等二十八人と俱に京師に至りて、罪を待つ。

近衛帝崩

是歲、近衛帝崩ず。帝は鳥羽法皇の寵姫得子の生む所たり。夙く禪を崇德上皇に受く。帝崩ずるに及びて、上皇、位に復せんことを願はる。法皇、得子と議して、帝の兄を立てゝ位に卽かしむ。是を後白河帝とす。帝の保元元年、法皇疾あり。得子を召して之に一筐を授け、戒めて曰く「緩急之を啓け」と。七月、法皇崩ず。

【帝の兄】雅仁保元元年鳥羽法皇崩

保元の亂上皇兵を募る

上皇、兵を起して白河殿に據る。左大臣藤原頼長謀主となりて、四に兵を募る。京畿大に援る。得子乃筐を啓けば、則、武臣十人の名を書せり。義朝之が首たり。即、義朝を召す。義朝乃兵を率ゐて、族の頼政等と倶に高松殿を衛る。頼政は頼光五世の孫也。

【八甲】薄金、除丸、裾無、袖姑、八龍、月數、日數、源太産衣【實朝】鶴丸

安藝守平清盛も亦召に應じ入りて衛る。

是に於て、上皇使者をして爲義を召さしむ。爲義辭して曰く、「臣老羸、復、平昔に非ず。長子義朝勇にして衆あり。而れども既に禁内に赴けり。餘子は獨爲朝用ゐる可し。君請ふ、之を用ゐ給へ、臣を以て爲す毋れ。且、臣、家に傳へし所の八甲、風の漂はす所を夢む。臣、心に之を惡む。往くも必利あらじ」と。使者之を强ふ。爲義已を得ずして、諸子を率ゐて之に赴く。上皇喜び以て判官代と爲し、邑及び寶劔を賜ひ、四子頼賢を以て藏人と爲す。因りて會して戰を議す。爲朝進み言て曰く、「臣、大戰二十たび。小戰二百たび。以て九國を芟鋤せり。少を以て衆を擊つは、毎に夜攻に利あり。臣請ふ、今夜、高松殿を襲ひ、其三方に火して、これを一面に要せん。其善く戰ふ者は獨、臣の兄義朝あり。然れども臣一矢もて之を斃さん。平清盛輩の如きに至りては、臣鎧袖一觸せば、皆、自、倒れんのみ。則、乘輿必出でざるを得ず。臣乃矢を其從兵に加へ、輿を此に徙して、陛下を彼に奉せんこと、易きこと掌を反すが如し。則、東方未だ白けざるに、大事集らん」と。頼長曰く、「爲朝年少くして氣を負ふ。言ふ所皆鄙人私鬪の事なり。安ぞ之を帝王の戰に施す可けんや。兩帝、國を爭ひたまふ、當に堂々の陣を用ゐるべし。南都の僧兵、召に應じて且に至らんとす。軍を成し以て戰ふも、未だ晚しと爲さざるなり」と。爲朝退き、竊に罵りて曰く、「咳、長袖、惡ぞ兵を知らんや。家兄謀あり。將に我が爲さんと欲する所に出でんとす。僧兵寧ぞ須つ可けんや」と。

頼長爲朝の議を排す

保元物語（新院御所各門々固附軍評定の事）

新院は、齋院の御所より北殿へ遷らせ給ふ。左府は車にて參り給ふ。白河殿より北、河原より東、春日の末にありければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門面に、東西に門二つあり。東の門をば平馬助忠正承りて、父子五人、井に多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義承りて、父子六人して固めたり。其勢百騎許には過ぎざりけり。是こそ猛勢なるべきか、嫡子義朝に附きて、多分は内裏へ參りけり。爰に鎭西八郎爲朝は、我は親にも連れまじ、兄にも具すまじ、高名不覺し紛れぬ樣に、只一人如何にも强からん方へ差し向け給へ、縱令千騎もあれ、万騎もあれ、一方は射拂はんずるなりとぞ申しける。依りて四河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば、左衛門